花信風法話

心に花をさかせよう

永観堂法主 中西玄禮

目次

1	恩送り (2010/6).....	4
2	甲子園の夏 (2010/7).....	4
3	良き出逢いが感動を生む (2010/8).....	5
4	拈華微笑 (ねんげ・みしょう) (2010/8 /13).....	6
5	越中八尾と永観律師 (2010/9/01).....	6
6	月に想う (2010/10/01).....	7
7	共に是れ凡夫のみ (2010/11/01).....	8
8	烏兎忽々 (うとそうそう) (2010/12/01).....	8
9	みかえりの心 (2011/1/05).....	9
10	心に花を (2011/2/01).....	10
11	花語らず (2011/3/01).....	11
12	代受苦者 (2011/4/01).....	11
13	心遣いと思いやり (2011/5/02).....	12
14	永観堂の悲田梅 (ひでんばい) (2011/6/01).....	13
15	「初心忘るべからず」(2011/7/1).....	14
16	ひまわりの花 (2011/8/1).....	15
17	その命、私にください (2011/9/1).....	16
18	野の花のいのち (2011/10/1).....	16
19	幸せの在りか (2011/11/01).....	17
20	人生の暮れを染め上げる (2011/12/1).....	18
21	辰の年に思う (2012/1/1).....	19
22	泥かぶら (2012/2/1).....	20
23	同悲する心 (2012/3/1).....	20
24	恨みを捨てよ (2012/4/1).....	21
25	母心大悲 (2012/5/1).....	22
26	拝啓、親父殿 (2012/6/1).....	23
27	如自当知 (によじとうち 汝自らまさに知るべし) (2012/7/1).....	24

28	乳哺養育の恩 (にゅうほよういくのおん) (2012/8/1).....	25
29	アメリカ・インディアンの教え (2012/9/01).....	25
30	月見る月は多けれど (2012/10/01).....	26
31	露の世は露の世ながら (2012/11/01).....	27
32	童心浄土 (2012/12/01).....	28
33	人生五計 (2013/1/01).....	29
34	一休さんの遺言状 (2013/2/01).....	30
35	出あい ふれ愛めぐり愛 (2013/3/01).....	31
36	命なりけり (2013/4/01).....	32
37	青嵐に吹かれて (2013/5/01).....	32
38	体解 (たいげ) (2013/6/01).....	33
39	星に願いを (2013/7/01).....	34
40	お盆随感 (2013/8/01).....	35
41	彼岸からの声 (2013/9/01).....	36
42	二度とない人生を (2013/10/1).....	37
43	人生の錦秋 (2013/11/1).....	37
44	我、八十にして・・ (2013/12/1).....	38
45	誓願 (2014/1/1).....	39
46	星の王子さま (2014/2/1).....	40
47	雛まつり (2014/3/01).....	40
48	花まつり (2014/4/01).....	41
49	ライム・ライト (2014/5/01).....	42
50	一輪の花にも無限の愛を (2014/6/01).....	43
51	沙羅双樹の花の色 (2014/7/01).....	43
52	お位牌ペンダント (2014/8/01).....	44
53	彼岸花 (2014/9/01).....	45
54	木のいのち (2014/10/01).....	46
55	いい夫婦の日 (2014/11/01).....	46
56	一道を行く (2014/12/01).....	47
57	羊歳に想う (2015/1/01).....	48
58	あきず/あせらず/あきらめず (2015/2/01).....	49
59	多生の縁 (2015/3/01).....	49
60	妻は観音さま (2015/4/01).....	50
61	おふくろさん (2015/5/01).....	51
62	紫陽花の雨 (2015/06/01).....	52
63	慈眼施 (2015/07/01).....	52
64	4人の妻 (2015/8/01).....	53
65	輝く「朗人」であれ (2015/9/01).....	54

66	こころの触れ合い (2015/10/01).....	55
67	一日作さざれば一日食らわず (2015/11/01).....	55
68	篝火 (かがりびばな) (2015/12/01)	56
69	新年を迎えて (2016/1/01).....	57
70	信の意義 (2016/2/01)	57
71	お水取り (2016/3/01)	58
72	心ひろびろと爽やかに (2016/4/01)	59
73	良寛さんの見舞状 (2016/5/01).....	60
74	幸福を育てる三つの田 (2016/6/01)	60
75	水に学ぶ (2016/7/01)	61
76	平和の祈りを (2016/8/01).....	62
77	慈心相向 (2016/9/01)	63
78	歳月は川の流れの如く (2016/10/01)	63
79	無声の念仏 (2016/11/01).....	64
80	希 望 (2016/12/01).....	65
81	新しい年を迎えて (2017/1/01).....	66
82	お釈迦様の遺言 (2017/2/01)	66
83	同行二人 (2017/3/01)	67
84	柳絮飛ぶ (2017/4/01)	68
85	邂逅 (2017/5/01).....	69
86	鑑真和上を偲ぶ (2017/6/01)	69
87	柔軟心 (2017/7/01).....	70
88	平常心 (2017/8/01).....	71
89	曼珠沙華 (2017/9/01)	72
90	故郷に契りし友に (2017/10/01).....	72
91	聞 施 (もんせ) (2017/11/01).....	73
92	山茶花讃歌 (2017/12/01)	74
93	平成三十年 年頭の言葉 (2018/1/01).....	75
94	供 養 (2018/2/01).....	75
95	百花繚乱(2018/3/01).....	76
96	(最終回) 卒業(2018/4/01).....	77

1 恩送り (2010/6)

五月には「こどもの日」と「母の日」があり、六月には母の日に比べると多少影が薄いけれど「父の日」があり、家族の絆を深める月となっています。あなたの両親はご健在ですか。どうも親というものは、というより父親というものは、生きている間は鬱陶しくて煙たくて、うるさい存在のように思われがちです。けれど、父親の本当の愛情を肌で知るのは、その父が亡くなった後のことが多いようです。

高知県の35歳の女性が次のような文を書いています。(兵庫県加美町篇「ちょっとてれくさい 孝行のメッセージ」より)

「苦労して、やっとわかった親心。くそじじいはお不動さま。鬼ばあは観音さま」

若い頃さんざん罵り続けた親だけれど、結婚して子どもができると、子育てや所帯の苦労を通して親の心に仏心を見ることができたのです。

また、ある男性は次のように歌います。

「子を連れて来し夜店にて愕然とわれを愛せし父を想へり」

夜店に来てはしゃいでいるわが子の姿に、ふと己が幼少の姿を重ねてみるのです。「そうか。おれもかつて父に連れてきてもらったことがあったなあ。いつも難しい顔をしていた父だが、今の俺も同じ顔なのか。父も私を愛してくれていたんだ」と、愕然とする程に思い知らされたというのです。

「仏説父母恩重経」には「父に慈恩あり」と説かれています。慈とは最高の友情という意味です。母親の悲しいまでに優しい愛情を受けた恩(悲恩)に対して、父親からは厳しい愛情を受けた恩があり、それを慈恩といわれるのです。無量寿経には「大悲風のごとし」と説かれています。父親の愛情も仏の慈悲に似て、いつも風のように私に呼びかけてくれる働きがあるのです。風の気配に、父親の男としての眼差しを感じるのです。では、両親が存在しなければどうすればいいか。

「恩送り」という言葉があります。直接に恩を受けた相手ではなく、別の誰かに恩を送っていくのです。親や祖父母から受けた恩を、子や孫に送る。先生や多くの人から受けた恩をボランティアという形で、学校や社会に奉仕する。これが「恩送り」です。なによりも大切な恩送りは、先祖から伝えられてきた、念仏にいかされ育まれてきた家風というものを、しっかり次の世代に送ることであると思います。

2 甲子園の夏 (2010/7)

今年もまた、高校野球の夏が巡ってきました。勝っても負けても一生懸命な、あの姿がいいですね。「ワールド大会の決勝に進出して日本中を熱中させたサッカー人気に比べて、やや下火になったといわれるものの、なお引き付けられる甲子園の魅力とはなんでしょう。

実は、私も甲子園経験者なのです。といっても選手ではなく、応援団長としてアルプススタンドで校旗を振り、三三七拍子を華麗に?…演じたリーダーでした。昭和33年第40回大会で、わが母校・姫路南高校は3回戦まで進出。残念ながら和歌山の海南に敗れましたが、

灼熱の太陽の下でプレーするもの、応援するもの、グラウンドとスタンドが一体となり、そして燃え尽きたのです。

開会前は下馬評にも上がらなかった無名の公立校が、3回戦まで進出するのは、試合の流れにスリルがあって劇的に展開するからでしょう。グラウンドで繰り広げられるプレーの一つ一つに、少年たちの哀歓が交錯する光景。そこに大人達は、もはや戻れない少年時代への郷愁を感じるのです。

時代をこえて存在する甲子園の魅力。

その一つは、球児たちのひたむきさ。どんなに大差がついても、球を投げ、打ち、追いかけて、最後まで全力を尽くす姿に観衆は惜しめない拍手を送ります。

二つは、汗と涙。猛暑の中を戦った選手たちの汗に感動を覚えます。9回を投げ抜いて敗戦投手になった若者の涙を、美しいと思います。

もう一つは、勝者よりも敗者をたたえ、いたわる観衆の心情。「また来いよ」の掛け声は、いつも敗者にあたたかい。若いという字は苦しいという字に似ている、という歌がありましたね。自分のやるべきこと、やると決めたことを、よくわきまえて、たとえどんなに辛く苦しくても、不平不満を言わないで、苦しみに耐えて黙々と実行する。これを釈尊は「我行精進・忍終不悔」（かぎょうしょうじん・にんじゅうふげ）と無量寿経に説かれています。

「わが行は精進して、忍びてついに悔いず」と読みます。

青春とは、燃えながら生きること。そこに後悔はないのです。

3 良き出逢いが感動を生む (2010/8)

夕焼けを見て感動したことがありますか。

児童文学者の椋鳩十さんが書かれた『人間出会いのすばらしさ』という本があります。その中に、椋さんが子どもの頃に読んだ「ハイジ」のことが書いてあります。

アルプスの少女ハイジが、お爺さんと一緒に夕焼けを眺めているのです。目の前にずーっと続いている三千メートルを越える山々の、万年雪を頂いた峰があって、片方にはお花畑もあります。そのアルプスの草原で夕焼けを眺めていたハイジが尋ねます。

「おじいさん。夕焼けはなぜ、こんなに美しいの？」

すると、おじいさんが言います。

「夕焼けはな、おてんとうさんが山にむかってする、さよならのあいさつなんだよ。だからこんなに美しいのさ」

この言葉が椋さんの胸に焼きつくのです。目の前には日本アルプスの山々の本物の夕焼けがあります。茜色に染まった山々が、ことのほか美しく椋さんの胸に焼きついたのです。

椋さんは、お爺さんやお母さんの話をわくわくしながら聴いて育ったといいます。その体験から、母親が子どもに本を読んで聞かせたり、あるいは語って聞かせることが、子どもの成長の上でどんなに大切であるかを、この本の中で述べられています。そして「感動との出会いは、その人間の運命にかかわる」とも書いてあります。

仏教では、感動する心を「柔軟心（にゅうなんしん）」といいます。文字通り「やわらかい

心」です。

本物に出会い、良き本に出会い、良き人に出会う。そこに感動が生まれるのです。毎月、永観堂幼稚園で園児たちに童話を話しています。心をこめて語れば、3歳児といえども心になにかを感じてくれる、と信じています。

「良き出逢いが、良き話が、感動を生む」
大事なことですね。

4 拈華微笑（ねんげ・みしょう）(2010/8/13)

八月六日から十日間、京都では新たな夏の風物詩として「京の七夕」が開催されました。世界遺産二条城をメイン会場に、堀川・鴨川の二つの川のほか、市内各地で七夕にふさわしい催しが繰り広げられ、京の夜を彩るのです。

二条城内の南庭園では、イベントの一つとして「メッセージ行灯」が20基並べられました。

2メートルを越す大型行灯には、京ゆかりの著名な方々が書いたメッセージが展示されています。東儀秀樹・千玄室・瀬戸内寂聴・里見浩太郎などの著名な方々に混じって、不肖私の「拈華微笑」と書いた文字も行灯となって参加しているのです。

釈尊がある日説法される前に、一枝の花を手にとって無言で聴衆の前に示します。弟子たちは意味がわからず一瞬しんと静まったとき、弟子の一人の摩訶迦葉だけが意味を理解してにっこり微笑んだのです。その時釈尊は

「文字に頼らず、教を伝える方法にもよらず、微妙の法門を摩訶迦葉に与えよう」と言われました。釈尊のころから摩訶迦葉のころへ、仏法の真理が「以心伝心」したのです。この故事を「拈華微笑」といいます。拈華とは、花を手を持つこと。ただ黙って花を示されたのを見て、なぜ摩訶迦葉だけが微笑んだのでしょうか。

咲く、という字は「わらう」とも読みます。花が咲くのをみて花が笑っていると受け止めると、人は自然に花に向かって微笑むのです。

「花は咲く / だれが見ていなくても / 花のいのちを美しく咲くために /
人は人であるそのために / 生きているのかしら」

高田敏子さんの詩です。人が人であるために、私たちは真剣に生きているのでしょうか。人間としての向上を目指すために、人生を明るく肯定して生きる。そこにおのずと「微笑」が浮かんでくるのです。微笑みのある人生、でありたいですね。

5 越中八尾と永観律師 (2010/9/01)

9月1日から三日間、越中八尾の風の盆。立春から数えて二百十日に行われるこの行事は、収穫を目前にした稲が台風などの被害を受けないように、という祈りを込めた祭りです。哀調を帯びた胡弓の独特の音色と、編み笠を着けた男女の情緒ある踊りは、高橋治の小説『風の盆恋歌』と、石川さゆりの歌で一躍有名になりました。

この八尾の町には、風の盆とは別に毎年5月3日に曳山祭が行われます。三味線、太鼓の奏でる囃子につれて、若者たちが揃いの法被姿で六基の「山」を勇壮に曳きます。豪華な彫刻と漆や金箔で飾られていて、京都の祇園祭の山鉾に似ています。この山を曳く時の掛け声が「ホーリキミツツノヨーカンボー」というのです。漢字に当てれば「法力密意乃永観房」となります。以前、八尾の郷土史家の成瀬昌示氏が禅林寺に来られた時、八尾と永観律師の関連を尋ねられたのですが、残念ながら答えは見つからないまま、成瀬先生も逝去されました。

ご承知のように、永観（ようかん、が正しい読みです）は禅林寺の第7世で、一日六万遍の念仏を修していた時、須弥檀上のご本尊が降りて共に念仏行道されるのを見て、驚き躊躇していると、仏が振り返り「永観、遅し」と告げられたという奇瑞の「みかえり阿弥陀」の縁起があります。のみならず、病人を助け励まし、獄舎にいる者には念仏を勧めて懺悔させ、境内の梅の実を惜しみなく貧しい者に分け与え、弱者救済に尽くした人です。一日六万遍の念仏を唱えるうちに舌も喉も枯れて声を失うほどの苛烈な念仏行を修した清僧でしたから、多くの人々から崇拜敬慕され、「法力密意の勝れた永観房」と讃えられ、それがいつしか越中八尾まで伝わったのであろうと察せられます。西方浄土にいます永観律師は、京から遠く離れた越中八尾の町の若者たちが声を限りに「ヨーカンボー」と叫ぶ声を、いかにお聞きでありますでしょうか。

永観律師が示寂されて今年は900回忌に当たります。ご命日の11月2日には百僧法要を営みます。百人の僧侶が読経念仏して律師を讃える声を、「永観房」はいかにお聞き届けになるでしょうか。

6 月に想う (2010/10/01)

秋は月の美しい季節です。幸いにも、今年の9月22日の十五夜の月は、永観堂の境内で見ました。多宝塔の上に輝く月を、放生池の橋に腰掛けて眺めるという優雅でぜいたくな月見でした。

月にちなんだ歌を一つ紹介しましょう。

「おおてらの まろきはしらの つきかげを つちにふみつつ ものをこそおもえ」
秋草道人・会津八一氏の歌です。大和の唐招提寺を歌った見事な歌ですね。ある本に「唐招提寺の月は、金堂の東の方から昇ってくる。戒壇のある小高い土地に立って、はるかに金堂の方を眺めると、金堂の東の方からオレンジ色の月が昇ってくる。それはまるで別世界の景色を見るような異常な美しさである。」と書かれています。

おおてらのまろきはしら、というのはもちろん、唐招提寺の金堂の前に、横一列にずらりと並んでいるエンタシス型の八本の丸い柱を指しています。ご承知のように、この寺は唐の国から来た鑑真和上によって建てられました。金堂の前に横一列に丸い柱を建て並べるといふ建築様式は、明らかにギリシャ神殿に見られる様式です。ギリシャ・ローマを中心とする地中海文明は、会津八一氏がもっとも心惹かれていたといわれています。この短い歌には、ヨーロッパの文化や地中海文明だけでなく、授戒の師を求めて命を賭して唐へ和上を迎えに

いった普照・栄叡の二人の若い僧、来朝までに五度も渡海に失敗し、来日できた時は失明していた鑑真和上。そういうさまざまなことを、秋艸道人は月に照らされた柱の影を踏みながら考えていたのです。「仏法のためなり。なんぞ命を惜しまん」と固い決意で身命を顧みず渡来した熱意に、道人も深く心に感ずるものがあったのだと思います。

今月 25 日、宗派の全国寺庭婦人の方々と唐招提寺にお参りします。十三夜は過ぎていますし、夜まで滞在できないので、金堂の月を見ることができないのは残念です。しかし、長い年月をかけて解体復元された金堂にお参りし、丸い柱に手を触れてみるのも楽しみです、なによりも開山堂の鑑真和上のお像に詣でることができれば有難いことです。

7 共に是れ凡夫のみ (2010/11/01)

ある中学校に赴任したばかりの校長先生が、通りすがりに畑でイチゴを盗む生徒を二人見つけたのです。思わず傍によって声を掛けました。「おい！俺も仲間に入れろ」

驚いて走り去ろうとする生徒を「逃げるな！」と止めて、一緒にイチゴをとり始めました。「見つかったらどうしよう」ドキドキしながら、「おい、蔓を引張るな。爪でもぐんだぞ。もっと背を低くしろ！」などと校長自身が泥棒の指導をしているのです。

案の定、畑の持ち主に見つかりました。「にげろ！」三人は三方に散って走り、何とか逃げおおせましたが、翌日、校長先生は相応のお金を差し出して、持ち主に深々と頭を下げていいました。「泥棒は私でした」。

このことが広まりましたが、校長先生は頑として生徒の名を明かしませんでした。けれど担任の先生にはわかっていたのです。それ以来、札付きのワル二人が眼に見えて明るく、生き生きとしてきたからです。

皆に熱望されて赴任したその中学は、県下でも三大暴力校といわれるほどの学校であったそうです。けれど、新任の校長は、そんな暴力に屈しなかったのですね。行いの悪い子、成績のよくない生徒を特に眼を掛け、叱る時は本気で叱り、鍛えるときは本気で鍛える。特に他人への愛、全力投球、損得を考えない、などを繰り返し語り、スポーツに力を入れて、気がついたらいつの間にか暴力は学校から完全に消えていた、というのです。

以前、新聞で読んだ記事ですが、あなたはどのように受け止められますか。

「我、必ずしも聖にあらず、彼、必ずしも愚にあらず。ともに是れ凡夫のみ」

聖徳太子のことばです。これが教育の原点なのですね。

口うるさく説教してみても効果は少ないのです。親や教師が人間として、大人として「共に凡夫」の自覚を持ちがんばっている姿が、生徒たちに人生を教えることになるのですね。もちろん、僧侶にとっても大切な教えであることは、言うまでもありません。

8 烏兎忽々（うとそうそう）(2010/12/01)

河の流れにも似て、月日にも澱みがありません。早くも師走となって、カレンダーも残り一枚になりました。神社の中には来年の干支のウサギの大きな絵馬を、本殿の前に掲げた所

もあります。

兎といえば、月日のたつことの早いさまを「烏兎忽々」といいます。太陽の中には三本足の烏が、月の中には兎が住むという言い伝えがあり、日月の流れに特別な感情を抱いた言葉です。忽々とは、あわただしい・忙しい、という意味があります。

唐代の善導大師は、「人間、忽々と衆務を営み、年命の日夜に去りゆくを覺らず」と述べて、毎日をうかうかと過ごさず、若くて元気な間に本物の幸せを見つけよ、と警告しています。

ところで、西条八十の詩に「ある大晦日の夜の記憶」というのがあります。

「その夜は粉雪がふっていた。 / わたしは独り書斎の机に座って / 遠い除夜の鐘を聞いていた。

風の中に断続するその寂しい音に聴き入るうちに / わたしはいつかうたた寝をしたように想った。 / と、誰かが背後からそっと羽織を着せてくれた。

わたしは眼をひらいた。 / と、そこには誰もいなかった。 / 羽織だと想ったのは静かにわたしの身に積もった一つの歳の重みであった。 」

一つ歳をとった重み。羽織一枚の重み、それはなにか計量器で計れるというものではないのです。心の底にそっと、しかし、普通の重みとは異なる重量感を感じさせます。私にとっても、今年は特別に重みのある一年でした。羽織一枚ではなく、衣一枚の重みです。衣の色が変わるだけで立場と環境が激変し、その責任感と緊張感の重みに耐える一年でした。

その上、さまざまな悲しい別れがありました。そして、新しい出会いもありました。人はみな、別れと出会いを繰り返し生きていくのです。この重みを心の奥にしまいこんで、新しい年の活力としたいですね。

あなたの今年一年の歩みは、どのようなものであったでしょうか。二度とない人生。自分にしかない人生。であるからこそ、確実に、おおらかに歩み続けなければなりませんね。この年の重みを受け止めて、前向きに新年を迎えることにいたしましょう。

9 みかえりの心 (2011/1/05)

新しい年の初めに、永観堂の本尊・みかえり阿弥陀仏の尊前に、この一年の天下和順と兵戈無用の平和な世界実現と、国富民安を祈念いたします。

天下和順(てんげわじゅん)・世の中が和やかで穏やかであること。

兵戈無用(ひょうがむよう)・軍隊や武器を用いることなく、平和であること。

国富民安(こくふみんなん)・国が豊かになり、人々が安らかであること。

いずれも無量寿経の中の言葉で、仏教が広まることにより、平和な世の中が実現されると説かれており、毎朝、勤行の中で唱えているのです。

永観堂の本尊は世界でも珍しく、立ち止まり振り返る姿です。仏が立ち止まり、振り返り、待つという「見返る」姿は、現代人に深い慈悲の働きを示しています。

一つに、自らを顧みよ、との教え。

二つに、遅れる者、生きる勇気や希望を失くした者、孤独に泣くものに手を差し伸べ、立ち上がり前に進もうとする者を待つ姿勢。

三つに、今の日本が棄てさった美德や価値を見直し、再び生かそうという心。この慈悲の働きを実現するために、仏は「あきず・あせらず・あきらめず」待ち続けているのです。

あわただしい生活を改め、美しい日本の四季の移ろいを味わい、先祖を敬い、篤い信仰心を持ち、老いてもなお凜とした心で生きようという、スローライフ（ゆったり生活）を取り戻さねばなりません。人々の生活や心の中のゆとり喪失が、引きこもりや過労死や自殺を生み出しているのです。

政治や経済、社会が閉塞し、不透明な今こそ「あきず・あせらず・あきらめず」という『みかえりの心』が必要ではないでしょうか。

10 心に花を (2011/2/01)

2月4日は立春。暦の上では春ですが、北国は豪雪の中。光の春の到来が待たれます。1月の小寒から4月の穀雨の頃にかけて吹く風を、「花信風」といいます。中国では、虫はそれぞれの季節に生まれ、そして死んでいくけれど、それは季節の風が虫の命を動かし育てる、と考えられていました。虫だけでなく、風は草木の命をも呼び覚まして、それぞれの季節に花を咲かせます。小寒には梅・椿・水仙を。立春には黄梅や桜桃（ゆすら）を「春だよ。起きなさいよ」と風が吹いて起こすのです。

花信風は季節の風、というだけではありません。今、人生の冬の中において、生きる勇気をなくしかけている人、悲しみや苦しみを抱えている人の心の中に、誰かのなにげない一言が、仕草や笑顔が、勇気や希望を与えることがあります。それこそ、心の花を咲かせる「花信風」なのです。

「夜回り先生」こと水谷修さんの講演を聞いたことがあります。自分の存在を学校や家庭で否定されたり、阻害されて夜の街を徘徊する少年少女たちに「早く帰れよ」とか、「人生の主演は君だよ」と声をかけておられるのです。世の中で誰一人、自分を必要としてくれないと思うと、「どうせ自分なんか」と自暴自棄になる少年たち。幼い時から、母親が後ろから見てくれている、と感じたり、「お母さんはあなたが必要なのよ」と抱きしめられることがあれば、自分は大切に思われているという存在感・重要感を自覚することでしょう。

「和顔愛語先意承問」と無量寿経に説かれています。

和顔（わけん） 明るい笑顔

愛語（あいご） 愛情のこもった言葉

先意承問（せんいじょうもん） 相手を思いやる心

これが花信風となって、人の心を育て豊かにするのです。

和尚の法話を「花信風法話」と名づけたのは、ささやかでも心の応援団になれば、という願いが込められているのです。

あなたも、周囲の人の心に、小さくてもいい、美しい花を咲かせる心地よい花信風を吹か

せてみませんか。

11 花語らず (2011/3/01)

永観堂の「みかえり阿弥陀如来」を感得された永観律師は、一日に三万遍、時には六万遍の念仏を唱えられましたが、厚い念仏信仰の根底には「生来の虚弱な体質」という弱者の自覚を強く持っておられたようです。それだけに、病気や貧しさに生きる気力をなくしたり、罪を犯さざるをえなかった人々、いわゆる「社会的弱者」に向けるまなざしには大変暖かいものがありました。自らの念仏信仰を生涯つらぬき通しただけでなく、衆生救済にも命をかけた人です。

そのために、境内には「施薬院」を設けて病人を助け、梅の木を植えて実を惜しみなく人々に分け与えました。人々は永観さんの徳を感じて「悲田梅（ひでんばい）」と名づけて今に及んでいます。悲田というのは、貧者や病人の苦しみを救う行為をいいます。

3月に入って寒さが少し和らいだせいでしょう、永観さんゆかりの白梅がやっと花開きました。

中国原産のバラ科の梅は、奈良時代前期、遣唐使によってわが国にもたらされ、万葉のころから「春告草」「香栄草（こうばえぐさ）」とも呼ばれて、人々に親しまれてきました。

梅をうたった歌は多いのですが、とりわけ次の歌は趣が深いものがあります。

君ならで誰にか見せん梅の花 色をも香をもしる人ぞ知る (紀 友則)
 清楚な色と、ほのかな香りが身上の梅の花は、「君ならで」と思う人とともに味わうのが似つかわしいですね。

昨年二月、管長就任のご挨拶に南禅寺さんをお訪ねしたとき、方丈の廊下に「花語らず」という、いい詩が掲げてありました。かつて南禅寺管長を勤められた、故柴山全慶老師の作です。

花は黙って咲き / 黙って散ってゆく / そうして 再び枝に帰らない
 けれども その一時一處に / この世のすべてを托している
 一輪の花の声であり / 一枝の花の真である
 永遠に滅びぬ 生命のよろこびが / 悔いなくそこに輝いている

一輪の花にも、み仏のいのちが宿ります。

私たちに恵まれた、たった一つの尊いいのち。そのいのちの限りをつくし、いたわりあう心、己をふりかえる心、美しいものに感動する心、出会いに感謝する心を大切にしたいものです。そして、それが永観律師の感得された「みかえり」のころでもあるのです。

12 代受苦者 (2011/4/01)

「悲しみを抱えながら生きねばならぬ母親の叫びが聞こえる。親を亡くした震災遺児。孤独死の穴に落ちていくお年寄り。彼らも心に深手を負った人たちだ。『心のケア』はよく言われ

るが、傷ついている人への支援が十分に進んでいるとはいえないだろう」

この文は仙台に本社を持つ河北新報のコラムの一部です。ただしこの度の東北大震災の記事ではありません。これが書かれたのは1999年1月17日。阪神淡路大震災の4年後、神戸の復興に寄せた、いわばエールなのです。

2011年3月11日。仙台始め関東・東北地方が壊滅的な災害に襲われました。3月末現在、死者の数は11232人。宮城県だけでも6843人に及び、阪神大震災の死者の数を越えています。海に囲まれた火山列島日本に、いつ、どこで、どんな災害が起きても不思議ではないのですが、M9.0の巨大地震と二次災害である津波と、それに加えて原子力発電所の事故による放射能被害の三重苦なのです。

仏教では、自然災害による犠牲者を「代受苦者」といいます。自分の代わりに苦しみを受けて下さった人々、という意味です。

今回は地震の震源地が宮城県沖であったので、太平洋側の東北地方が主な被災地となったのですが、これが京都花折断層や南海沖が震源地であれば、永観堂や網干の大覚寺も確実に被害を受けているでしょう。

私や家族が受けていたかもしれぬ苦しみを、今回、関東・東北地方の人々が代わって受けられた。そう思うと、人事ではすまされないのです。

今、自分になにができるか。宗派としてどう対処すればいいか。

本山の宗務所は、急遽、災害対策本部を立ち上げ、特別災害対策基金から救援金を支給し、同時に全国の末寺に対して義捐金の要請をしました。個人としても新聞社を通じて救援金を寄託いたしました。本山の受付で拝観にこられる方々に協力を呼びかけ、私の著書や色紙を買っていただいた浄財をすべて被災地に送ることにしています。

宗派の京都布教団の有志が、四条大橋に立って募金の活動を始めています。青年僧の会も現地に救援に行くことを検討しています。

そして今、永観堂では「加行」という、僧侶の資格を取るために17歳から58歳の22名の難僧が過酷な修行をしています。朝4時・昼10時・夕4時の三回、身を切るような寒さのなかで水をかぶり、その後2時間余りの時間、勤行に集中します。その時、代受苦者の冥福を祈り、被災者の早期復興を願って全員で念仏を唱え回向しているのです。

冒頭の新聞のコラムは、次の言葉で結ばれています。

「街の再建にはセメントや鉄を注ぎこめばいい。しかし、人生の再建にセメントは使えない。人生の再建に立ち向かわねばならぬ人たちの声に、耳を澄ませたい」

13 心遣いと思いやり (2011/5/02)

東日本大震災が起きてから、テレビの広告に毎日出てくる詩があります。

「こころ」はだれにも見えないけれど / 「こころづかい」は見える

「思い」は見えないけれど / 「おもいやり」はだれにでも見える

これは「行為の意味---青春前期のきみたちに----」という詩の一節で、宮澤章二さんの作品です。

世の中には、自分の力を信じないで愚痴ばかりいう人がいます。

「自分になにができるっていうんや。なあ、知れてるやろ。俺なんかより偉いやつは、いっぱいいるんや」

また、遠慮深いといえば聞こえがいいが、要するに引っ込み思案の人もいます。

確かに、一人の力は知れているかもしれませんが。だからといって、心に思いながらなにもしない、やろうと思うことをやらないでは、なにも生まれません。残るのは、後悔と無力な自分に対する怒りだけです。生まれつきの性格なんだから、と思い込んでしまっていること自体、すでに視野が狭いことになります。

思いは行動に移して初めて「思いやり」となって相手に伝わるのです。宮澤さんの詩は、次のように続きます。

あたたかい心が あたたかい行為になり / やさしい思いが やさしい行為になるとき
 <心>も<思い>も初めて美しく生きる
 -----それは 人が人として生きることだ

やってみれば反省も生まれます。自分は人として人に何を与えることができるか。

物があれば物を、金があれば金を。力があれば力を。知恵があれば知恵を。

救援金や救援物資の提供、瓦礫撤去の手伝い、チャリティイベント、さまざまなボランティアがあります。

被災地で苦しむ人々に笑顔が戻るように、自分に出来る「心遣い」はなにか。なにもなければ、せめて苦しみや悩みを受け止め、共に泣くことのできる「同悲」の心だけは持ち続けたいものですね。そこから、ささやかでも人に対する積極的な行為が生まれてくると思うのです。

14 永観堂の悲田梅（ひでんばい）(2011/6/01)

例年より十数日早い入梅となりました。梅の実が熟す時期に降る雨なので「梅雨」というのだそうです。梅雨にもいろいろ呼び名があって、激しく降ってサッとやむ雨を「男梅雨」、しとしとと長く振り続くのを「女梅雨」。集中豪雨になると「荒れ梅雨」とか「暴れ梅雨」といい、黴（かび）が生えやすくなるので「黴雨ばい」ともいうそうです。季節の移ろいを敏感に感じ取り、細やかな心配りをするのが昔からの日本人の美德なのですが、このたびのような大きな災害にあうと、ショックが大きすぎて心のゆとりもなくなるのでしょうか。

自坊の大覚寺の本堂の前に梅の古木があり、「今年は実がたくさん付いてます。文字通り鈴なりですね」と家人が電話で報告してくれました。どうやら梅干に、梅酒に、と張り切っているようです。

紫蘇の働きで赤く染まった梅干には、解毒作用があるといわれます。枝にも邪気を払う霊力がある、と昔から信じられていて、お墓や仏壇の開眼供養の儀式に香水（こうすい・抹香を混ぜた水）を振りまく撒杖（さんじょう）も梅の南側に伸びた枝を使います。

大法輪という仏教誌に、酒井大岳師が「梅の一生」という次の詩を紹介しておられました。
 「二月三月花盛り。鶯鳴いた春の日の、楽しいことも夢のうち。五月六月実がなれば、枝から振るい落とされて、何升何合計り売り。もとより酸っぱいこの体。塩につかって辛くなり紫蘇に漬かって赤くなり、七月八月暑いころ、三日三晩の土用干し。思えばつらいことばかり。これも世のため人のため。皺はよっても若い気で、小さな君らの仲間入り。運動会にもついていく。まして戦（いくさ）のその時は、なくてはならぬこの体」

梅を人の一生になぞらえてユーモアを交えた楽しい歌ですね。昔、梅干は戦陣の必需品でした。

本山禅林寺の第7世・永観律師は、弱者救済に命をかけた人でした。境内に薬草を植えて薬王院を造り病人を収容看護したり、梅を育てて実を健康食として貧者や病人に惜しげもなく分け与えた、といわれています。この永観律師の慈悲の行為を讃えて、京の庶民は禅林寺を「永観堂」と親しみを込めて呼び、律師の植えた梅を「悲田梅」と敬意を込めて呼び伝えました。悲田とは、苦難を受けている人への思いやりの心。

そして900年後、何代か植え代わって、今もなお悲田梅は花を咲かせ、実をころころ落としています。梅の実の熟するうるおいの中で、甘酸っぱい香りとともに人を思いやる心の大切さを、私たちに伝えるように。

15 「初心忘るべからず」(2011/7/1)

六月の初め、久しぶりに平安神宮での薪能に出かけました。62回を重ねるこの日、「養老」「自然居士」「井筒」「石橋」の能4演目に、狂言「金津」が上演されました。夕焼け空と朱色の社殿を背景に始まり、途中で篝火へ火入れ式があり雰囲気は最高潮。「命には終りあり。能には果てあるべからず」という世阿弥の言葉を思い出しながら、幽玄の世界を堪能したのです。世阿弥の著で、わが国最高の芸術論である「風姿花伝」は、人生論としても勝れた内容を持っています。この中に「初心忘るべからず」という有名な言葉があり、初心には三種あることが具体的に述べられています。

(1) 是非初心忘るべからず

能楽を習い始める7歳のころは、良い（是）と褒められても悪い（非）と注意されても嬉しく上達していくが、あまりひどく叱るとやる気をなくしてしまう。これを「是非初心」といっています。

(2) 時々の初心忘るべからず

24,5歳の青年期は大事な時で、若盛りの一時的な「花」があって名人に勝るところもあるが、これを上手だとうぬぼれると当人にとって害になる。この時期に必要なのが「時々の初心」なのです。

(3) 老後の初心忘るべからず

44,5歳を過ぎると、外見の華やかさは薄れていくけれど、熟練の年とともに失わない「花」があれば、それこそ「真の花」である。この時期に「老後の初心」が大切なのです。特に70歳になる私には、この「老後の初心」が心に響きます。老人と呼ばれるようになる

と、体や顔つきが年寄り臭くなって醜くなるのは仕方ないとしても、せめて心まで醜くならないように心がけたいものです。初心に帰ることがいかに大事かを、この言葉から学ぶことができます。

いつも生き生きとして情熱に燃えて生きている人。いつも朗らかで側にいる人まで明るく生き生きさせる人。その人に接するとこちらにも熱い心が伝わってくる人。こういう人は幾つになっても「初々しさ」を持ち続けている人です。いつも人の幸せを願いながら努力する人を「菩薩」といいます。菩薩は永遠に若いのです。

せめて若々しく情熱に溢れた人生を、歩みたいものですね。

16 ひまわりの花 (2011/8/1)

真夏の太陽の下、東日本大震災の被災地でひまわりの花が咲いている景色をテレビで見ました。ひまわりが多くの人々を元気づけているようです。向日葵と書くひまわりは、北アメリカが原産で、300年ほど前に日本に伝えられた花だということですが、今ではすっかり日本の夏の風土に定着しています。花言葉は「あこがれ」「熱愛」「愛慕」「光輝」。そういえば、日本の気象衛星にも、この花の名がつけられていましたね。

ひまわり、といえは私と同世代の女性なら懐かしく思い出される雑誌がありますね。昭和二十年代に少女たちに熱狂的に読まれた雑誌、『それいゆ』『ひまわり』。昭和21年、戦後の退廃した世相の中で、女性に夢と希望を与え、賢く美しい少女であってほしいという熱意で、中原淳一さんが創刊したものです。なにもない時代だったからこそ、少女たちは大輪の花「ひまわり」に夢と憧れを求めたのでしょう。大きな瞳をした少女のイラストやスタイル画で、戦前から人気の高かった中原さんが表紙を描いて、川端康成・吉屋信子などのそうそうたる顔ぶれが執筆していました。

洋服の着こなしから、人間としての生き方の問題まで、中原さんが説いたのは、「少女には少女にふさわしいやり方がある」ということのように思いました。私と同世代の知人女性の何人かは、少女時代に『それいゆ』に出会い、雑誌からかもし出される美しい世界に触れた喜びを熱っぽく語り始めたら止まらない人がいます。最近、復刻版が発行されて人気をよんでいると聞いています。

その中原淳一さんの言葉を雑誌で見つけました。

「もし、この世の中に風に揺れる花がなかったら、人の心はもっともっと荒んでいたかもしれない。

もし、この世の中に信じる事がなかったら、一日として安心してられない。

もし、この世の中に思いやりがなかったら、淋しくて、とても生きてはいられない。

もし、この世の中に愛する心がなかったら、人間は誰もが孤独です」

少女の時代に美しいものに触れ、夢を求めた人は幸せですね。

風に揺れる花や、美しい夕焼けに感動する心があり、人を信じる心と、思いやりの心と、そして愛する心を失わなければ、人は決して孤独にはならないのです。

被災地に花を。少年や少女たちに、夢と希望と未来を信じる心を。

17 その命、私にください (2011/9/1)

中学の校長をしておられた柴山一郎先生が、次のような話を紹介しておられます。

当時、その中学に鈴木千代子という生徒がいました。2年生の時、ブラスバンドの練習中に突然倒れ、搬入された病院で「膠原病」と診断され、余命2年の宣告を受けたのです。それでも千代子さんはめげることなく、高校受験に挑戦し入学を果たしたものの、入退院の繰り返しでした。倒れるたびに死の恐怖と向き合いながら、懸命に生きたのです。その頃のことを千代子さんのお母さんが、日記に綴っています。

「この七年間、いろいろなことがあった。学校で激痛がきて授業をこわしたこと。四年目の高校卒業、そして大学受験と予備校通い。千代子は最後まで病気の克服と自立をあきらめなかった。成人式には振袖を着て出席し、旅行にも行き、ジャズダンスもなった。死の影などみじんも見せない娘だった。発病の日から二千五百余日を数えたのである」

二年生存のはずが、彼女の気力で七年に延びたのです。それにしても21年の生涯は、あまりにも短かすぎます。迫り来る死を見つめながら、彼女は次のような文を書いています。

「自殺なんかなぜするの。私はテレビに向かって叫んだ。孤独だったというけれど、体が丈夫なら毎日学校へ行けるんだし、クラスの中には一人くらいお友達がいたはずよ。せっかく生まれてきた大切な命を自ら捨てるなら、その命、私にください」

この叫びを残して、千代子さんは逝きました。自宅の庭には「千代子菩薩」と彫られた高さ50cmの石像が立っているそうです。福祉の仕事につくのを見て明るさを失わず、強く美しく生き抜いた少女の姿が、この石像には込められている、と柴山先生は書いておられます。与えられた命を、福祉という他人の幸せのために尽くす仕事につきたい、と願った千代子さんは、まさに菩薩というにふさわしい生き方だったのです。

浄土宗西山派の派祖・証空上人は

「衆生の重んずるところ、命に過ぎたるはなし」

と述べられています。人がもっとも大切にしなければならないもの、それは命に他ならない。命以上のものはない、といわれるのです。この一日は大切にすべき一日です。この一瞬の命は尊ぶべき命です。一つしかない命だから、二度とない人生だから、この一日を大切に生きねばなりません、

と千代子菩薩が呼びかけています。

18 野の花のいのち (2011/10/1)

秋の七草を全部いえますか？「ハスキーなおふく」と覚えておくといいのです。ハギ・ススキ・キキョウ・ナデシコ・オミナエシ・フジバカマ・クズ。古来、ハギ（萩）は七草の筆頭に挙げられ、つつましく、控えめな花の姿が日本人に好まれて、歌にも多く詠まれています。一つだけ選ぶなら「秋萩の花咲く頃は来てみませ 命またくば共にかざさむ」という良寛

さんの歌が好きです。

「行き行きて倒れ伏すとも萩の原」

これは松尾芭蕉とともに奥の細道を旅した弟子の曾良の句です。旅の途中で病に倒れた曾良は、一人別れて帰ることになりました。「師匠の供をできぬ悔しさ。江戸へ戻る旅の途中、行き倒れて死ぬかもしれぬ悲しさ。しかし、自分もまた風雅を愛する者として同じ死ぬなら、萩の花の咲きみだれる野原で死にたい。」そんな曾良の痛切な思いが感じられる句です。

萩や桔梗に並んで、最近ではナデシコも有名になりました。七草のほかにも彼岸花、水引、吾亦紅、コスモス、蓼（たで）、アカマンマなど、秋の野の花には可愛い草があります。道端に雑念と生えている雑草も、思い思いの色や形の花を咲かせています。昭和天皇が、かつて「雑草という名前は少し侮辱的な感じがして好まない」と語られたそうですが、生物学者として、懸命に可憐な花を咲かせる野の草の生命力に感動された御心境なのでしょう。確かに十把ひとからげに雑草といっても、その一本一本にはきちんと名前がついています。

「草の花ひたすら咲いて見せにけり」久保田万太郎。

野の草花も皆「いのち」を与えられて、懸命に生きているのです。

「いのち」という讃仏歌があります。

野の花の小さいいのちにも 仏は宿る

朝かげとともに来て つつましい営みを与える 同じように

白露のはかないいのちにも 仏は宿る

月代（つきしろ）と共に来て 一夜さの安らぎを与える 同じように秋という季節がもたらす风光のためか、野の花といい、白露といい、月代といい、秋を詠った詩歌はどこか悲しみが感じられますね。善導大師は「華を採って水を与えず日中に置けば、たちまち色を失うだろう。人の命も同じだよ」と教えられています。与えられたいのちを精一杯、咲ききりたいものです。花のように。

19 幸せの在りか (2011/11/01)

「幸せ」というのは、一体なんでしょうね。

「それはね、他人の不幸を眺めることから生ずる、気持ちの良い感覚だよ」という、きわめ

て皮肉な言い方をする人がいます。裏を返せば、他人の幸せを見れば「妬み心」が生ずるということでしょう。これが人間の本性というなら、悲しいことです。

永観堂の御影堂へ渡る廊下には毎月、季節感に満ちた美しい写真とともに「今月の言葉」が掲示されていて、ホームページにも載せられています。10月の言葉は「幸せは求めるものでなく、感じるものである」と書かれていました。カール・ブッセの詩のように、山のあなたの空遠くまで探し求めても、結局「涙さしぐみ帰り来ぬ」ことになるのです。

不幸の体積なら涙の量ではかることができても、幸せの体積となると計る基準がありません。幸せを感じる心とは、ひろびろとしていて爽やかな気持ちでいることです。作家の田辺聖子さんは「自分を理解してくれる人のそばにいること」といっていますが、確かにこれも

重要な要素といえます。幸せをテーマにした詩のなかに、茨木のり子さんの「答」という作品があります。

「ババさま、ババさま。

今までババさまが一番幸せだったのは、いつだった？」

来し方を振り返り、ゆっくり思い巡らすと思いきや、

祖母の答は間髪をいれず、だった。

「火鉢の周りに子どもたちを坐らせてね、

かき餅を焼いてやったとき」

間髪を入れずに、という表現に、ババさまの確信の強さがうかがえますね。一番幸せだったのは、子どもたちにかき餅を焼いてやった時だった。つまり、幸せというのは平凡な日常の中にあるのだ、といているのです。

仏教の言葉に「無事是貴人」（ぶじこれきにん）という禅語があります。（臨濟録）無事である人こそが貴人である、という教えです。毎日の生活に慣れきってしまうと、それを成りたせているもののお蔭を忘れて、生活に不満を抱くようになり、人の幸せを妬んだり、愚痴をこぼしたりするようになります。

殊に今年の三月に発生した大地震によって、平凡な日常を奪われた東日本の人々の悲しみや苦しみに思いを致すとき、平凡の尊さを痛切に感じます。平凡の無事に感謝しなければ、バチがあたりますよ。

20 人生の暮れを染め上げる (2011/12/1)

「秋冬」という歌謡曲が30年ほど前に流行りましたね。「季節の変わり目を あなたの心で知るなんて もう恋も終わるのね」という切ない歌詞でした。秋から冬へと移る季節の変わり目が、近年ははっきりしませんね。地球温暖化の影響なのでしょう。11月下旬になっても小春日和が続いて、今年の永観堂の紅葉はかなり遅れました。が、師走に近づくにつれて、にわかに朝夕の冷え込みが本格化し、見事な紅葉の景色となりました。12月上旬までは十分楽しめそうです。

もみじに「紅葉」の文字を当てたのは平安時代からで、赤だけでなく黄葉ももみじと読んでいたようです。語源は色をもみ出す「揉み出」からきているという説があります。

春、芽生えたばかりの若葉。初夏、青嵐に吹かれて小さな花を咲かせ、やがて竹とんぼのような実を付ける青葉。盛夏、強烈な日の光を跳ね返して茂る壮葉。秋、赤や黄に自らを染め上げていく紅葉。冬、空中を舞いながら散っていく枯葉。それは、まるで人の一生を見るようです。

◆ うらを見せおもてを見せて散るもみじ

良寛さん74歳の時の句です。いよいよ臨終間近という時、歌の弟子であり純愛を貫いた貞心尼の求めに応じて与えた辞世の句です。

「貞心よ。お前にだけは私の表も裏も見せた。すべて見せた。そして安心して散っていくのだよ」

人間にとって自分の裏、つまり欠点も醜い部分も、すべて見せられる人を持つことは幸せですね。良寛さんにとって貞心尼は、そういう女性でした。

木の葉が落ちる前に美しく紅葉します。なぜこのように散るときが一番美しいのかといえば、太陽の光と熱に照らされ、平均気温が10度以下になると紅葉が始まります。葉の糖分から赤い色素が生成されて紅葉するのです。

◆ あみだぶに染むるころの 色にいでは 秋の梢のたぐいならまし

これは法然上人のお歌です。阿弥陀仏の慈悲の光に照らされると、それぞれの個性がひととき美しく染められて、まるで秋の梢の紅葉のように輝いていますよ、という意味です。二度とない人生。せめて晩年は、より多くの人の幸せのために尽くそうとすれば、人は自分にはかない光を放ち、徳の香をただよわせることができます。

人生の暮れを、美しく飾りたいものですね。

21 辰の年に思う (2012/1/1)

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重^しけ吉^{よごと}事

大伴家持が因幡の国庁で詠んだもので、万葉集4516首の最後の歌です。年の始めに降る雪のように、良いことが積み重なることを願った歌です。特に昨年は、東日本大震災によって引き起こされた数々の不幸な出来事があったため、余計に難を転じて吉事が重なることを願わずにおれません。

私たち人間にとって幸せとはなにか、と問いかけられた時、あなたはへと答えますか。作家の田辺聖子さんは「自分を理解してくれる人の傍にいたいことだ」と言っています。大切な家族のみならず、家も仕事も失い、仮設住宅で新年を迎えた東北の人々にとっては、素直に「おめでとう」といえる心境ではないでしょう。が、多くの日本人は被災された方々の悲しみを理解し、同悲の心で寄り添い支援を続けていこうとしているのです。

人は心の中に引いた線を、心を新たにしていって越えていくこともできます。絶え間ない時の流れを暦で区切って、元旦にけじめをつける習慣を伝えてくれた私たちの先祖の英知を素晴らしいと思うのです。この日、人は過去を振り返り、現在を見つめ、未来への夢を描く瞬間を持ちます。それは人生の句読点でもあるのです。

さて、明けて迎えた辰の年。辰は伸^{しん}に通じ、すべてのものが動き伸びることをいいます。日が動き始めれば「^{あした}辰」。手が動けば「^{ふるう}振」。新しい生命を宿せば「^{みごもる}娠」。言葉を発するのは「^{にぎわう}唇」。貝（金）が動けば「^{にぎわう}賑」。言葉も行動も財産も、使い方によって人を幸福にも不幸にもします。

仏性という仏さまの生命を宿し、生かされているという自覚から、自然に手が動いて合掌。唇に念仏の一行を励めば、明日の幸せが約束されているのです。

そこで、新年にあたって次の言葉を贈ります。

「今日という日は、これからの人生の最初の日である」

私たちは悲しみや苦しみに出会ったり、仕事に失敗したりすると、くよくよとして心が迷います。そんな時、この言葉を胸にたたんで、新しい一日を歩いていきましょう。

22 泥かぶら (2012/2/1)

美しくありたい、と願うのは、なにも女性に限ったことではありません。年齢・性別に関係なく、誰もが持っている願望です。

かつて早稲田大学の教授であった会津八一先生（1881～1956）は、門弟の一人に宛てて書かれた手紙の中に、「美しき人になりたく候」という言葉を残しておられます。美しき人、とはどういう人か。

昔、ある村に身寄りがなく顔の醜い少女がいました。髪はそそげだち顔は泥まみれで、まるで泥のついた蕪のような顔なので村人から「泥かぶら」と呼ばれていました。時には邪魔だからと川になげこまれたり、子どもたちからも「汚い！ 臭い！」とつばをかけられたり、親なしっ子だと石を投げられたりしました。

ある時、泥かぶらは旅のお坊さんに「きれいになりたい！」と泣いて訴えました。その時、旅のお坊さんは、こうすれば美しくなれる、と三つのことを教えました。

「自分の醜さを恥じないこと。いつもにっこり笑うこと。人の身になって思うこと」

美しくなりたい一心で、彼女はいじめっ子の罪をかぶったり、病人のために危険を冒して薬を取りにいったりするうちに、人のために尽くす喜びを知りました。また、村人の泥かぶらを見る眼が、優しく変わってきました。こうして泥かぶらは、村人の心を明るくし、仏さまのように美しい少女になりました。

真山美保さん作の「泥かぶら」。この話はどの子どもも本来持っている美しい心や、人への思いやり、困難にも耐える強さは、どうすれば引きだされるかを教えています。

人は「生まれ」によらず、「どのように生きてきたか」「どういう出会いを重ねてきたか」という「生き方」によってそれぞれの「顔」が作られていく、といえます。そして、自分が変わることによって周囲も変わっていくのです。

本当にいい顔というものは、年輪を重ね、人生経験を積み上げ、いくつになっても美しいものに感動する心と感謝の心によって作られるもののようなものです。

23 同悲する心 (2012/3/1)

弥生三月。卒業・就職・転勤と、春は別れと出会いの季節です。遅れていた梅の花だよりも聞こえてくるけれど、もっと辛い別れを体験された多くの人のことを思うと、花に浮かれる気分にはなれません。

東日本大震災から一年が経過しました。津波で失われた多くの命にとって、一周忌を迎え

ます。春の彼岸が来ても、墓参りさえ出来ない被災者の多くの方々の心を思えば、ただ手を合わせ祈るばかりです。

3月11日の大震災発生以来、朝夕の勤行で一日も欠かさず亡くなられた方々の回向をしています。

仏教に「代受苦者」という言葉があります。本来は地藏さまのように自ら地獄に落ちて苦しむ人々を救う菩薩行をいうのですが、「自分が受けたかもしれぬ苦しみを、私に代わって受けられた人々」と位置づけて一年間、回向を続けてきました。

金子みすゞさんの詩を発見し世に出された童謡詩人・矢崎節夫先生は震災の三日後に永観堂の参詣され、たまたま私の語る法話の中の「代受苦者」という言葉に大変感銘を受けた、と述べられています。

「被災者という言葉には、他人事のような冷たさがあります。私に代わって苦を受けられた人という代受苦者には、他人事でない自分のこととして共に悲しむ心があります。これこそ『みすゞの詩の心』なのです」

過日、京都会館での講演会で矢崎先生は、多くの聴衆にそのように語られました。

『慈心相向』という言葉があります。「慈しみの心で相手と向き合おう」という意味で、善導大師の言葉です。この一年、被災地へ何度も赴き、涙しながらボランティア活動に取り組んだ若者たちが大勢います。この涙の中に、涙した者しかわからぬ尊いものがあります。これを「慈心」といい、「同悲心」ともいいます。自分の悲しみを通して他人の悲しみを知る心です。

同悲するところが、人間愛の基本なのです。

24 恨みを捨てよ (2012/4/1)

四月八日はお釈迦さまの誕生日で、「花まつり」といいます。では、四月七日は何の日でしょう？

法然上人のお誕生の日です。長承2年、今から879年前に岡山県の美作でお生まれになりました。幼名は勢至丸。父は土地の豪族・漆間時国（うるまのときくに）といい、地方の治安を守る警察の機動隊長のような役人でした。が、都から派遣されてきた明石定明という豪族に襲われて、非業の最期を遂げます。勢至丸9歳の春でした。物陰から矢を放って相手に手傷を負わせましたが、一族郎党すべて討ち死にするという悲惨な結末でした。

今わの際に父は勢至丸に、こう言い残しました。

「仇を討ってはならぬ。お前が恨みを晴らせば、残された彼の子供もお前を怨みに思うだろう。仇討ちに果てしがたい。恨み心を捨てよ。出家して我が菩提を弔い、恨み心のない安らぎの心を手にいれよ」

この遺言が勢至丸の生涯に大きな影響を与えたのです。比叡山に登り、十五歳で出家して

戒を受け、法然房源空と名乗りました。叡山では知恵第一、文殊菩薩の生まれ変わりといわれるような秀才でしたが、学問や知識を深めるほど、安らぎの道から遠ざかるため、苦しみは増すばかりでした。

九歳で一家に降りかかった夜討ちによって、いわば犯罪被害者となった法然上人は、以後24歳で保元の乱、27歳で平治の乱が興り、驕る平家の栄華と滅亡を目の当たりにするばかりでなく、戦乱のほかに飢饉、大火、地震、台風など時代が音をたてて崩れていくのを身をもって体験したのです。末法乱世の地獄のような苦しみに喘ぐ人々を見て、「安らぎの心」がどこにあるのか。

「かなしきかな、かなしきかな。いかがせん、いかがせん」 青年法然房の悲痛な叫びです。やがて43歳。ついに浄土門の教えを開きます。南無阿弥陀仏をひたすら称えれば、人は皆、安らぎの心を恵まれるという他力の教えです。魂の長い遍歴を経て、求道者法然房は救済者法然上人となったのです。その道程にはいつも、父親の「恨みを捨てよ。安らぎを求めよ」の遺言が心に刻まれて忘れることがなかった、と述べられています。法然上人の専修念仏の思想の原点に、父の遺言があったことは忘れてはならぬと思うのです。

25 母心大悲 (2012/5/1)

五月の第二日曜を「母の日」と決めたのはアメリカです。1910年、アンナ・ジャービスという女性が母の死を悲しんで、亡き母の好きだったカーネーションを捧げたのが始まりだといわれています。

母の日がくると思い出すのは、サトウハチローさんの「おかあさん」という詩集です。落第3回、転校8回、勘当17回という暴れん坊の少年時代と放蕩の青春を送ったハチローを、優しく見守ってくれた母への追憶の詩集です。その中にこんな詩があります。

一番苦手なのは おふくろの涙です
 なにもいわずに こっちを見ている涙です
 その涙に灯りがゆれたりしていると
 そして灯りが だんだんふくらんでくると
 これが一番苦手です

母の涙。それは美しくも悲しく、どんな言葉にも勝るもの。それがハチロー少年を立ち直らせたのですね。

かつてテレビで「0歳からのメッセージ」というのを見ました。生後6ヶ月の赤ちゃんについて、母親と一緒にいる時と離れている時との体温の変化を測っているのです。母親が去って一人にされると、赤ちゃんの体温がどんどん下がります。そんな時の不安で悲しそうな赤ん坊の表情。母親が戻ってくると、また体温は上昇します。母親が離れただけで皮膚の温度が冷えるほど不安となる赤ちゃんの反応こそ、育児の重要さを訴えているのです。

「世に母性（はは）あるは幸いなり。世に父性（ちち）あるもまた幸いなり」
法句經に説かれた釈尊の言葉です。釈尊は生後7日目に生母マーヤ夫人と死別し、その後、母の妹であるマハー・パジャパティが養母となって釈尊を育てられました。生母と養母。二人の母の愛情に深く感謝されたからこそ、「この世に母がいるくらい幸せなことはない」と述べられているのです。

母の日制定より100年を経た今、時代とともに生活様式は変わっても、母と子の愛情に変わりがあるはずがないのです。

十億の人に十億の母あれど わが母にまさる母ありなむや （暁鳥 敏）

26 拝啓、親父殿 (2012/6/1)

先月は「母の日」について書いたので、今月は「父の日」について書かないと不公平になりますね。六月の第三日曜日、いわば父を讃える日。「讃えられるようなことは別にしていよ。ごく普通の親父だね」と謙遜することはないのです。偉い親父でなくても、父親であることに変わりはないのですから。

誰もが例外なく父親のイメージを持っているはずです。

頑固な父・まじめな父・頼もしい父・怖い父・優しい父・元気一杯の父・疲れきっている父・厳しい父・おもしろい父・友達のような父・働き蜂のような父・・・人さまざまに父親の思い出もあるでしょう。

かつて、怖いものの代名詞に「地震・雷・火事・親父」といわれていました。今では「地震・雷・火事・女房」と変化していて、父権喪失の時代だといわれます。父親本人がヤケ気味に「おれは月給運搬人だ」とか「おれは下宿人だ」と自嘲しているとか。

でも、最近の父親の存在は、世間の評判ほどひどくはないようです。ある調査では中学・高校生の二人に一人は父親に満足しています。父親が自分に対して暖かい、優しいと思っている子どもは83%もいるのです。もちろん「父親は厳しい」と答えた者も半数近くはいるのです。理想的な父親は「家族から尊敬される男性」。しかし現実の方は、仕事でも家庭でも「いまいち自信を持たず、存在感が薄れている」と感じているようです。そんなお父さんに、次のメッセージを贈ります。

◆優しい親父が本気で怒った。大きな拳で僕を殴った。痛かろう。僕よりも親父の心。

ありがとう。親父の気持ち。 （岐阜県 二十歳 男）

◆父は学がないからと、体を使って僕らを育てた。愚痴ひとつ言わず、ろくに楽しみもなくただひたすらに働いた。

「父さん、楽しみはないの？」

無口な父が一言、「おまえらが楽しみだ」 涙が出た。 （福岡県 三十二歳 男）

◆私には何も言わないくせに。いつも黙っているくせに。学校の先生に聞いた、父の言葉。

「娘の夢のためなら、何でもします」。ずるいよ。お父さん。（長野県 十八歳 女）

「ちょっと照れくさい孝行のメッセージ」より

「どんな甲斐性無しでも、父親は存在するだけで価値がある」と、曾野綾子さんが言っています。「父に慈恩あり」と釈尊は説いておられます。

世の父よ。少しは子どもの話相手になり、心を通わせあい、親子の絆を強めながら、生きていきたいものですね。

27 如自当知 （によじとうち 汝自らまさに知るべし）(2012/7/1)

「この世にいじめがなくなりますように」

という遺書を残して自殺した少女がいます。この中学校では、なんどもクラスでの話し合いを重ね、全生徒が「いじめ」をなくす決議をし、自殺した彼女の追悼会で誓い合ったのです。その決議というのは

- ・まわりの状況に流されない。
- ・いつも相手の心を考えて、言ったり行動したりする。
- ・特定の友達を避けたり、無視したりしない。
- ・そして、互いに良いところを認め合う。

言葉でまとめたら、きわめて当たり前のことばかりです。けれど、これは一人の仲間を失った悲しみに沈みながら、真剣に考えぬいた掛け替えのない決意なのです。

「この世にいじめがなくなりますように」

と、命をかけた問いかけと願いに対して、一人で、あるいは友達たちと、教室で、更には家庭で、彼らは何度となく考え悩んだことでしょう。そして、たどり着いた結論が上記の四項目だったのです。

人は誰でも自分を認めてもらいたい、という願いを持っています。だから差別されたり無視されることは、自分の人間性を否定されることであり、なにより辛いことです。そのことに気付いたからこそ、相手の心を考え、周りの状況に流されない強い人間であろうと決意したのです。忘れてほしくないのは、その途中の苦しかった心の経過です。いじめを考えることは、結局は自分の心を見つめ、広く人間関係に思いを巡らすことになるのです。

たとえば、「互いに良いところを認めあう」というけれど、果たしてどの程度、人と人との人間関係が構築されているのでしょうか。あまりにも他を見つめすぎ、他人の欠点ばかりが目につき、批判ばかりしていることはありませんか。親子、夫婦の間でさえ、とかく欠点ばかりが目向きやすく、それが我々人間の弱さであると釈尊は述べておられます。

「汝自当知」。（汝、自らまさに知るべし）

人を批判する前に、私自身の心の有り様をしっかり見つめよ。まず自分自身を正しく知れ、という教えです。いじめや差別のない社会は、このような深い宗教的な自己反省から生まれてくるのです。そして「良いところを互いに認めあう」という人間関係も結ばれてくるのです。

28 乳哺養育の恩 (にゅうほよういくのおん) (2012/8/1)

上野動物園のジャイアント・パンダ、シンシンの雄の赤ちゃんが、先月11日に肺炎で死んだというニュースは、多くの人々をがっかりさせましたが、誰よりも悲しみが深かったのは、元園長の中川志郎さんではなかったでしょうか。その中川さんが、まるで赤ちゃんパンダのあとを追うように7月19日に亡くなりました。若い頃は「パンダ課長」と呼ばれ、パンダだけでなく多くの動物に愛情を注ぎ、「動物たちと人生を歩んできた人」ともいられています。

以前、中川さんが「哺乳動物の母親と子どもが体を接触されるのに、三つの型がある」と書かれているのを読んだことがあります。

一つは、猿のような「抱擁型」。生まれた子どもを、ある期間、自分の体に抱きかかえるというタイプです。

二つ目は「舐触(ししょく)型」。子どもの体を舐める動物です。虎やライオンのような肉食動物も、キリンやシマウマのような草食動物も、母親は実によく子どもを舐めます。

そして三番目は「添い寝型」。イタチや熊などのような、子どもが未熟な状態で生まれる種類に多いのだそうで、母親は体を丸めて、添い寝するように子どもを抱え込むのです。いずれにしても、母親と子どもが体を密着させるということが興味深いですね。この時期にそういう接触をさせないと、子どもの心理的発達に障害が出る、といわれます。

人間もまた、哺乳動物ですね。

子どもが幼い時に母親と十分な接触が得られないと、他人と親しい関係が保てなくて、人生に無関心で、衝動をコントロールできないのだそうです。

「父母恩重経」の中に、この時期に親から子どもが受ける恩を十種類説かれていて、その第四番目に「乳哺養育の恩」があります。文字通り抱擁し添い寝しながら母乳をいただいて育ててもらった恩があるのです。

親を選ぶ自由を持たない子どもと、子どもを選ぶ自由を与えられていない親との不思議な出会いによって、人は生まれます。そして、子どもを思う母親の思いは、重く深いのです。その愛は仏さまの慈悲にも通じるのです。

29 アメリカ・インディアンの教え (2012/9/01)

いじめが社会問題化する中で、やはり問われているのは家庭における親の姿勢ですね。

着物を仕立てる時、仕付け糸をつけます。縫い目を正しく整えるために、仮にざっと縫い付けておく糸をいいます。やがて着物を着るときは、この仕付け糸をはずします。ここから家庭での幼児教育を「しつけ」というようになりました。社会生活の秩序を守り、自らを向上させていくことのできる社会人に育てあげること、と辞書にあります。この場合、漢字で「躰」と書きます。礼儀作法を身につけて身だしなみを美しく、という意味があります。

躰は乳幼児から幼児期にかけてするものです。大きくなってからの躰教育は、あまり効果がありません。小さい時に甘やかし放任しておいて、中学生くらいになって急に厳しく仕付けても、反抗し親から離れていくだけです。幼い時に根気よく反復して習慣付けるのが「躰教育」というものなのですね。

ところで、子育てについての11の教えを綴った「アメリカ・インディアンの教え」という詩を紹介しましょう。

「子どもたちは、こうして生き方を学びます。
批判ばかり受けて育った子は、非難ばかりします。
敵意に満ちた中で育った子は、誰とでも戦います。
冷やかしを受けて育った子は、はにかみや、になります。
妬みを受けて育った子は、いつも悪いことをしているような気持ちになります。
心が寛大な人の中で育った子は、我慢強くなります。
励ましを受けて育った子は、自信を持ちます。
褒められる中で育った子は、いつも感謝することを知ります。
公明正大な中で育った子は、正義心を持ちます。
思いやりの中で育った子は、信仰心を持ちます。
人に認めてもらえる中で育った子は、自分を大切にします。
仲間の愛の中で育った子は、世界に愛を見つけます。」

インディアンらしい素朴な教えですが、現代の日本人が、日本人の子育てが見失っているものばかりですね。今、大人たちに心に留めておいてほしい教えだといえます。

30 月見る月は多けれど (2012/10/01)

旧暦では7・8・9月が秋であり、8月は中の月なので「仲秋」といいます。それで8月15日の満月を仲秋の名月として、月見や俳句の会を開いて美しい月を愛でる行事がもたれてきました。新暦での今年も9月30日。台風の影響で雨月となりました。

「月々に月見る月は多けれど 月見る月はこの月の月」という歌があります。
私はどちらかといえば、一ヵ月後の十三夜の月が好きです。深まり行く秋の夜空に輝く「後

の月」(10月27日)に期待しているのです。

名月を鑑賞する会は、もともと中国の中秋節に倣ったもので、その昔は公家などの上流社会の遊びでした。ススキを活けて団子や秋の果物を供えて、庶民の間で月見の風流を楽しむようになったのは、江戸時代からだといわれています。

その頃のこんな話が伝わっています。

ある俳句の会に一人のみすぼらしい旅人が仲間入りをしました。煌々と輝く月の下で、宗匠たちが「十五夜の」とか「名月や」など、自分の句を披露しはじめました。やがて旅人の順番になって、おもむろに

「三日月の・・・」と詠み始めたものですから、まわりから軽蔑の笑いが起こります。満月を見ながら「三日月の・・・」は、おかしいですね。ところが、その後に「ころより待ちし今宵かな」と続いた句に、一瞬みんな静まりかえり、やがて賞賛の声が上がりました。

「三日月のころより待ちし今宵かな」

旅人は小林一茶と名乗って立ち去ったといえます。粋な話ですね。

月影のいたらぬ里はなけれども ながむる人のところにぞすむ
法然上人のお歌です。「月の光はどのような所にも至り届くように、阿弥陀仏の慈悲の光もすべての人を隔てなく照らしている。その光に気付く人々のところには、より一層澄み輝いている」という意味です。

月を眺めるということは、夢や希望を失わないということでもあります。私の周囲に私を見守り支えてくださるものがあり、人がいる。そこに感謝するところと夢や希望を持ち続けられ、いつも私たちは守られながら明るく生きることができるのです。

31 露の世は露の世ながら (2012/11/01)

11月19日は「一茶忌」。江戸時代後期の俳人・小林一茶が65歳で亡くなった日です。農家や貧しい庶民の暮らしを数多く俳句に詠みました。その数、二万句に及ぶといわれています。けれど、一茶の生涯は意外なほど不幸続きだったのですね。

3歳のとき母が亡くなり、9歳で新しい母を迎えたものの、気が合わないのかひどく苛められ、15歳の春、江戸へ奉公に出されます。やがて、故郷へ初めて帰ってきたのは29歳。けれど翌年、信心深かった父の代参で関西・四国・九州への旅に出ます。こうして、一茶の長い遍歴の旅が続くのです。

これがまあ ついの栖(すみか)か雪五尺

やっと安らぎの場を得たのは52歳。28歳のきくを嫁に迎え、次々に生まれてきた4人の子どもたちは皆、幼くして亡くなり、妻きくも38歳で病死します。再婚したものの、すぐに離

別という不幸が続き、結局ひとりぼっちになってしまいます。家庭的に恵まれず、人生のあらゆる苦勞をなめつくしたのです。

文政10年（1827）6月1日、北国街道の柏原宿の大半を焼く大火に遭遇し、住んでいた母屋を失った一茶は、焼け残りの土蔵に移り住み、この年の11月19日に65歳の生涯を閉じたのです。ですから、

めでたさも中位なりおらが春

こんな心境になれた年月は、とても短かったのです。そんな一茶だからこそ

痩せがえる負けるな一茶これにあり

われと来て遊べや親のない雀

やれ打つな蠅が手をすり足をする

など、小さな生き物たちにも愛情の眼差しが行き届いていたのだと思います。

中でも特に心打たれる句があります。

露の世は露の世ながら さりながら

長女さとか瘡で死んだ時に詠んだ句です。信心深い一茶でしたから、この世は露のようにはかないものだと知ってはいても、それでもやはりあきらめ切れない親心がにじみ出た句です。亡き子を思う親の切なさが胸を打ちます。

「生きとし生けるものに慈愛なきもの、かかる者は卑しき人と知るべし」

経典の一節です。

「慈しみのところがあるからこそ、人間なんだよ」

一茶の俳句を読んでいると、そんなことを教えられるのです。

32 童心浄土 (2012/12/01)

11月に発表された秋の叙勲に、女優であり歌手の宮城まり子さんの名前がありました。日本最初の肢体不自由児の特別支援施設「ねむの木学園」を、自分の力で創設してから今年で45周年。「誰もやらないのなら、自分がやらなきゃ」という思いで養護を始めたものの、体の弱いまり子さんにとって、それは大変な事業だったようです。

苦しみと悩みに満ちた毎日の生活の中で、まり子さんを支えたのは子どもたちの絵だったのです。おおらかで、なにものにもとらわれないで、いきいきと、のびのびと、自由で明るい詩情にみちた作品こそ、ねむの木学園の子どもたちの世界なのです。

静岡県掛川にある「ねむの木学園・こども美術館」を訪れた人々は、その絵から大きな感動を受けます。それは子どもたちの絵が、素直な感動をそのまま表現しているからです。絵を見た女性の一人が

「とても素晴らしい絵ね。どんなに障害があっても、心は障害を持たない人よりも美しい

んですね。私、生きる勇気がわいてきました」といっています。

人は皆、美しいところに出会って、汚れきった自分の心を洗うことができます。

この永観堂の幼稚園でも、11月には「もみじまつり」があって、園児たちの作品が展示されます。同じテーマの絵であっても、色使いや構図が違って、きらきらするほどの、一人ひとりの個性の輝きがあります。大人には決して描けない素直な感動があります。粘土やペーパーを使った立体的なオブジェも、その豊かな発想に驚きます。金子みすゞさんの「みんなちがって、みんないい」という世界があります。

どうして子どもたちの絵が、こんなに人の心を打つのでしょうか。

「童心浄土」という言葉があります。岡山県生まれの児童文学者・坪田譲治さんの文学碑に刻まれたことばです。童心とは、きれいなものを素直にきれいと感じるところです。正直なところ、飾らないところがあるから、人のところを打つのです。

童心即仏心。童心は仏心に通じます。まり子さんは「やさしいところ」といっています。

「やさしくね。やさしくね。やさしいことは つよいのよ」

毎日があわただしい日暮しならば、時には美しい絵を見て、美しいところに出会って、心を洗ってみることも大切です。

私自身の「童心」を取り戻すためにも。

33 人生五計 (2013/1/01)

初茜（はつあかね）

この言葉には、なんとも清しい響きがあります。大昔、万葉人は太陽が昇る直前の東の空の色を「茜さす」といいました。初日の出が昇る少し前、紅く染まる東の空。もちろん、単なる紅ではありません。刻々変わる色合いが、それまでの暗闇を破って躍動し、新しい年のスタートを飾ります。

ところで、年の初めになるといつも思うのは「一年の計は元旦にあり」という言葉です。----昨年の元旦にもそう思ったけれど、計画をしっかりと立てなかったから予定通りいかなかった。今年こそはきちんと計画を立てて、一つ一つの目標を仕上げていこう----と、心を引き締める時の気持ちは、お正月しか味わえないことです。

人生設計について、古来、多くの賢人がいろいろ残していますが、中国の宋の時代に朱新仲という学者が「人生五計」を説いています。

一つは「生計」。幼い頃から健全な生命力を育てる計画です。

二番目は「身計」。世の中の役に立つ人間となるために、勉強して自分を磨いていく計画です。

三番目は「家計」。成人して結婚し、子どもを産み育て、良い家庭を築いていく計画です。

四番目は「老計」。晩年になって充実した老後を送る計画で、そのためには若い頃から豊

かな心を持てるよう努めなければなりません。

最後に「死計」。死に至るまでの用意をいいます。人間の死亡率は100%。最期の時を心静かに迎えるにはどうするか。この世との別れの準備はいいか。心の用意はできているか。最近には更に、尊厳死や脳死、臓器移植などが重要な問題として迫っています。

以上五計のうち、「生計」と「家計」は千年の歳月を越えて今も生き残っていますが、当初の意味ではなく「一家を支える家庭の経済や暮らし向き」という風に使われています。結婚するのも、家庭を支えるのも先立つものはカネ次第と経済重視に変化しているのです。

今、豊かな老後を暮らす生涯学習としての「老計」と、自分の死を迎えるにはどうすべきか、の「死計」が人々の大きな関心となってきました。わが身の五計や、いかに？

新しい年を迎えて、一年の計ならぬ「一生の計」に思いを巡らせることも大切か、と思うのです。

34 一休さんの遺言状 (2013/2/01)

「門松は冥土の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」

年が明けるといつも、一休さんの作ったこの歌を思い出すのです。そこで 正月明けのある日、京田辺の酬恩庵にお参りしました。通称「一休寺」と呼ばれるこのお寺は臨済宗の高僧・大應国師の遺風を慕った一休禅師が、その恩に酬（むく）いる為に「酬恩庵」と名づけて再興し、81歳で大徳寺の住職となった時もこの寺から通われ、88歳で亡くなるまで晩年をこの寺で過ごされているのです。

禅宗では高僧の肖像を頂相（ちんそう）と呼んでいますが、宝物蔵にある禅師の頂相は、とんち小僧であり風狂という型破りな生き方をした一休さんの親しみ深い愛嬌ある容貌の中に、どこか寂しそうな風情が感じられます。そんな一休和尚の逸話を二つ紹介しましょう。

【その1】

一休和尚が金持ちの家の法要に招かれた、その前日。たまたまその家の門前を通ったので立ち寄ると、みすばらしい衣姿を見て乞食坊主と思った門番が「物乞いなら裏へまわれ」とけんもほろろに追い返されたのです。

翌日、紫の衣を着て門前に立つと、丁重に奥座敷へ案内されました。主人に昨日の一件を話し、紫衣を脱ぎ捨てて、「私には何の価値もござらぬ。紫の衣に価値があるのなら、この衣に読経してもらおうがよろしかろう」と言い捨てて帰ってしまいました。

【その2】

一休和尚が大徳寺の住職となって数年たち、いよいよ臨終間近という時、遺言状をしたためて「この遺言状は私が死んでも、すぐに開封してはならぬ。宗派存亡の危機に瀕する一大事が到来した時に、開いて読むべし。解決法がたちどころにわかるであろう」と厳しく言い

渡しました。

やがて大徳寺の浮沈に関わる重大事が出来し、宗門の重役が鳩首協議するが名案が浮かびません。その時、一座の中の一人が一休和尚の遺言状のあったことを思い出し、奥深くしまわれていた遺言状を取り出して、一同固唾を吞んで開いてみると、中にはたった一行。

「なるようになる。心配するな」

と書かれていたのです。全員が啞然とした、といいます。

それにしても「なるようになる」という一句は単なる冗句ではなく、世の中の本質を言い当てた実に見事な金言、ではありませんか。

35 出あい ふれ愛 めぐり愛 (2013/3/01)

三月は「別れの季節」であると同時に、新たな「出会いの季節」に繋がります。私たちの人生は巡りあいの連続だといえます。さまざまな出会いや巡りあいによって「生かされて」いるはずなのに、それに気付かないでいることが多いのです。良寛さんにも、そんなエピソードがあります。

玉島（岡山県）の円通寺で修行をしている時、仙桂という仲間が寺にいました。ところが彼は一言もしゃべらず、身なりも構うことなく、座禅もせず、ただ、毎日黙々と畑を耕し、野菜を上手に作って寺に来る人たちに与えているだけの、まったく目立たぬ存在でした。

33歳で師匠から印可（悟りを得た証明書）を受けた良寛さんは、それから三年間の諸国行脚の旅を終えて、故郷の越後に帰ってきます。ある日、庵で勤行の途中、突然、かつての仲間である仙桂の存在に気付きます。

「そうだ、彼こそひたすら自分を守り、人の喜びを優先させ、黙々と大地に向かって座禅していたのだ」と悟ったのです。

「当時、我これを見て見ず。これに逢って逢わず。

嗚呼、今これを習わんとするも得べからず。仙桂和尚は真の道者」

こんな詩を作って彼を偲んでいます。

考えてみれば、私たちの中にも仙桂和尚のような人がたくさん存在していたのです。出会っていたのに、その存在と影響に気付かない人が・・・。

「袖触れ合うも多生の縁」という言葉があるように、仏教では縁の深さを大切なものとして説いています。自分の人生を変えるような人との出会いを「邂逅」といいますが、これも縁が切実な契機となっています。学校や職場など、毎日の生活の中で、あるいは書物を通してさまざまな人との出会いがありながら、これに気付かず忙しさにまぎれてしまうのは勿体ないことです。「多生の縁」が心の栄養素となるためには、私たちの感性が重要な要素となります。

無量の縁によって生き、生かされているわが身の幸せに気付いた時、命の尊さに思い至るのではないのでしょうか。

36 命なりけり (2013/4/01)

春ごとに花のさかりはありなめど あい見んことは命なりけり
春らんまん。もちろん彩りの主役は満開の桜。京都では、今年は平年より一週間早く開花宣言があり、四月になっていよいよ「都ぞ春の錦なりけり」という風情になりました。あなたは今年の桜を、どこでご覧になるのでしょうか。

桜は「咲く・ら」の意味だといわれています。「ら」というのは親しみを込めた言い方であり、群がった様子を表している、という説があります。いずれにしても、枝一杯に花をつける華やかな感じが、そのまま名前になったのでしょう。

咲きはじめ、まだ赤みの強い頃はいかにも初々しくて、入学や就職をひかえて希望に燃えている若者によく似合います。目を近づければ花びらは五枚、その一枚一枚の先端は鋏でも入れたようにチョココンと切れています。「あれはね、夜中に植木屋さんが一枚一枚ていねいに鋏で切れ込みを入れているんだよ」といったら、「へ～、すごい！」と感動していた女性がいました。

少しの力では抜けないくらい、しっかりしているのに、やがて満開を過ぎるとハラハラと舞い落ちて散っていくからこそ、咲く花がより輝いて見えます。

ところで冒頭の歌は「古今集・春下」にあり「詠み人知らず」です。「春ごとに桜の花盛りはあるだろうけれど、それを目の当たりにできるかどうかは、我が命あればこそ」。今年も桜に出会えたことに、生きている喜びを歌っているのです。

確かに、70歳を過ぎると「こうして眺められるのは、あと何年、あと何回あるだろう」という思いが脳裏をかすめます。もしかすると「はたして、来年の花は？」と思う人もあるでしょうね。

「花を美しいと思う心の底には、お互いの命を慈しみ、地上の短い存在のうちに巡りあった喜びが、無意識のうちにも感じられているに違いない」 東山魁夷画伯の言葉です。

確かに、私たちは短い人生の中でこうして巡りあったことの喜びを感じなくてははいけません。そして、毎日が一日限りの人生の連続ですから、自分に与えられた、たった一瞬の「いのち」を、決して粗末にはできないのです。

37 ^{せいらん}青嵐に吹かれて (2013/5/01)

冬の寒さがきびしい年は樹木がよく茂る、といわれています。そのためなのか、永観堂の楓の若葉は例年にも増して勢いがあり、境内を吹き渡る風が若葉の香りを運んできます。気

持ちの良い、爽快な薫風です。木の芽風、若葉風など、さまざまな呼び方がありますが、坂本冬美さんの歌にも「青嵐に吹かれて」というのがあります。

永観堂の若葉の代表選手は楓ですが、もう一つの代表はなんといっても楠木ですね。一種赤みを帯びた新芽が萌え上がるこの頃、それが日の光に輝くと私たちの心までキラキラさせてくれます。

不思議なことですが、この季節、楠木の下にいと、風が吹かなくてもパラパラと葉が落ちてきます。まるで落ち葉の季節のように。

常緑樹の古い葉は、若葉が育つのを見届けて、枝から離れ落ちるのだそうです。そういえば、「譲葉」（ゆずりは）という木もあり、若い芽をきちんと見届けてから、古い葉は静かに青嵐に吹かれて舞いながら落ちていくのです。幸せな、そして見事な世代交代ですね。

楠木の成長は決して早いものではないけれど、着実に大木となっていきます。（代表的なのは青蓮院さんの五本の楠の巨樹で、京都市が天然記念物に指定しています。）そんなことから進歩は遅くても必ず大成する学問を「楠の木学問」と呼ぶのだそうです。その反対に、梅の木は生長が早いわりに大木にならないので、進み方は速いが大成しないままで終わることを「梅の木学問」といいます。スピードが求められる時代ですが、大成するには速さは関係なさそうです。あきず、あせらず、あきらめず。ゆっくりとマイペースで行くことが大切だ、ということを経験に学びたいものです。

楠千年さらに今年の若葉なり 荻原井泉水

福岡にある大宰府天満宮の楠の巨木の横に、この句碑があります。

千年のいのちを持つ楠の老木が、今年も若葉を茂らせた。そこに生命の厳かさを感じます。それは私たちの生命にも通じます。脈々と続いた先祖のいのちを受け継いで、今、自分のいのちを生きている。そして次の世代へ、さらに未来の子孫の生命へと連なるいのちなのです。親から与えられたいのちに感謝しつつ、精一杯生き抜いて、悔いなく幸せな世代交代ができたらいいな、と願っています。

38 体 解（たいげ）(2013/6/01)

水田に行儀よく植えられた稲の苗が風にそよいでいるのを見ると、中学生の頃を思い出します。学校の田んぼでヒルに足を吸いつかれながら田植えをした経験があるからです。

苗を育て、半年かけて収穫して、獲れた米を持って東京へ修学旅行に出かけました。東京で何を見たか、よりも、かえってそんなことの方が懐かしく思い出されます。

今、子どもたちは山や田圃の仕事をする機会がほとんどありません。

「子どものうちに汗を流して働くことを学ばせよう。日本文化の礎である木を見つめなおして、風雪に耐えて育つ苗木から人生を考えさせることも、意義深い」

と考えると、静岡のある中学校では植林を始めました。

1年生で植林をします。2年になって、下草刈りをします。山の斜面で鎌を手にしての作業は大変です。根気がいらいます。

ちっぽけな苗木を、一年で1メートル近くまで育ててしまう山の豊かさに驚く一方で、下草をそのままにすると、たちまち苗木を枯れさせてしまう自然の厳しさも知ります。

数学や国語の時間にはおとなしい子が、真っ先に檜林に入って夢中で作業をする。その生き生きした良い顔が甦る、と担任の先生は言います。

やがて3年生になると、京都や奈良に修学旅行に出かけます。檜を育てた経験に立って、日本古来からの木造建築を学ぶのです。世界文化遺産であり、最古の木造建築である法隆寺や、最大の木造建築である東大寺も訪れます。

樹齢二千年余りの檜で建てられた法隆寺が、千三百年余りの生命を、今日なお保ち続けるという神秘に触れたとき、彼らはどんな感動に打たれるのでしょうか。

仏教では「体解」ということを大事にします。身体でわかる、ということです。

頭で知るよりも、身体全体で覚えるものだという伝統は、今も生きています。僧侶の生活の中で大切なことは「一、掃除 二、勤行 三、学問」といって、読経や学問よりもまず掃除に励め、と教えます。自分の周囲の整理や掃除もろくにできないものが、まともな学問が身につくか、というのです。

知識でわかる間は、まだ本物ではないのです。

自ら、身体でわかってこそ、本物となるのです。

39 星に願いを (2013/7/01)

ささのはさらさら のきばにゆれる おほしさまきらきら きんぎんすなご
 天の川の東に、天帝の娘の織姫が住んでいて、彼女の仕事は機織（はたおり）。朝から晩まで、たゆまず織っていました。天の帝は、天の川の西に住む牽牛と結婚させます。結婚すると彼女はさっぱり機を織らなくなりました。父親は怒って二人を別れさせ、織姫を東に連れもどします。ただ、年に一度、七月七日の夜だけは、川を渡って会うことを許しました。現代流にいうと、織姫は琴座の「ベガ」。牽牛は鷲座の「アルタイル」。日本での七夕まつりは、この伝説を元にして中国の行事を取り入れたものです。

中国ではこの夜、女性たちが七本の針に五色の糸を通して、庭に筵を敷いて机を出します。その上に、酒・魚・果物・菓子を並べて針仕事の上達を祈りました。これが日本に伝わって、宮中の「節会」の一つになりました。この夜、庭に供物を並べ、笹竹に五色の短冊を飾りつけて、そして女の子の学問や技芸の上達を願ったのです。もともと、七夕まつりは女の子のお祭りだったのですね。

永観堂では、6月の終りから釈迦堂の前の廊下に笹竹を取りつけ、短冊を用意して拝観に

訪れた方々に願い事を一筆書いてもらい、笹に結びつけます。ただ、願い事ならなんでもいい、というのではなく、東日本大震災の被災者への「励ましのメッセージ」を書いていただくようお願いしています。もうすでに数十枚のメッセージが寄せられています。その中のいくつかを紹介しましょう。

「心がいやされますよう 笑顔がもどりますよう」 「We are always with you」

「子どもたちの笑顔がいっぱいになりますように」 「強く 明るく 逞しく」

「京都も東京も東北も、今年はみんないい気持ちで天の川が見れますように」

私も「祈復興 あきず あせらず あきらめず」と書いて笹に結びました。

日本語だけでなく、英語・中国語・フランス語など国際色豊かです。7日が過ぎると笹に結ばれた短冊を、外国語は翻訳してもらい、すべて東日本の被災地へ送ります。

天の川の兩岸に光る二つの星を眺めながら、被災地の一日も早い復興を祈願します。

五色のたんざく わたしがかいた お星さまきらきら 空から見てる

40 お盆随感 (2013/8/01)

御饗する物こそなけれ 小瓶なる 蓮の花を見つつ忍ばせ 良寛

「せっかく訪ねてくれたのに、あなたをもてなすご馳走がありません。小瓶に蓮の花を挿しておきました。美しい花です。せめてこれを見て私のもてなしだと思って我慢して下さい」

70歳の良寛和尚が若く美貌の「思い人」貞心尼に宛てた歌です。良寛さんにとって貞心尼は、泥沼にあって泥に染まらず凜とさく紅い蓮の花であり、貞心尼にとっても歌の師である良寛和尚は、白い蓮華のようであったと思われます。二人の相聞歌は「はちすの露」と題して貞心尼によって書き残されています。

お盆の季節です。この時期に咲く蓮は、お盆を迎えるのに相應しい花ですね。そして蓮の花を見ると、良寛さんのこの歌を思い出すのです。

山並み遠く夕日が沈み、夜の帳が静かにおりて、お仏壇に飾られた提灯に灯がともる、お盆の夕べ。お盆はインドの言葉のウランバーナを漢字に当てて「盂蘭盆」と書き、略してお盆といいます。「逆さに吊るされるほどの苦しみ」という意味です。

お釈迦様の弟子で目連尊者という人は、母親が死後の世界で餓鬼道に堕ちて苦しんでいるのを知り、釈尊の教えに従って多くの人に食べ物を通供養することによって、母親の苦しみを救います。これがお盆の始まりです。

餓鬼道。それは足ることを知らないで、果てしない欲望でいつも飢えた心の状態をいいます。餓鬼道の苦しきは、この世の中にもたくさんあります。

満足することを知らないで、次から次へと金銭欲や名誉欲に支配され、いつもガツガツと飢えたように苦しんでいる人。何事にも喜びや感謝の気持ちを持つことのできない人。心が

逆さまになってしまった今の日本人の姿こそ、まず救われなければならない餓鬼道そのものではないでしょうか。

祖先以来、何十万年も続いてきた今の自分の命に、ここから感謝するのがお盆です。亡き人と語り、亡き人と出逢い、今生きている私の姿を顧みて、「どのように生き抜くべきか」を考える良い機会です。毎日を修羅場に生きる人。お盆こそ、泥沼の日常から離れた「このころの日」としたいですね。

41 彼岸からの声 (2013/9/01)

十年前の新聞に載っていた読者文芸欄の詩を紹介します。作者は兵庫県在住の高見さん、当時八十歳。「命日」という題です。

「お経も知らないくせに・・・」

今日は姉の命日だ。仏間にポカンと座っている。

それでも鉦を叩き線香を立て、蠟燭に火をつける。

八十四歳になった姉が、六十年近くもどこにも行かないで僕の前にいる。

二十四歳の姉が八十歳になった僕より、今日も年上の顔で僕を見ている。

「お経も知らないくせに。もういいからテレビでも見ていなさい」

にっこり笑って姉はいう。

「姉さん、あんたテレビは知らないだろ」 「そうだったねエ」

細く長く線香の煙が揺れている。

* * *

幾つになっても、やはり二十四歳の姉さんが慕わしいのです。でも本当は、残された者が亡くなった人を思う気持ちよりも、亡くなった人が残された者を思う気持ちのほうが、より切なるものがあるのです。

こころ静かに仏壇の前に端座し合掌して自分を振り返る時、全てこの世に生を受けた者は、一人で生きているのではない、と気付きます。「見守られている」と気付いた時、人は安らぎを感じ、彼岸からの声も聞くことができます。多くの人や物のお蔭によって「生かされている」ことに目覚め、感謝しなければなりません。

たった一つの尊いいのち。そのいのちの限りを尽くして、勇気と希望と真心をもって与えられた使命を全うし、豊かな家庭と明るい社会を築く人間。そんな人間になりたいものです。

お経は知らなくても良い。手を合わせて仏さまに向う。お仏壇は仏さまと家族と私を結ぶ、大切な拠り所なのです。

42 二度とない人生を (2013/10/1)

浜までは海女も蓑着る時雨かな 滝 瓢水

上の句は江戸時代中頃の俳人・滝瓢水の作です。瓢水は貞享2年（1684）播州別府（べふ）、現在の加古川市別府に生まれました。千石船を七艘も持って海運業を営む豪商の家でしたが、彼一代で放蕩のため財産を費消し、極貧を苦ともせず名の通り水に浮かぶ瓢箪のごとく飄々と風流の道に遊んだ人です。

彼の作品の中には、大阪の知己が遊女を身請けするというのを誡めて「手に取るなやはり野に置け蓮華草」とか、母の死後に墓に詣でて「さればとて石にふとんも着せられず」という句を創っていますが、これが瓢水の作であることはあまり知られていません。

ある時、一人の旅の僧が瓢水の評判を聞いて住居を訪ねると、あいにく留守なので近所の人に尋ねたところ「風をひいて気分が悪いので医者薬を貰いにいった」とのこと。それを聞いた旅の僧は「生死煩悩を離れて悟道の境地にあると聞いていたが、たかが風邪くらいで医者にかかるとは娑婆に未練のある証拠。取るに足りない似非坊主なら教えを乞う必要もない」と罵り去っていきました。

医者から帰ってそのことを聞いた瓢水は、近くの若者に僧を追わせ一枚の紙切れを手渡させました。そこには「浜までは海女も蓑着る時雨かな」と書いてあったのです。

時雨は晩秋から初冬にかけて降る雨で、一時だけ強く降る通り雨のことです。

---これから海に入って仕事をする海女が、急に降り出した雨をさけるために蓑を着て浜まで行った。どうせ海に入れば濡れるのだから蓑など着る必要はないのだが、浜までは濡れずにいきたい---という海女の気持ちを詠んだものです。

どうせ長くない命とわかっていても、折角人間として生まれてきたこの命だから、最後の最期まで愛おしみ大切にしよう。二度とない人生だから、あきらめず投げ出さず、あせることなく最善を尽くして感謝の日暮しをしよう。

瓢水の句は、そのことを私たちに教えてくれているのです。

43 人生の錦秋 (2013/11/1)

11月に入って永観堂の紅葉は、にわかになつてきました。

裏をみせ表をみせて散るもみじ 良寛

40歳も年の離れた貞心尼に、少年のような純愛を貫いた良寛さんが、臨終を前にして貞心尼の求めに応じて示した句だといわれています。

「貞心よ、あなたには私の人間としての表も裏もすべて、さらけ出して見せてきた。今、紅葉が大地に舞い落ちるように、私もまた仏の浄土に還っていくのだよ」との想いが込められているようです。

あみだぶに染むるころの色に出でば 秋の梢のたぐいならまし

これは法然上人のお歌です。山の木々には赤はより赤く、黄色や翠の葉のそれぞれが個性的で美しく輝いている。そのように阿弥陀仏のお慈悲の光に照らされると、老人は老人のままで、若者は若者らしく、男も女もそれぞれが美しく照り輝いて、それらが混ざり合う人の世は、まるで秋の梢を見るようにこの世の浄土を思わせる-----という意味です。仏さまの慈悲の光の中で、すべての人がありのままに生きよ、との教えでもあるのです。

げんれい和尚のテレビ説法

永観堂の中西玄禮管長が、下記のようにテレビ出演いたします。

- 番組 NHK教育テレビ「こころの時代」 ～人生の錦秋を生きる～
 - 放送 11月10日（日）朝5時～6時 再放送・11月16日（土）昼1時～2時
- 是非ご覧下さい。

なお、この番組はNHKラジオ第1「ラジオ深夜便」でも11月16日（土）朝4時5分から放送されます。

44 我、八十にして・・・(2013/12/1)

孔子の述べた「論語・為政篇」には、今も有名な言葉があります。

「我、十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳従う。七十にして心の欲する所に従えど矩（のり）を踰（こ）えず」

これは、次のように訳されています。

「私は十五の年に聖賢の学に志し、三十になって一つの信念をもって世に立った。しかし、世の中は意のままには動かず、迷いに迷ったが、四十になって物の道理が分かるにつれ迷わなくなった。五十になるに及び、自分が天の働きによって生まれ、また何ものにも代えられない尊い使命を授けられていることを悟った。六十になって、人の言葉や天の声が素直に聞けるようになった。そうして七十を過ぎる頃から自分の思いのままに行動しても、決して道を踏み外すことがなくなった」（「論語一日一言」致知出版社刊）

あなたは今、どの部分に差し掛かっておられますか。昔から人の生きる目標として、これほど日本人に大きな影響を与えた文章はないでしょう。

志学・而立・不惑・知命・耳順・従心 と縮めて愛用されてきました。ほぼ十年ごとの節目での自己完成の規律が、分かりやすく示されています。肝心の孔子さまは74歳で亡くなりましたから、七十にして心の欲する所に従っても、決して人の道を踏み外さない心境での大往生だったのでしょう。ところが、その為に80歳以後の生き方が示されていません。我八十にして・・・というのが永遠に空白になってしまったのです。

いかに中国とはいえ、当時の74歳といえば超高齢でしょう。もし仮に孔子がもっと長生きであったなら、この後にどのような言葉が埋められたのでしょうか。人生80年時代の日本人にとって、気になるところです。21世紀になって13年。人生90年の時代もそう遠く

ないでしょう。これからの生涯教育の目標は、「我八十にして・・・」の・・・の言葉を探すことになりそうですね。さて、あなたなら、この後にどんな言葉をつけますか。

ちなみに、私の場合は「我八十にして深く我が生を愛し、九十にして仏恩に報謝し、百にして仏の来迎を待つ」・・・でありたいものです。

45 誓 願 (2014/1/1)

大晦日定めなき世の定めかな

井原西鶴の句です。定めなき世ではあるけれど、年の終りには仕事にも生活にも区切りをつけて、心機一転、新しい年を迎えようという庶民の智慧でしょう。

さて、一夜明ければ平成二十六年の元旦です。清少納言は「枕草子」のなかに、千年以上前の元旦をことのほか美しく描いています。

「正月一日は、まして空のけしきうらうらとめづらしく、霞こめたるに、世にある人は、姿、かたち心ことにつくろひ、君をもわが身をもいはひなどしたるさま、ことにをかし」
 なにはともあれ、明るく希望に輝く年であってほしいものです。

年の初めに「誓願」ということを考えてみましょう。今年の干支である馬には申し訳ないのですが、仏教に「意馬心猿」という言葉があります。中国浄土教の祖師の一人である曇鸞大師は「然るに凡夫の心は野馬のごとし」といわれています。煩惱や妄念がしきりに動いて心が落ち着かない様子を、狂躁する奔馬に譬えた言葉です。別の経典には「誓願なければ牛の御するなきがごとく、その赴くところを知らず」と説かれています。牛や馬のように、人間も欲望が野放しにされると、どこまで突き進んでいくか分からないから、誓いを立て願いを興し、その目的に向って心を整えていかねばならない、という教えです。

人間は本来、弱い心を持って生きています。元大リーガーの松井秀樹さんは、石川星陵高校の恩師・山下監督から卒業の時のはなむけに「おいあくま」という言葉を贈られたといいます。

おごるな いばるな あせるな
 くさるな まけるな

得意の時こそ驕らず、威張らず、失意の時は焦らず、腐らず。誰もが持っている人間としての弱い心に「負けるな」との戒めです。

そんな心を整えて、意志を強くするには、たとえどんな些細なことでもいい、実行可能な計画を立てて、それを仏さまに誓い、願いを実現しようと努力することが大切なのです。

・今年こそお経を勉強しよう。写経を始めよう。お寺にコーラスの会を作ろう。本山で得度を受け仏弟子として生きよう・・・等等。

この一年を悔いなく生きていくために、どうか新たな気持ちで誓いと願いを立てて一つでも実行してみてください。

46 星の王子さま (2014/2/1)

「星の王子さま」という童話を読んだことがありますか。サン・テグジュペリの原作を、内藤濯さんの名訳で岩波書店から出版され、多くの人に読まれた本です。童話といいながら、子どもの心を忘れてしまった大人たちに向けて書かれたものです。もし本棚にしまってあれば、もう一度出して読んでみて、そして子どもにも聞かせてやって下さい。現代に失われつつある大切なものが見えてきて、きっと心洗われる思いがするでしょう。

もう34年も前ですが、富山県出身の医者・井村和清さんは骨肉腫のため右足を切断しました。やがて肺に転移して31歳で亡くなります。その時、妻の倫子さんとの間にまだ幼い長女の飛鳥ちゃんがいる、倫子さんのお腹の中には小さな命が宿っていました。二人の子供に書き残した遺書が「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」と題して出版されました。その中に、「星の王子さま」の中の次の文章を引用しています。

「大切なものは、いつだって、目には見えない。人はとかく、目に見えるものだけで判断しようとする。目に見えているものは、いずれは消えてなくなる。いつまでも残るものは、目に見えないものなのだよ。」

そして、井村さんの遺書はその後こう続けています。

「人間は、死ねばそれですべてが無に帰するものではない。目には見えないが、私はいつまでも生きている。おまえたちと一緒に生きている。だから、私に逢いたくなる日がきたら、手を合わせなさい。そして、心で私を見つめてごらん。」そして、最後に

「さようなら、おまえたちがいつまでもしあわせでありますように。雪のふる夜に。父より」という言葉で締めくくられています。生まれてくる子の顔を見届けることなく逝く無念さと残された家族の幸せを祈るところが、ひしひしと伝わってきます。

目に見えるものよりも、目に見えないものの方こそ大切なのだと、星の王子がキツネから教えられた「秘密」は、いつの時代も、いや、物質文明の行き詰った現代だからこそ、大切な教えなのです。目に見えない大切なものとは……。

夢・希望・愛・友情・想像力・憧れ・信ずる心。そして、なによりも仏の慈悲。これらが私たちに輝かしいものを見せてくれるのです。

47 雛まつり (2014/3/01)

銀閣寺の前に白沙村荘という橋本関雪翁の別荘があります。関雪忌に招かれて記念に立ち雛の色紙絵を頂戴しました。この立ち雛の絵を見ながら、思い出したことがあります。

渡辺一枝さんは人形作家であり、エッセイストでもあります。若いころは保育士でした。その頃、最初のお雛さまを蛤の貝殻で作りました。もちろん結婚前でしたが、いつ生まれるかわからない未来の娘のために作ったのです。貝殻の内側を薄いピンクの絵の具で塗って、紙を切り抜いた小さな人形を立てました。素朴なお雛さまです。その時、一枝さんは思いました。「子どものお節句は私の手作り人形で祝ってあげよう。将来、いつか来るその日の為に、毎年お雛さまを作っていこう。」

紙コップ、石燵箱、調味料入れ、徳利、糸巻き、お手玉、石ころなど、材料はどれも身近なものばかりです。作家の椎名誠さんと結婚し、娘が生まれてからは、いつか来る日のためではなくて、現に腕に抱いている娘の為に「お雛さま」を作りました。どれもつつましく素朴なお雛さまばかりです。でも、心を込めて作ったといわれます。その小さな愛嬌あるお雛さまは、桃の節句にそそぐ早春の柔らかい日射しにも似て、とても美しく可愛いのです。

今、一枝さんは東日本大震災で被害を受けた南相馬地域に赴き、仮設住宅の女性たちに人形の作り方を指導しています。端切れで作ったフクロウのストラップや、くま・うさぎ・さる、などの動物のぬいぐるみを作って、義捐金や品物などで支援してもらった人に、お返しとして送っている、とブログで述べています。

仏教に「四無量心」という教えがあります。

慈無量心・・・縁のある人々に深い友情の心を起こす

悲無量心・・・人々の苦しみに同悲の心を起こす

喜無量心・・・人々の幸せを共に喜ぶ心を起こす

捨無量心・・・わが身の利益に執着する心を捨てる

渡辺一枝さんの行動は、まさしく四無量心の実践です。「悲しみは、二人で分けると半分になる。喜びは、二人で分けると二倍になる」という教えがあります。喜びを人に分かち与えてこそ、自分の幸せも大きくなるのです。

48 花まつり (2014/4/01)

「花まつり」という言葉には、美しくて懐かしい響きがありますね。4月8日、お釈迦さまのお誕生日を「花まつり」というのは、春の花々が咲き乱れる季節と重なるからです。また、お釈迦さまがお生まれになった所が、ルンビニの花園と伝えられているからでもあります。けれど、その日を「花まつり」と呼ぶのは、深い意味があるのです。

「雑華嚴浄（ざっけ・ごんじょう）」という仏教語があります。さまざまな花が咲き乱れて、この世を清らかに飾っていく、という意味です。それは、単に花だけのことを言っているではありません。この世のなにもかもが「花」だということです。広い空いっぱい星が輝いているように、この大地には限りないさまざまな花で満たされているのです。そのことに気づかせていただいて、それぞれみんなが自分の花を精いっぱい咲かせなければなりません。

ノートルダム清心学園理事長・渡辺和子先生の著書に、『置かれた場所で咲きなさい』というベストセラーになった本があります。今ある場所で努力し、花開く生き方をしようと呼びかけておられるのです。男は男の、女は女の、年よりは年寄りの、そして子どもは子どもの、みんなが自分の花を咲かせて、この地球上をきれいに飾っていく……。そんなことを考えるのが「花まつり」の意義であると思います。

花、といえはこの季節はなんといっても桜の花ですね。桜の季語に、初花・花・残花があります。初花は彼岸桜、その年の春、最初に咲く桜がこれです。「花」は染井吉野。豪快な咲きっぷりが見事です。「残花」は八重桜。絢爛たる装いを競うように咲きます。

春風の花を散らすと見る夢は 覚めても胸のさわぐなりけり
と西行も歌っているように、短い花のいのちに自分のいのちを重ねてみるからこそ、人間を含めた生きとし生けるものの「いのち」に、愛おしさを感じるのです。

天上天下唯我独尊。誕生の宣言である釈尊のこの言葉は、「この世界において自分はただひとり。いのちはただ一つ」という意味です。それは、他の人も同じ。

だから、自分を愛し、他の人を愛し、ただ一人・ただ一つのいのちを大切に。そして、この世に生を受けたことに感謝して、自分の花を咲かせなければならないのです。

49 ライム・ライト (2014/5/01)

BS テレビで古い名作映画を放映することがあります。最近、見たものの中に「ライム・ライト」があります。1952年にアメリカで制作され、チャールズ・チャップリン監督・主演の映画です。

テリーという若いバレエリーナが足を挫いて、踊りができなくなります。バレエリーナにとって足を挫くということは致命傷です。彼女はそれを悲しんで、ガス自殺をはかります。同じアパートに住む（チャップリンの扮する）老いた道化師カルヴェロが発見し、彼女を助けます。

「なぜ死なせてくれなかったの」と恨みごとをいうテリーに、カルヴェロはこう言って励まします。

「人生は恐れなければ、とても素晴らしいものだよ。どんなに辛くても生きるに値するんだ。人生に必要なもの。それは死と同じように避けられないもの。それは生きることだ。それには三つのことが大事なんだ。勇気と想像力と、それにいくらかのお金なんだ。」

カルヴェロの愛情と励ましで立ち直ることができたテリーの、晴れ舞台の日。老いた道化師は心臓発作に襲われ、踊子の舞台を幕の間から見ながら、息を引き取ります。テリーは彼の死を知らずに、華やかに舞っている……。そこで映画は終わります。人生の哀歓が見る者の胸を締め付けて、涙が滲んでくるような映画です。

この道化師カルヴェロの言った三つの大事なこと。

『勇気と想像力、それに少しのお金』

これにもう一つ加えるとすれば、「ロマンの心」。つまり、きれいなものを見て素直にきれいと感じる心。みずみずしい感性。昨日よりは今日、今日よりは明日、少しでも自分を高めようとする心。仏教では「菩提心」といいます。夢とロマンを失わないで、いつも何かを学びながら年を重ねていく。そうすることで肉体は衰えても、精神はみずみずしさを保つことができるのです。

「学仏大悲心」----- 仏の大悲のこころを学ぶ。と善導大師は教えられます。なによりも生きるに値する教えなのです。

50 一輪の花にも無限の愛を (2014/6/01)

姫路の北方にある広峰山の山上に、黒田官兵衛ゆかりの広峰神社があります。その参道に小さな石の碑があり、「一輪の花にも無限の愛を」と刻まれています。坂村真民さんの『二度とない人生だから』という詩の冒頭の言葉です。

「花にもこころがある」といえば、あなたは信じますか。

1966年。アメリカでこんな実験があるのです。嘘発見器（ポリグラフ）の第一人者として知られた科学者、クリーブ・バクスターが、部屋にあった観葉植物の一種ドラセナの葉に嘘発見器をつないで、その葉っぱをコーヒーカップに入れたけれど、なんの反応もない。それで、葉を焼いてやろうと思い隣の部屋にマッチを取りに行こうとしたとたん、針が劇的な変化を示したのです。焼いていないのに、人間の「悪辣な心」に反応したのですね。何度か実験をしてみると、燃やすふりをしていただけでは反応せず、「本気で燃やそうとした」時だけ反応したそうです。

また別の実験では「雪の下」という植物の葉っぱを二枚摘んで、片一方の葉には「生き続けるように」と念じて愛情を注ぎ言葉をかけ、もう一方の葉は完全に無視しました。一ヶ月後、一方はまだ生き生きしていたのに、無視した方の葉は完全に枯れたそうです。こうして実験を繰り返した結果、バクスターは「植物は人間のこころが分かる」と結論づけました。

「植物にも意識がある。人間以上の知性がある」と言っています。植物には人間の心を敏感にキャッチする、そんな不思議な「こころ」があるのですね。

この話を聞いてから、私もできるだけ我が家の花たちに声を掛けるようにしました。

「今日もきれいだよ。よく咲いてくれたね。ありがとう」

あなたもご自身の家の花たちに、こんな声を掛けてみたらいかがでしょうか。

まして、家族にこそ、ご近所の方々にこそ、縁のある人々にこそ、愛情のこもったひとことを……。花がそう言って囁いています。

「二度とない人生だから 一輪の花にも無限の愛を」

それは人への愛情にもつながっているのです。

51 沙羅双樹の花の色 (2014/7/01)

永観堂の釈迦堂の正面に向かって右には菩提樹が、左には沙羅双樹が描かれています。菩提樹は釈尊が35歳の12月8日に、この木の下で悟りを開かれ、80歳の2月8日に沙羅双樹の林の中で静かに涅槃に入られたと伝えられていて、仏教に深い縁のある樹木です。この二つの木は、初夏から梅雨の頃にかけて同じ時期に花を咲かせます。

沙羅は一日花です。降りしきる雨の中で、濡れそぼつ沙羅の白い花がポトリ、ポトリと落ちる風情に、平家物語の作者は「盛者必衰」を感じたのでしょうか。

沙羅。サンスクリット語のシャーラの音写です。仏典によれば、釈尊がクシナガラで涅槃に入られる時、林の四方に一對ずつ、計8本の沙羅の木があって、（それゆえ「沙羅双樹」と呼ばれています）その沙羅が時ならぬ花を咲かせ、対になった一方の木だけが枯れてしま

った、とあります。

日本で沙羅といっているのは、正式には夏椿の花です。シャーラに似ているので「沙羅」と呼ばれています。同じツバキ科でもサザンカは花弁がハラハラと散りますが、椿は落花という言葉がぴったりくるように、横向きか下向きにポタリポタリと落ちます。それを芭蕉は

「落ちざまに水こぼしけり花椿」

と詠みましたが、沙羅の花は何故か上向きに落ちるのです。小ぶりの白い五弁の花が、仏さまの蓮座のように上向きに着地するのは不思議ですね。仏教で聖なる木としてお寺の庭に植えられるのは、落下の風情が諸行無常を連想させるからでしょうね。四季折々にいろんな花が楽しめる日本の自然は、実に美しいと思います。

静かに散る沙羅の花には、こんな歌があります。

「いにしへも今もうつつも悲しくて 沙羅双樹の花散りにけるかも」 斎藤茂吉

「沙羅双樹しろき花散る夕風に 人の子思ふ凡下のこころ」 与謝野晶子

(凡下というのは、平凡な人間・一般庶民という意味です)

そしてもう一つ、こんな句もあります。

「しあわせは静かなるもの沙羅の花」 作者不詳

さて、沙羅の花を見て、悲しいと感じるか、子を思う親心を感じるか、それとも、静かな幸せを思うか。あなたは、いかがでしょうか。

52 お位牌ペンダント (2014/8/01)

病んで父を思ふ心や^{たま}霊まつり 正岡子規

お盆の先祖供養を「霊まつり」といいます。セミ時雨の中、水や花を手に先祖の墓参りに訪れる家族の列が続きます。帰省した人たちも加わり、子どもたちもお墓の前で静かに手を合わせる姿。いつもながらの穏やかな古里のお盆の風景です。

かつて、現代に生きる仏教の教えを受けた紀野一義先生から聞いた話を思い出しています。

ある小さな会社の社長さん。年は31か2。いつも両親の位牌を3センチくらいの大きさに縮小して、純金でこしらえて鎖で胸に下げているのです。ちゃんと戒名も刻んであります。実はこれには訳があります。その人の母親は、晩年にこっそり生命保険に加入して、息子を受取人にしました。息子は怒って、「母さん、縁起でもないよ。死なれてたまるもんか！」と解約します。でも、また掛ける、また解約する……。それでも、亡くなってみたらちゃんと掛けてあって、息子に保険金が入ってきました。結局、そのお金を全部使って純金のお位牌ペンダントを造ったのです。

「これを胸に掛けていると、両親がそばにいて守ってくれているように思えます」とその社長はしみじみ言ったそうです。

この人に弟がいます。自分は高校しか出ていないけれど、弟は大学に通わせているのです。ところが、その弟が学生運動に夢中になって、勉強もしないで駆けずり回っているのです。そこで言いました。「お前なあ、学費は毎月家に取りに來い。けれど、その前に父さんと母さんのお墓を掃除してこい。そうしたら、いつでも出してやる」。

弟は学費を出してもらわないとどうにもならないので、不請不請お墓の掃除を始めます。旦那寺の和尚が「なんとまあ、この家のお墓は綺麗にしてあるなあ！」と感心するくらい綺麗になりました。やってみれば気持ちよく、気分も晴れやかになるので、弟は本気で墓掃除をしました。その頃から弟の態度が一変しました。学生運動の仲間から自発的に身を引いて勉強を始めたのです。父を思い母を思う心が兄を助け、弟の生活を変えたのです。

この兄弟は、確かに両親の霊に守られているのです。これを「冥加」といいます。人間の目に見えないところで仏菩薩、はたまた先祖から蒙るご加護。これが「冥加」です。

両親や先祖の恩を思い、仏さまを敬うところを大切にいたしましょう。

53 彼岸花 (2014/9/01)

曼珠沙華抱くほど採れど母恋し 中村汀女

亡き母の墓地に群れて、火のように燃えて咲いている曼珠沙華の花が目目に浮かびます。別名「彼岸花」。毎年、秋の彼岸の入りの頃になると、迷わずに咲く不思議な花です。

兵庫県の多可町市原では、毎年「直接言うのは照れくさい、孝行のメッセージ」を募集しています。その入選作の一つに彼岸花にまつわる作品があります。

*「お父さん、お母さん。姉妹三人でやっとお墓を建てました。住み心地はいかがですか？十代の娘たちを残して、突然逝ったあなた達。あれから何拾年。今、私たちは幸せです。皆でお墓に曼珠沙華を植えました。秋を楽しみにね・・・」 (藤田加代子 神奈川61歳)

この方の両親がなぜ突然逝ってしまったのか理由がわかりませんが、なにか不幸な事情と残された娘さん達のその後の苦勞が感じられます。両親の墓など建てる余裕もなかったのでしょう。が、五十回忌が近づいて「一時は恨みだけけれど、あの両親が生んでくれたからこそ、今の私たちがあるんじゃないの。小さくてもいい、お墓を建てようよ」という話になり、お墓のまわりに彼岸花を植えたという光景が浮かんできます。

彼岸というのは川の向こう岸ですが、仏教では理想の世界、悟りの世界、阿弥陀仏の浄土を意味します。二十三日の中日を挟んで前後三日、計七日間、それぞれの家庭でもお寺や先祖のお墓にお参りして、亡き人を偲びます。平安時代に朝廷で始められ、江戸時代には広く普及して年中行事になりました。

秋彼岸にも忌日にも遅れしが 高浜虚子

これは親の法事を勤めようとしたが、なにかの都合で秋の彼岸にも祥月命日にも間に合わなかった、という句でしょう。亡き人の追善供養をすれば、そのご利益の七分の一は故人にもたらされて、残りの七分の六は施した人が手に入れることができる、という説があります。でも、本来供養というのは見返りを期待するものではなく、自らの生き方を振り返るためにあるのだと考えたいですね。亡き人の心を思い、その人が安心して喜んでくれるような生き方をしようと努力する。そう自分に言い聞かせて、お彼岸を自己反省の機会にできれば良い仏縁になると思います。

54 木のいのち (2014/10/01)

十月八日は「木の日」というのだそうです。十と八を組み合わせると木になるからだそうです。ご存じでしたか？

法隆寺の修復や、薬師寺金堂の再建等に腕を奮った宮大工の西岡常一さん(1908～1995)

は、農業学校を卒業しています。大工になるのだから、普通は工業学校に、と思うでしょうが、法隆寺大工の伝統技術を教えることを夢見ていた祖父の強い希望であったようです。納得できなかった常一さんは、「なんで俺がナスやカボチャを育て、コメ作りを？」と尋ねたところ、祖父はこう答えたそうです。

「人間はいつかは土に帰る。木も土に育って土に帰る。建物だって土の上に建てる。土の有難さを知らずにいたのでは、本当の人間になれない。まして立派な宮大工になれない。」西岡さんが祖父の言葉を噛みしめ味わえるようになったのは、髪の毛が大分薄くなりかけた頃でした。

「農学校の教育が血となり肉となって、千三百年間、法隆寺を支えてきた木の生命力を、しっかりと受け止めることができた」

とっています。この常一さんの祖父の信念は、時代を超えて今でも大事なことを教えてくれているように思います。

今、土を通じて学ぶものが軽く見られています。学校でも家庭でも、もっと土に触れる機会を設け、生命を育てる経験をしたほうが良いように思えるのです。結局、人間は「いつかは土に帰る」存在であることを知るのに、それは必ず役に立つことでしょう。

坂村真民さんの詩が、そのことを教えてくれています。

一本の木を見つめていると 神とか仏とかいうものがよくわかってくる
見えないところで その幹を その葉を その花を その実を作っていてくれる
根の動きは 見えないところで私たちを養ってくださる
神と等しく 仏と同じである
見えないものを 見る目をもとう
見えないものを 知るころをもとう

55 いい夫婦の日 (2014/11/01)

11月22日は「いい夫婦の日」。夫婦がいい関係にいるには、付かず離れず、がいいといわれています。ふうふう、と発音すると上下の唇がくっつくようでくっつかない。この微妙な呼吸が大切なのです。

かつて、神戸にお住まいの杉田さんという男性の手記を読んだことがあります。当時91歳の杉田さんは、平素から健脳・健眼・健脚、つまり頭がしっかりしていて、眼がまだよく

見えて、足腰も達者であることを誇りにしていたのです。が、ある日、「生まれて初めて老いの悲哀と悲劇をしたたかに知らされた」というのです。

というのは、この日の朝、この人の奥さんが「疲れたので、一日寝させてください」といって、起き上ってこない。しょうがないからパンをかじって、バナナを食べて、三宮の銀行へ貯金を出しに出かけたのです。ところが、どの銀行だかわからなくて、ウロウロするうちに迷子(迷爺?)になりそうになって、とうとう帰りの電車に乗ったけれど、今度はどの駅で降りたらいいかわからない。困ってしまって、途方にくれていたところ、隣の座席に座っておられたご婦人に助けられて、ようやく家に帰ることができたのです。

「いつもは老妻の手を握って案内してやっているつもりだったのに、この俺が連れていってやっているつもりだったのに……。実は十三歳年下の老妻に助けられて、今日まで平穩無事に暮らしてきたことがわかって、ヒヤリとした。もしも、老妻に先立たれた場合の不自由さが思われて、愕然としたよ」と述べています。

杉田さんはドイツに1年、アメリカで11年の海外生活をしていて、その経験から「日本の男性は妻に対して横暴過ぎはしないか？」と英字新聞に論評を載せたこともあるほどの達者な人でしたが、「女房にたった1日寝込まただけで、自分の無力さを知って、女房の千手観音さま的な生活能力の多様さに感服せしめられた」と慨嘆しています。

「幸福」とは、支えられていることに気付くこと。そして、それを「お蔭さま」と感じることです。「いい夫婦」も、いつか別れなくてはならない時がきます。だからこそ、共にいる時に、うんと仲良くすることですね。

56 一道を行く (2014/12/01)

かつて女優の杉村春子さんが演じた「女の一生」という舞台がありました。森本薫作の「女の一生」を文学座が初めて演じたのは、戦争の真っ最中、昭和20年のことでした。それから40数年で築いた舞台の回数が900回を超えたといえます。演じ続けた人の努力もさることながら、この芝居が大勢の人の共感を得たからでしょう。

明治・大正・昭和の三代、それも戦争をはさむ激動の時代を生きた一人の女性・布引けいという女の一生を描いています。この主人公の生涯は、戦前・戦中・戦後を生きた、ごく普通の日本女性の喜び、悲しみと重なり合って、その共感が多くの人々を「女の一生」という舞台に惹きつけたのでしょ

う。劇中、主人公の布引けいが述べるセリフがあります。

「誰が選んでくれたのでもない。自分で選んで歩き出した道ですもの。間違いと知ったら自分で間違いでないようにしなくちゃ」

私の好きな言葉です。孔子は「一以てこれを貫く」と言っています。自分の進む道は一つ。それも自分で選んだ道ならば、その道を貫く覚悟が必要です。

11月中旬に俳優の高倉健さんの逝去が伝えられました。以来、連日テレビ局が特集を組んで、健さんの人となりを報道しています。その中で私が注目したのは、健さんが生涯大切にしていたという座右の銘です。それは次のような言葉でした。

「我が行く道は精進して、忍びて終わりにて、悔いず」

実はこの言葉は「無量寿経」に説かれていて、法蔵という菩薩が仏となるために、あらゆる苦難を耐えしのぶ覚悟を述べた言葉です。（我行精進 忍終不悔）

自分が選んだ一つの道を貫くためには、さまざまな障害を乗り越える努力と、辛さに耐え抜く力が要求されます。でも、一旦選んだ道であるからには、なにがなんでも貫き通す決意が欲しいものです。その結果がどうであろうと、決して後悔しない、という經典の言葉を心の杖ことばとして大切に保ち続けた健さんは、さすが生き方も一流でした。

自分の人生に一つの道を持つのは、とても大切なことだと教えられました。

57 羊歳に想う (2015/1/01)

新しい年の初めに皆さまのご健康とご多幸をお祈りします。

年は唯黙々として行くのみぞ 高浜虚子

馬の年があわただしく駆け抜けて過ぎ去り、明けて今年はいペースでゆっくりと草を食む羊の年です。古代中国でも柔順でおとなしい羊を大切にしていたようで、「羊」という字を含んだ漢字には目出度い意味で使われることが多いのです。

道理にかなった行いを意味する「善」、正面からの立ち姿を褒めた「美」、羊を食べると書く「養」、際立った美しさを意味する「鮮」、目出度いしるしの「祥」、正しい・良いという意味の「義」など、枚挙にいとまありません。

「幸」という字は一説によると、「十一」と「羊」を組み合わせた文字だといえます。古代中国では十は満数、つまりそれ以上満ちることも欠けることもない円満を表す数なのです。

その上にもう一つあればいいなあ、という欲望が実現した時に幸せな気分になるというのです。確かに、戦後の日本人はアメリカやヨーロッパの物質文明の影響を受けて、道具や電化製品を一つでも多く持つことが便利で快適な生活をもたらすと信じてきました。やがてバブルがはじけ、「物で栄えて心で滅ぶ」という反省もあって、今また「少欲知足」が見直されているのです。

便利さや豊かさに眼を奪われ惑わされ、一つでも多くという欲望が自らの生活環境を破壊してきたことに気づかなければなりません。

「損か得か、人間のものさし。 嘘か真（まこと）か、仏さまのものさし」

相田みつをさんの言葉です。損得勘定ばかりの世の中の風潮に流されて、家族関係や大切な人間関係だけでなく、わが身自身さえ滅ぼす種をまき散らしてきた私たち。

今こそ、美しい心を養い、善い行いを実践し、本当の「幸せ」の在りかを求めて、仏様の教えを聞く素直なところが大切です。

新しい年にふさわしい善い夢を描きましょう。一つでも二つでも自分の「夢」を見つけ実現させましょう。ただし、それが「羊頭狗肉」に終わらないよう、お互い努力いたしましょう。

58 あきず/あせらず/あきらめず (2015/2/01)

～管長再任のご挨拶～

平成 22 年 2 月に総本山永観堂禅林寺の第 90 世法主・管長に推戴されて就任以来、5 年が過ぎました。短いようで長い 5 年でした。永観堂の管長の任期は 5 年なので、この 1 月末日には円満退任して網干の自坊に帰る準備をしていました。ところが、昨年 11 月に行われた「次期管長推戴委員会」で、「中西管長」の続投を望む意見が強くあり、全委員一致で再推戴されました。

この宗派は 15 年前の 88 世までは立候補制を採り、選挙で管長が選ばれていました。時代とともに自ら手を挙げて私になる、という勇氣ある人がいなくなり、「なりたい人より、なってもらいたい人を選ぶ」という推戴制となり、89 世から宗派を代表する 9 人の委員の合議によって選ばれることとなりました。こうして選ばれた前任の小木曾猯下は人格・識見ともに優れた管長さんでしたが、高齢をもつての故に 1 期 5 年で引退されました。その後任である私も、当然 5 年で引退するべきであるのに、異例の再推戴となったのです。これには一度は辞退したのですが、京都だけでなく地方の寺院住職や檀信徒の方々が強く再任を希望している、といわれれば無碍に拒否することもできず、就任を受諾しました。喩えていえば、マラソンのコース 42.195km を懸命に走り抜いて、ゴールのテープを切る寸前に、「もう一度走って下さい」と言われたような気分です。もうすぐ後期高齢者になる身には、果たして体力と気力が持続するかどうか不安がありますが、「みかえり阿弥陀」さまの「志願無倦」の慈悲の働きを仰ぎ「あきず、あせらず、あきらめず」自分のペースで公務に精進しようと思っています。

過ぎた 5 年を振り返れば、中興永観律師 900 回忌と宗祖法然上人 800 回大遠忌の導師を無事勤め、お待ち受け法要で京都のみならず、北海道・東国・山口などの地方寺院を巡錫し、念願の五重・授戒会が 13 か寺で開筵されて多くの佛弟子となられた方々と深い仏縁を結び、また、わが宗門外の方々に講演する機会も多く与えられ、その集大成として NHK の「こころの時代」に出演したことなど、充実した時間を過ごさせていただきました。

さて、2 期目に入るに際して気持ちを切り替え、新たな決意で再スタートしましょう。御本尊見返り阿弥陀如来と宗祖法然上人への報恩・感謝と懺悔と、一人でも多くの人の幸せを願う誓願立志との念仏の三本柱を大切に、共に歩いていきましょう。

59 多生の縁 (2015/3/01)

私たちの人生は「巡りあいの連続だ」といわれます。さまざまな巡りあいによって生かされているはずなのに、それに気付かないでいることがあまりにも多いようです。

良寛さんにも、そんなエピソードがあります。

岡山の玉島・円通寺で修行しているとき、同じ修行僧に「仙桂」という仲間がいました。ところが、仙桂は一言もしゃべらず、身なりも構わず、三十年も円通寺にいながらお経も読まず、座禅もしないという、風変りな僧侶でした。ただ、彼は毎日黙々と畑を耕し、野菜を

上手に作って仲間に食べさせるだけでなく、寺に来る人たちに惜しみなく施していました。

良寛さんは三十三歳で師匠から印可（悟りを得たという証明書）を得て、それから三年間の諸国行脚を終えて、故郷の越後へ帰ってきました。

ある日、庵で勤行している時に、突然、かつての仲間である仙桂の存在に気が付くのです。

「そうだ、彼こそひたすら己の分を知り、人の喜びや幸せを優先し、黙々と大地に向かって座禅していたのだ！」

当時、愚のごとく見える仙桂の真価に、はじめて気付いたのです。

「当時われこれを見て、見ず　　これに遇うて　遇わず

ああ、今これをならわんとするも得べからず　仙桂和尚は真の道者」

こんな詩を作って彼を思っています。考えてみれば、私の中にもこんな仙桂和尚が存在していたのです。出会っていたのに気がつかない・・・。

「袖振り合うも多生の縁」「つまりく石も縁のはし」という言葉があるように、仏教では縁の深さを大切なものとして説きます。「多生の縁」というのは、生まれる前から多くの生を経る間に結ばれた「縁」という意味です。この世で出逢う人とはすべて、見えぬ糸でつながっているのです。なのに、毎日の生活の中で、書物や仕事を通してさまざまな人との触れ合いがありながら、忙しさに押し流されてしまうとは、勿体ないことです。

「多生の縁」が私たちの心の栄養素となるためには、精神的な感性が重要です。

出逢いの縁を大切に、生かされて生きねばなりませんね。

60 妻は観音さま (2015/4/01)

国民文学作家と呼ばれ、宮本武蔵や新・平家物語など多くの作品を書いた吉川英治さんが亡くなって、もう 53 年になります。特に私は新平家物語を学生時代に夢中になって読みふけたもので、そのお陰で法然上人の頃の時代背景がよくわかり、宗祖の思想を学ぶ上で大変勉強になったものでした。

吉川さんは明治 25 年(1892)生まれで、11 歳の時に父親が商売に失敗して破産し、その為に小学校を中退。強く希望していた中学にも、店の小僧、印刷工、給仕、小間物の行商や沖仲仕など、さまざまな職業を経験し浮世の苦勞をなめ尽くした人です。

母親は七人の子供をかかえて随分苦勞したのに、父親は見識が高く大酒をのんでは母を苦しめるという風でした。それでも母は父に逆らわず、大事に尽くしたといわれています。

その父が大正 7 年に亡くなりますが、その時の臨終の様子が吉川さんの自叙伝『忘れ残りの記』に次のように書かれています。

-----その朝にかぎって、こんな事があった。父は茶好きで、おまけに、毎朝暗いうちに眼をさます。同時に、湯加減よく、濃い煎茶の一服が、すぐ出ないと機嫌がわるい。多年の習慣で、今朝も母が未明に起きて、勝手口のガス七輪でお湯をわかしていると、病床の方から「おい、おい」と人恋しそうに何度も呼ぶ。「はい、ただいま」と答えながらとにかく先に茶を入れて、いつものように母が枕元へ持っていくと、父は起き直って「なあ、おい。今朝ばかりは、お前の姿が観音様のように見えたよ。観音様が台所にいるかと思った・・・」

と手を合わしかけたので、「いやですよ」と母は笑いにまぎらしたが、そんなに言われたのは、夫婦となって今朝が初めてだったので、うれし涙がこぼれたと、母は言った。-----

「衆生、仏を見たてまつれば心開悟す」と善導大師はいわれています。

大酒のみで癩癩持ちの父親も、さすがに臨終には妻の苦勞に感謝し、台所でお茶を入れる妻の姿に観音様を見、心開悟したのです。「お前の姿が観音様に見えたよ」という一言で母の苦勞も報われたし、父もまた吉川さんの心に生き続けたのです。それにしてもこの一言は、最高の褒め言葉ですね。

61 おふくろさん (2015/5/01)

今年もまた「母の日」が来ました。そういえば最近、森進一さんの歌う「おふくろさん」をテレビやラジオで聴かなくなりましたね。1980年代後半に「新人類」という言葉が使われるようになり、その頃の女性が今や40代となっているのですが、「ママ」にはなれても子どもの悩みや喜びをみんな包み込んでくれる「おふくろさん」というイメージではありません。なにしろ、「おふくろの味」がなくなり、スーパーなどの「ふくろの味」ばかりの時代ですから。

私のような「おじん」と呼ばれる世代が抱く「おふくろさん」のイメージといえば、基本的には「耐える」という点にあるのです。朝早くから起きて凍てつくような寒さでも、井戸水で米をとぎ、かまどで火をおこして、ご飯をたいて味噌汁を作っていた姿を思い浮かべます。子どもの弁当を作り、学校へ送りだして、昼間は洗濯や掃除、夜は縫物などで遅くまで起きていた姿。夜なべをして手袋を編んでくれたり、あかぎれが痛かったり・・・「かあさんの歌」そのままの姿がありました。

ところが、私たち子どもはそんな母さんに必ずしも感謝をしませんでした。そんなことは当然だと思って、やれ、おかずがないの、腹が減ったの、と文句ばかり言っていたのです。

それに黙々と耐えていたのが、“おふくろさんの偉さ”だったのです。

「父母恩重経」に次のような言葉があります。

「母にあらざれば養われず。母にあらざれば育てられず。おのれ生きている間は、子の身に代わらんことを思い、己れ死に去りて後は、子の身を護らんことを願う。かくの如き恩徳、いかにして報すべき」

子どもが悩み苦しんでいるときは、代わってやりたいと思い、母が死んで後も子の身を案じ護り続けてくれている、と釈尊は説かれているのです。この年になると、ただただ母の苦勞に感謝の思いが募るばかりです。

「十億の人に十億の母あれど わが母にまさる母あらめやも」 暁烏 敏

一人ひとりが自分の母親という存在そのものに真剣に思いを馳せることができたなら、きっと世の中はもっと素晴らしいものになるに違いない、と思うのです。

62 紫陽花の雨 (2015/06/01)

雨の季節になりました。古川柳に「同じ字を雨雨雨と雨て読み」というのがあります。さてなんと読むのでしょうか。正解は「同じ字をアメ・サメ・ダレとグレて読み」と読みます。

最初のアメは普通の雨。サメは「春雨」のサメ。ダレは「五月雨」のダレ。グレは「時雨」のグレ、という訳です。

この季節になると『紫陽花の雨』という歌を思い出します。

「紫陽花に降る雨よ。薄紫の私の想いを濡らし、過ぎた昨日の雨。雨の中で想いに堪えて色を増す紫陽花の花よ」

咲き始めの頃は薄い緑色を帯びていて、やがて青に染まり次第に紫がにじみ出て、淡い紅に変わるので「七変化」とも言われます。太宰治の桜桃忌もこの時季（6月19日）ですが、代表作の『斜陽』に次のような文があります。

「霧の庭に、アジサイに似た赤い大きな花が燃えるように咲いていた。子供の頃、お蒲団の模様に、真っ赤なアジサイの花が散らされてあるのを見て、へんに悲しかったが、やっぱり赤いアジサイの花って本当にあるものだった」

没落していく四人の家族の滅びを暗示しているかのような花です。

紫陽花は日本に生まれて育った花です。幕末の頃、オランダからやってきて長崎に居た医者シーボルトは、空色鮮やかな花が特に大好きでその一種に「おたくさ」と名付けました。

日本にいた頃の恋人の「お滝さん」をはるかに偲んでの命名だったといわれています。この花には、何故か遠く離れた懐かしい女性を連想させる力があるようです。彩りを次々に変えて装うところや、或いは又、地味の決して良くない土地にもよく堪えて、あでやかに咲き誇る生命力に、女性の姿を連想させるのでしょうか。

「飛ぶ蛍ひかり見え行く夕暮れになほ色のこる庭のあぢさゐ」

鎌倉時代の歌人・藤原家良の歌です。飛び交う蛍の光がはっきり見えてくる夕暮れに、なお紫陽花の色が消え残っているという歌で、蛍とあじさいの花が対照的に浮かび上がってきます。同じ時代に念仏信仰を広められた法然上人も、きっとこのような光景をご覧になったことでしょう。ともすると暗くなりがちな雨の季節に、せめて紫陽花の花のように笑顔で周りを明るくしたいものです。

63 慈眼施 (2015/07/01)

宮澤賢治が岩手県花巻の農学校の先生をしていたころ、盗み癖が村中に知れ渡っている子どもと、畑でばったり顔を合わせました。〈またなにか盗んでいる〉と気付きましたが、先生は怒鳴ることをしないで、その子の眼をじーっと見つめました。無言の対決！

やがて、その子は盗んだものを置いて、ピョンと礼をして走りさっていきました。そして、それ以来、二度と盗みをしなくなったといえます。

親も手をやき、肩身を狭くしていた悪い癖。「あの子は悪い子や。あの子と付き合ったらいかん。あの子は非行少年や」。たしかに、そう言われても仕方のない少年だったのでしょ

うが、周囲からそんな目で見られ、余計に盗み癖に走らせたのでしょう。その「いけないこと」を宮澤先生は眼で諭したのです。詩人・宮澤賢治の顔は穏やかで、眼も澄んでいたのに違いありません。怒った顔で、きつい眼で睨みつけていたら、さらに反抗心をあおったはずです。

こどもの心をよく理解していなければ出来ないことで、『銀河鉄道の夜』や『風の又三郎』などの名作童話を書いた宮澤賢治の優しさが、よく伝わってくるエピソードです。

人の心は顔に現れるといいます。ことに「眼は口ほどにものをいい」といいますから、口の代訳をする眼は正直なのです。

釈尊の教えの中に「無財の七施」というのがあって、財産がなくても人に与えることができる七つの事柄の中に、『慈眼施』（じげんせ）というのがあります。慈しみのこもった、相手を思いやる優しい眼差し、という意味です。

『観音経』の中に「慈眼をもって衆生を視そなわし給う」という言葉がありますが、実は永観堂の御本尊である「みかえり阿弥陀佛」こそ、慈眼視そのものなのです。立ち止り、振り返られた眼差しは、慈しみにあふれています。遅れてくるもの、立ちあがることもできぬほど生きることに疲れ果てたもの、前に回って正面から拝むことさえできぬもの……。

そういう弱いものを見捨てることなく、永遠に見返り、慈悲の眼差しで見つめ続けておられるのです。心が疲れたとき、是非一度お参りください。そして私たちも、人に向かっては温かい眼差しで接することのできる人でありたいものです。

64 4人の妻 (2015/8/01)

お盆がきました。お盆は正しくは「盂蘭盆会^{うらぼん}」といいます。インドの言葉「ウランバーナ」から来ているのですが、本来「手足を縛って逆さまに吊るす」という意味があります。これは非常な苦しみを伴うもので、その苦しみから救われるのが「お盆」であるといわれているのです。

釈尊の説かれたお経の中に、こんな話があります。

昔、インドに大金持ちがいました。大金持ちですから、妻も4人おりました。ところが、年をとって、一人であの世に行くことが不安になってきました。そこで彼は考えました。

「4人の妻たちには贅沢に金や食べ物や、着るものを惜しみなく与えてきた。私があつた世へ一緒に行ってくれと頼めば、よもや誰もイヤとは言まい」

ある日、第1夫人に「私の命も長くはあるまい。一緒にあの世へ行ってくれないか」と頼んだところ、彼女は冷やかに言うのです。

「私はあなたの命のある限り一緒にお側にいますが、あの世まで付き従うことはできません」

そこで仕方なく第2夫人に頼んだけど、返事は同じくあの世と一緒に行くことを拒否します。第3夫人にいたっては「あの世までは無理だけど、せめて墓の中までならお伴しましょう」というのです。

大金持ちはがっかりして、最後の望みを第4夫人に託して頼んでみると、なんと彼女は「喜んでどこまでもついてまいります」と言ってくれたのです。

さて、この話、実は第1夫人というのは、自分の肉体のことであり、第2夫人は自分の地位や名誉・財産のこと。第3夫人というのは女房や子供のことです。肉体や金・地位・名誉などは、命ある限りのものです。あの世へは持っていきません。あるいは女房・子供もいずれ墓までは入ってくれるでしょうが、あの世へ一緒に、という訳にはいきません。

どこまでも付いて行くという第4夫人こそ、私たちがこの世で行なった行為のことで、それを「業」と呼んでいます。好い行為をすれば善い世界へ生まれることができるというのです。手足を逆さまに吊るされる苦しみから逃れるためにも、普段の行ないを反省して先祖の前で敬虔な祈りを捧げる。それがお盆です。

65 輝く「朗人」であれ (2015/9/01)

今年の敬老の日は9月21日です。この敬老の日の発祥の地は兵庫県です。終戦後間もない1947年。これからの日本は若い力に委ねるべきだという高齢者に推薦されて、当時40代の門脇政夫さんが八千代町の町長に選ばれ、町議会に諮って「としよりの日」を制定。やがて、県会議員になった門脇さんの発議で兵庫県で始めて「老人の日」が制定されたのですが、「名前が良くない」と反対したのが他ならぬ老人達でした。そこで「敬老の日」と改められ、やがて1966年に国民の祝日になりました。

精神科医の斎藤茂太さんが、いくつになっても若さを失わない秘訣として「イ・カ・ニ・マ・ス」を提唱しています。

- ① イ---異性に関心を持つこと。まずこれが第一ですね。
- ② カ---カラオケ。声を出して歌うと心のわだかまりが消えて気持ちが晴れます。
- ③ ニ---日記をつける。簡単でいい、毎日メモ程度にちょっと手帳に書くだけでいい。
- ④ マ---街着。タウンウエア。出かける時、ちょっと流行にも気を配って、ネクタイの色を自分で選ぶ。老人が「年寄り臭く」なってはいけませんね。いつまでもおしゃれ心を失わないこと。むしろ年をとってからこそ身ぎれいにしなければならない。
- ⑤ ス---スポーツ。柔軟体操でもいい。家の周りを少し散歩するだけでもいい。要は体を動かすことです。

この五つに加えて、大事なのはテレビよりも活字に親しむこと。つまり、本や新聞をよく読むのも積極的な頭の体操になります。その上、いろんな集まりにはできるだけ出席して、人に会って新しい情報に接することが心を若返らせると言われています。

では、釈尊は「老い」についてどのように考えておられるでしょうか。法句経に、

「^{こうべ}頭白しといえど ^{おさ}このことによりてのみ 彼は長老たらず。

彼の^{よわい}年齢よし熟したりとも これ空しく老いたる人とのみ 呼ばれん」

と説かれています。つまり、いかに長生きしても髪が真っ白になっても、ただブラブラと毎日を過ごしているなら、それは空しく老いたる人に過ぎないのだ。たとえ身体は老いて不自由でも、病んでいても、豊かな心を備えているなら、空しくない輝く老人と呼ばれるであろう、との教えなのです。

輝く老人、いや「輝く朗人」であれ。

66 こころの触れ合い (2015/10/01)

10月には「体育の日」があり、各地の学校では運動会・体育大会が開かれます。走ることに苦手であった私も、運動会は楽しみな行事の一つでした。

以前、ある小学校の校長先生から、こんな話を聞いたことがあります。

「うちの学校の運動会で、二人一組になってお互いにおんぶし合いながらゴールインするという競技をしたところ、おんぶされるのが嫌いな子供が何人かいました。手をつっぱって、おんぶを拒否するのです。」

おんぶ、というのは人間の基本的な動作の一つです。それを拒否するというのは、どういうことでしょうか。おんぶというのは、人が人を背負うことです。親が子を背負い、姉が妹を背負い、老いた親を子が背負うこともあります。私にも、幼い頃に母の背におんぶさって、温かみと安心感を覚えた感覚が潜在記憶として刻まれています。

母親が帯で子供を背負う姿は、昔は普通に見かけました。子供は背負われて育ったのです。もっとも安全で楽な母と子の移動の方法でした。冬の寒い頃には「ねんねこ」という防寒用の「どてら」のようなものを羽織っていました。

「ねんねこの中の寝息を覗かるる」（稲畑汀子）という俳句もありますが、最近、これをほとんど見かけることはありません。

赤ん坊はベビーカーや自動車のベビーシートにいます。器具を使って背中合わせに背負っている親もあります。これは、おんぶでなくて子供を運搬しているのですね。

かつて、おんぶは子育ての原点でした。スキンシップの原点でした。子供は母親の背で、スヤスヤと眠りました。山口百恵さんが歌っていた『いい日旅立ち』の中にも「母の背中で聞いた歌を道連れに」という歌詞があります。お互いのぬくもりのなかで、母と子の絆が作られていったのです。

おんぶできない子は、おんぶされた経験がなくて接触を嫌うといわれます。そんな子が現実にいるんですね。そして、親もまた子供と触れ合いたくなくて、距離を置いて育てているらしいのです。スキンシップがなければ、心の触れ合いも少なくなります。絆も生まれません。思いやりに欠ける人間になりはしないでしょうか。

触れ合い・・・これも大事な「愛」なのです。

67 ^{いちじつ}な一日作さざれば^{いちじつ}一日食らわず (2015/11/01)

11月23日は勤労感謝の日。「勤労を尊び、生産を祝い、国民が互いに感謝しあう日」と定義されています。この日は、もともと「新嘗祭（にいなめさい）」と呼ばれて、その年の穀物の収穫を天地の神に供えて、天皇自らも食する儀式が行われていたのです。それを「勤労感謝の日」と改めたのは、アメリカの感謝祭（Thanksgiving Day）に倣ったものです。

「学究の徒として勤労感謝の日」（三村純也）という句があります。作者は大学の教授として、研究者であっても労働者や生産者ではないことに多少の引け目を感じながら「勤労」に感謝している、という心が感じられます。

人間、生きるためには働かなければいけませんし、学ばなければなりません。けれど、それを義務だと思うと辛くなりますね。楽しく学ぶのが望ましいのですが、それにはどうすればいいのでしょうか。

昔、中国に百丈という禅師がいました。八十歳になっても鋤や鍬を持って働かれるので、弟子達が「体に障りますから」と止めますけれど、なかなかやめません。そこで弟子たちは道具を隠してしまいました。百丈禅師は仕方なく部屋に引きこもりますが、以来、食事をしなくなりました。弟子達が心配して尋ねますと、「一日なさざれば、一日食らわず」と答えました。「一日生きたら、そのお礼に一日勤めをしなければならぬ。それが出来なかったから、食事はいただけないのだ」と、箸を取らなかつたのです。弟子たちは始めて気がついて、隠した道具を取り出してお詫びを申し上げて、やっと許されたという話があります。

これは「働かざる者は食うべからず」という考え方とは全く異なります。仏教では「作務」（さむ）といって、生かされていることに感謝して仏の作業をすることをいいます。日常の働く生活が、感謝の報恩行であり、仏道修業なのです。「働く」とは「傍（はた）の者を楽にする」という意味もあるのです。

電車の中で辞書を引きながら原書を読んでいる一人の老人がいました。それを見た女子高校生が驚いて「おじいさん、偉いね」というと、「命のある間に勉強しなくてはね」という答えが返ってきました。

生活や試験のためにだけ働いたり勉強したりするのではなく、「命をいただいているお礼に」と思って勤めれば、きっと楽しくやっていける筈です。

68 篝火（かがりびばな）(2015/12/01)

年末から新年を迎える花、シクラメンが色どり豊かに咲きそろっています。軽くねじれて蝶の群れ舞うような花の形もいいし、葉がハートの形をしているのもいいです。花の色も布施明さんの歌のように「真綿色」や「薄紅色」や「薄紫」など、しなやかな茎に支えられて咲き揃う姿は、まるで舞台のバレリーナーを思わせませう。

可憐な姿に似あわず英語では「Sowbread」（豚のパン・豚の饅頭）と呼ばれていました。名の由来は、球根が豚たちの大好きな餌だったという理由で、明治の初めに日本に入った頃も「豚の饅頭」と呼ばれていました。（シクラメンはラテン語）

植物分類学の牧野富太郎博士が東京の新宿御苑に勤めていた時、ある年の正月に二、三人連れの貴婦人が温室を訪れました。折から「豚の饅頭」、つまりシクラメンが咲き誇っているのを眺めて、その内のお一人が「名前に似ず美しい花ね。まるで篝火（かがりび）が燃えているようね」と言われたのです。案内役の牧野博士は、その素朴な批評を大変興味深く感じて、シクラメンの日本名を「かがり火花」と名付けました。

その時の貴婦人は九条武子夫人だったのです。西本願寺の大谷家に生まれ、九条良致氏と結婚。恵まれない子供や人々のための孤児院・診療所など社会救済事業のかたわら、和歌を佐々木信綱師に学び「無憂華」という歌集を遺しています。

その中に次の一首があります。

*第一の歩みをそこに踏みしめて 道開き行く人に幸あれ

この歌を口ずさむとき、法然上人のご一生を思わずにおれません。上人は阿弥陀仏の本願によって、すべての人々が平等に救われていく他力念仏の教えを、数々の弾圧に会いながらも生涯かけて教え広められた方です。凡夫往生の道を開き、念仏の一道を歩まれた方です。

二度とない人生。自分にしかない人生。であるからこそ、法然上人の教えに従い、念仏とともに確実に、大らかに歩み続けて参りましょう。

69 新年を迎えて (2016/1/01)

謹んで至心に三宝に帰依し併せて新しい年の平安を祈念いたします。

梓弓春立つけさの心もて 年の一とせ過ぐしてしかな

江戸後期の国学者で歌人の賀茂季鷹（かものすえたか）が、新春を迎えて詠んだ歌です。「今朝の清々しい心でこの一年を過ごしたいものだ。梓弓に張った弦が、年の末までたゆみませんように」という歌の意味の中に、美しく凜とした空気が漂います。

新しい年を迎えると、思い浮かべる漢詩があります。

「まことに日に新たに 日々に新たに また日に新たに」

古代中国の王が洗面器にこの句を刻みつけ、毎朝、顔を洗うたびに決意を新たにしたり、と伝えられています。

仏教においては「日々是好日」といいます。一年の始まりは元日。一日の始まりは朝。年において、日において切れ目を立てることは、なによりの道です。新年はこころを洗う切れ目として目標を立て、朝な朝なには仏前に合掌十念して四恩の「おかげさま」に感謝し、「恩を知り、恩に報いる」生活をしていきたいものです。

そのために「まゆみの法則」という教えがあります。

「待つ・許す・認める」というこころの法則です。これこそ永観堂のご本尊「みかえり阿弥陀仏」の慈悲の働きを表しています。

私の口から仏のみ名である「南無阿弥陀仏」が唱えられるのを待つこころ。

私の心の醜さを許すこころ。そして私の命の存在を認めて下さるこころ。

このお慈悲の働きに気づき、生活の中に「おかげさま」のこころを育て、私たちも又「まゆみの法則」で家族や人々に接し、今日一日を精いっぱい生かされて生きていきましょう。

合掌十念

70 信の意義 (2016/2/01)

「己にしかざる者を友とするなかれ」。これは孔子の言葉です。「自分にそぐわない者、人間的に信頼することが出来ない者は、友だちとするな」という意味です。良き友となるかどうか、または良き夫婦・恋人であるかどうかは、お互いに相手の言葉を信じることができるかどうか、に掛っているようです。

辞書によれば「信」という字は「人」と「言」の組み合わせでできた会意文字であり、も

とも神に誓いを立てた上で、人との間に約束したことを「信」という、とあります。（白川静・『常用字解』） 人の言葉がその時の心と一致する、というのが本来の意味であり、「まこと」の意を表しているのです。仏教をはじめ、あらゆる宗教は「信」を絶対条件として成り立っています。その一例として、浄土真宗の開山・親鸞聖人の教えを弟子の唯円坊がまとめた『歎異抄』のなかの有名な会話があります。唯円が日頃の疑問を率直に尋ねます。

「とても素晴らしい所だと、師匠が語られるお浄土へ行くことができるというのに、なぜか一向に心が躍らないのですが」

それに対して親鸞聖人が極めて素直に答えます。

「唯円よ、お前もか。実は私もそうなのだ」

驚いた唯円は、不安を感じて更に問います。

「一体、本当にお浄土というものはあるのでしょうか」

この後の聖人の言葉がすごいのです。

「あるのか、ないのか。そんな難しいことは私にはわからない。ただ、あの偉大な法然さまが『絶対にある』とおっしゃるのだから、間違いなくあるのだ。もし万一、法然さまを信じて念仏を唱えたために地獄に落ちたとしても、私は少しも後悔しないよ」

この師匠の法然上人に対する絶対的な信頼こそが、他力本願の念仏の真髄なのです。人間が口から出す言葉というものは、信ずるものであり、信じられるものでなければならないし、言葉を通して、相手の人格に対して尊敬と信頼とが抱けるかどうか、が大事なのです。

「信とは、『まけて・まかせて・まいて・まつ』という心だ」。かつて師と仰ぐ紀野一義先生から教えられた言葉です。

71 お水取り (2016/3/01)

「お水取りが始まると春が来る」と関西では言い慣わしています。東大寺二月堂のお水取りが始まりました。15日明け方まで続く厳しい修行は、正しくは「十一面観音悔過(けか)」といい「修二会」とも言われています。絶対秘仏である本尊十一面観音に罪や汚れを懺悔して、除罪招福と国の平和を祈る法要です。そのお坊さん達を『練行衆(れんぎょうしゅう)』と呼んでいます。「籠りの僧」とも呼ばれる練行衆は、観世音菩薩の名を呼びながら、体を二月堂の内陣の床に打ちつけるような激しい礼拝を行ないます。奈良時代の天平勝宝四年(752)、實忠和尚によって始められ、以後途絶えることなく今日まで連綿と続けられているのです。

天平勝宝四年といえば、聖武天皇によって建立された大仏(盧舎那仏)の開眼法要が盛大に営まれた年であり、華やかな天平文化が豪華絢爛に咲き誇った年でもあります。

けれども、その一方で奈良時代を通じて吹き荒れた血なまぐさい政治の権力争いや、或いは疫病の流行や飢饉などで多くの民が命を奪われ、そうした社会不安の中で「お水取り」の行事が生まれた、ということも忘れてはならないのです。

いつの時代も絶えることのない人間の業。親子の争いから国と国の戦争にいたるまで、愚かな人間の業によって引き起こされています。1264年続いている「お水取り」の行の伝統

は、そういう深い人間の業の自己反省から生まれているのです。寒さに耐え、身を苛めぬく錬行衆の懺悔の行は、この私達に代わって行なわれているのです。この私の人間としての数知れぬ罪業の反省なのです。

私たちはいつも偉そうな顔をして、この世を送っていますが、一枚皮をめくってみると、醜い自分の本性が顔をのぞかせます。人の幸せを喜ぶどころか妬んだり、羨んだり、名誉欲や財産欲に捉われたり、つい愚痴や悪口をいったり、眼や口や心から作りだす様々な罪、汚れを除く行を錬行衆におまかせするだけでなく、そんな自分をしっかり見据えて、仏さまの前に洗いざらい曝け出して、心から許しを乞う。それは決して難しいことではなく、「南無阿弥陀仏」とお念仏申すだけでいいのだ、と法然上人は説いておられます。

仏さまは、いつでも、どこでも、私達をその温かい眼差しでじっと見守っていてくださるのです。

72 心ひろびろと爽やかに (2016/4/01)

「五快健康法」というのを実行している人がいます。それは快食・快眠・快談・快便・快笑。この五つを実行すれば、健康になれるというのです。

それは、快い食事、快い眠り、愉快的話し合い、さわやかな便通、そして明るい笑い声。特に最後の「快笑」をお勧めします。一日一回、声を出して明るく笑うこと。これが大事なのです。少ししか可笑しくなくても、努めて大声で笑う。そうすれば家庭の中に年中春風が吹いて、やがて長生きの家風が生まれてくる、と言われていました。「咲く」という字は「わらう」とも読みます。花が咲いているのは、花が笑っているのだと古人は感じたのです。

確かに笑うことは大事だと、誰もが知っているのですが、どうも最近は声をあげて笑うほどのことが少なくなってきたようで、淋しいですね。

私の師父・中西玄道は77歳でお浄土に還って36年になりますが、いつも豪快に笑う人でした。今でも時々、「大覚寺の先代さんは、大きな声で笑う明るい人でしたね」と檀家の人から言われることがあります。笑い声がいつまでも人の記憶に残る、というのも大したものだと思います。それほど可笑しくなくても、心を明るく持って、あるがままに、感謝の気持ちで受け入れることは、実は大切なことなのだと言父は教えてくれたのです。

とはいうものの、毎日を笑顔だけで暮らすというのは難しいことです。実際に涙を流すことがなくても、泣きたくなるほど辛いことも多いのです。でも、そんなときにこそ無理にでも笑ってみるのです。すると、泣きたい思いは少し和らぎます。あるデパートでは、開店前にすべての店員が鏡に向かって最高の笑顔をつかべ、それからお客を迎えると聞いたことがあります。笑顔は心の栄養剤なのです。

禅宗の祖である達磨大師は、百五十歳まで長生きされたそうです。その達磨大師の長生きの秘訣は三つ。「緩・浄・善」。

「緩」というのは、ゆっくりあわてないで、いらいらしないで、悠々と生きること。

「浄」というのは、心に捉われるものがなく、いつも清らかで、爽やかに生きること。

「善」というのは、すべてのものを、あるがままに受け入れて、善意にとらえること。

なにごともひねくれないで、あるがままに、感謝の気持ちで受け入れて爽やかな笑顔で暮らす。そうありがたいものですね。

73 良寛さんの見舞状 (2016/5/01)

東日本大震災の5周年にあたる3月11日、物故者の追悼法要を勤めました。その1カ月後に熊本で地震が発生するとは思ひもありませんでした。天災は忘れぬ先にもやってくるのです。この原稿を書いている現在、本震・余震合わせると1000回を越え、地震による死者は49人。関連死の疑い14人、家屋の倒壊は1万棟。避難者は4万人を越えています。尊い命を亡くされた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された人々が1日も早く平常の生活に戻ることができますことを心より念じます。

* * *

良寛さんが71歳の文政11年(1828)、越後の三条を襲った地震は近世のこの地における最大のものでした。全壊13000余軒、死者1600名という大惨事でした。その時、良寛さんが知人に送った見舞い状があり、そこに次の歌が添えられていました。

「うちつけに死なば死なすて永らえて かかる憂き目を見るが侘しき」

(突然の災難に遇って死ねばよかったのに、死ぬこともなく生き永らえて、こんなつらい目を見るのは侘しいことだなあ。) この歌の後に、次の文が続きます。

「しかし災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」

これだけを読めば「良寛という人は、なんと冷たい人か」と思う人もあるでしょう。現実に被災している人を前にして云う言葉ではありません。この言葉は71歳という老齢の自分自身への覚悟を述べているのです。

「災難に逢えば、自然のことだから仕方なくうろたえないで逢い、死ぬ時が来たら安んじて死ねばいい。そういう覚悟を持って生きていけばいいのだ」

いかにも「任運」(運にまかせて、ゆったり生きる)を処世訓とした良寛さんらしい、達観した言葉です。それでも災難に逢って命を亡くしたり、被災した人たちの惨状を見ると、涙がとめどなくあふれる良寛さんだったのです。

* * *

まだ余震が断続的に続く熊本に宗門の青年僧や宗務所の職員が派遣され、支援活動を始めています。ささやかでも各自が自分で出来ることを、長く継続していかねばなりません。

毎朝の勤行の折には、物故者の冥福を本尊「みかえり阿弥陀仏」に祈念しています。

74 幸福を育てる三つの田 (2016/6/01)

青梅の落ちみて遊ぶ精舎の地 飯田蛇笏

梅雨と書いて「つゆ」と読むのは、梅の実の熟するころに降る雨だからといわれています。以前は6月に集中的に田植えをしたのも、日本の自然の理に叶っているのです。

ところで、「幸福を育てる三つの田」という教えが仏教にあり、「三福田」と呼ばれています。その一つは「敬田（きょうでん）」。「敬いの心を育てよう、という教えです。何を敬うのかといえば、聖徳太子が十七条憲法で「篤く三宝を敬え」と述べられたように、仏（仏さま）・法（仏の教え）・僧（教えを信じる人々の集団）を敬う心をいいます。

第二は「恩田（おんでん）」。「父母の恩を始めとして、お世話になった人々のご恩を忘れないことです。

三番目は「悲田（ひでん）」。「これには二種類あって、貧しい人々にお金や物を提供する布施と、今困っている人々に救いの手を差し伸べる行為のことです。例えば、熊本の被災地に赴いて家や道路の復旧に力を貸すボランティアや、募金活動に協力することも「身施」という布施であり、被災者の方々が一日も早く平常の生活を取り戻されるのを祈ることも、「心施」という悲田となります。

平安時代、この禅林寺の第7世・永観律師は、「みかえりの阿弥陀仏」を自ら宗教体験として感得された方ですが、同時に困っている人を救いたいという思いの強い人でもありました。例えば、境内に多くの梅の木を植えて、実がなると拾い集め、すべて貧しい人々や病人に分け与えたり、薬草を植えて病む人に無料で差し上げたりしました。また、罪を犯した人の牢獄に赴いて懺悔の念仏を共に唱えたり、境内に浴室を設けて貧しい人や病人に施浴したりしました。中でも、梅の実を惜しげもなく分け与えたことは、多くの人に感謝され、世に「悲田梅（ひでんばい）」と呼ばれて、その子孫の木が今も境内に残っていて青い実を実らせているのです。この永観さんの悲田の行為が京の人々に知られて、禅林寺という本当の寺名がいつのまにか「永観さんの寺」「永観堂」と呼ばれるようになったのです。

この永観さんの業績を讃えて、禅林寺のご詠歌を作りました。

第1番 禅（しず）かなる林の寺の御仏は おん眼やさしく見返りたもう

第2番 春若葉 夏は青葉に秋紅葉 白梅薫る永観の寺

75 水に学ぶ (2016/7/01)

7月に入って、梅雨も後半になりました。九州に降る雨は、各地に多くの被害をもたらしたようです。梅雨の終わりに強雨に見舞われることはよくある、と気象予報士さんがいっていましたが、生活をおびやかすゲリラ豪雨は願い下げにしたいですね。

先日、梅雨の雨あがりに宇治の三室戸寺へお参りしました。というよりも、アジサイを見に行ったというのが正直なところ。赤や紫、青の色とりどりの紫陽花が雨に濡れてしっとりと咲いていて、実に美しい光景でした。中に一輪、ハート型に咲いたピンクの花がありました。なにかいいことがあるのでしょうか。

五月の雨と書いて「五月雨」（さみだれ）といいますが、これは陰暦の頃の言葉であって、陽暦の今は俳句では6月から7月にかけての夏の季語です。この五月雨と大河を詠んだ有名な句が二つあります。

一つは「五月雨をあつめて早し最上川」。芭蕉の「奥の細道」の中でも名句といわれています。梅雨の雨が最上川に集まって猛烈な勢いで流れている、という句です。もう一つは、

「五月雨や大河を前に家二軒」。与謝蕪村の句です。決壊するかもしれない大河を前に、二軒の小さな家が並んでいる情景が目には浮かびます。芭蕉の句が、船に乗って大河と一体になっているのに対して、蕪村の句は画家の目で絵のように詠んでいます。動と静の対照的な句ですね。

ところで、古来仏教に「水に学ぶ教え」が伝えられています。

- 水は生きとし生けるものに命を与え育む。
- 水はあくまでも深く、あくまでも強く、その尽きることを知らない。
- 水は仏の心のように穏やかであり、自由であり、平かである。
- 水は情熱であり、初々しい。 • 水は方円の器に従うが、自らの本質を変えない。
- 水はある時は岩をも砕き、大きな山をも動かす。
- 水は青春であり、情熱である。 • 水は世界を結ぶ絆である。

私たちはこの水の教えを自分の心として生活すれば、どんなにか明るく自由に生きられることでしょうね。

76 平和の祈りを (2016/8/01)

境内に赤い夾竹桃の花が咲いています。玄関の前には百日紅（さるすべり）の赤い花も夏の到来を告げています。8月は鎮魂の夏です。

昭和20年8月6日、午前8時15分。広島の上空で原爆が炸裂した直後の様子を、当時小学4年生の男子が詩に表しています。

「ピカッ！と光った/ パツとうつぶす/ おそろおそろ目をあけると/ あたりはまっくらだ
外にとびだすと/ 見るかぎり家は一軒もない/ 人も馬も、木も草も、電車も自動車も
みんな燃えている」

この詩は、原爆詩人で知られた峠三吉さんの自宅の押し入れの中から見つけられました。別の小学生は、こう書いています。

「ピカッ！ ドーン！ それは大きな音でした。家はつぶれて、電信柱もおれます。

大きな家もおれます。お婆さんは死にました。お母さんも死にました。町の人も死にました。お父さんも死にました。みんなみんな死にました。おじいさんも死んでしまいました。ぜんぶ死んでしまいました」

二作とも、原爆投下から七年後の作品だそうですから、ピカッ！ときた時は3歳前後の幼さだったのですね。わら半紙や広告の裏に鉛筆で幼い字を走らせています。そこから聞こえる叫びは、生々しく胸を打ちます。あれから71年。ともすれば原爆体験が薄れかけている折、「忘れられてたまるか！」と訴えかけられているように思えてなりません。

終戦後70年の昨年。私は7月に長崎を、9月に広島を訪れました。長崎では平和祈念像に詣で、広島では原爆死没者慰霊碑の前で読経し、犠牲者の冥福を祈りました。慰霊碑に刻まれた「安らかに眠り下さい 過ちは繰返ませぬから」の文が、今、広く人類全体の誓いとして強く訴えねばならぬ、と思いました。

今や戦後生まれの、いわゆる「戦争を知らない子供たち」が日本の人口の7割を越えたと

いいです。戦争体験を持つ人が少なくなり、高齢化しているのです。戦争の記憶や原爆の悲惨さの記憶が、年々薄くなっているのです。だから、語り継がねばなりません。何年たとうが、戦争の悲劇を忘れず、平和の尊さを大切にしなければならないのです。

じしんそうこう

77 慈心相向 (2016/9/01)

柿食へば鐘がなるなり法隆寺

この俳句で知られた俳人で歌人でもあった正岡子規は、肺結核に冒されさらに脊髄カリエスという厄介な病魔に痛めつけられて、明治35年、柿の実が赤く色づく9月19日、満34歳の若さで亡くなりました。彼は病人の看護について、次のように書いています。

「病人の苦しみや楽しみに関係する問題は、家庭の問題である。介抱の問題である。

病気が苦しくなった時、人は衰弱のために心細くなった時は、看護のやり方一つで病人の苦しみや楽しみに大きな関係を及ぼすのである」と。

この正岡子規の訴える病人の立場を、病弱な年寄りと置き換えて読むと、老人の介護にもそのまま通じるように思います。要するに子規が言いたいのは、相手の立場に立って何が必要か、想像力を働かせることの大切さだと思うのです。

今、日本人の平均寿命は延びました。今年の7月に厚生労働省が発表した2015年の平均寿命は、男性80.79歳。女性は87.05歳。女性は3年連続で世界一、男性は香港・アイスランドに続いて第3位という長寿社会です。ただ、健康で全うできれば何よりですが、なかなかそうはいきません。病気などで日常生活が制限されない「健康寿命」は、女性74.21歳、男性71.19歳だそうです。

子規が言うには、「心細い時、巧みに慰めの言葉をもらうと、それだけで苦しみが薄らぐ。介抱の仕方が多少まずくても、同情心さえあれば腹は立たない」と。

そんな事を考えると、長寿社会に求められる大事な一つの要素は、人が相手の身になるという、思いやりの心でしょう。老いに優しい社会とは、みんなが飾らない、心のこもった言葉を掛け合うことだと思います。

仏教に「慈心相向・仏眼相看」(じしんそうこう・ぶつげんそうかん)という教えがあります。「慈しみの心もって相向かい、仏の眼差しをもって相看る」と読みます。今の長寿社会に最も必要な教えです。

78 歳月は川の流れの如く (2016/10/01)

朝晩の冷気が少しずつ、秋の到来を告げています。永観堂の楓も少しずつ色づいています。カレンダーもあと3枚になりました。月日の流れの早さを実感します。

「行く川の流ればたえずして、しかも、もとの水にあらず。澱みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく留まりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、又かくの如し」鴨長明が綴った『方丈記』を思い出します。

こんな場面を想像して下さい。秋の深まる季節。老人と青年が語りあっています。

「四季の移り変わりの早いこと。年をとると、それが殊に早く感じられるものだよ」。そう言ったのは 75 歳の親鸞上人。25 歳の若い弟子の唯円に向かって語っています。倉田百三の『出家とその弟子』の一場面です。そして、その後で次のように述べています。

「この世は無常迅速というである。この無常の感じは若くても分かるが、迅速の感じは老年にならぬと解らぬらしい。もう一年たったかと思って恐ろしい気がするよ」

実は私も今 75 歳なので、この言葉が実感としてよく解るのです。過ぎてしまえば一年なんてアツという間です。68 歳で永観堂に入って以来、もう 7 年が経過しているのです。歲月は足早に駆け抜けていくのです。方丈記にいう川の流れのように。

人生 80 年から 90 年時代になろうか、という今、私たちが克服しなければならない課題。それは「貧困・病氣・孤独・無為」。一貧しさと病と、ひとりぼっちの淋しさと、何もすることがない、という悲しさ。

人間に“老い”は必ずやってくるのです。病院関係者が詠んだ川柳があります。

- ・「分からないことは老化と医者はいい」
- ・「無理やりに生かされている薬漬け」
- ・「カロリーを説く保健婦は太りすぎ」

そういえば、ある老人ホームの壁に「老化は走らないで、ゆっくり生きましょう」というポスターが貼ってありました。勿論「廊下は走らないで、ゆっくり行きましょう」のパロディーですね。誰もが老いることは初体験なのです。

「老いを知らぬは若さの高慢。病を忘れてるのは達者の油断。死を問わぬは生きている驕り」。自分自身の問題なのです。一日一日を大切に生きましょう。

79 無声の念仏 (2016/11/01)

浄土宗の年中行事の一つに「お十夜」という秋の法要があります。「この世で十日十夜良いことをすれば、仏さまの国で千年良いことをするより勝る」という教えに基づいています。昔は十日間勤めていましたが、近年では一日～二日に縮小されています。

もう 40 年ほど前、北海道の浄土宗の寺院 18 か寺で勤まるお十夜の法要の説教を本山から任命され、10 月 24 日から 1 カ月かけて道内を巡教したことがあります。道中、美唄市の沼貝寺さんへ赴いた時。当時の住職は高橋泰岳師というご老僧でした。喉の手術をされ、前日退院されたという住職の居間に挨拶に伺いました。父からの言付けもあったからです。ふとんの上に白衣姿の泰岳師にその旨を伝えると、返事が返ってこないのです。便箋大の紙になにかを書いて私の前に差し出された文は「ようこそ来て下さった。師匠はお元気か」とありました。手術のため声を失っておられたのです。しばらく筆談が続きました。

二日目の最後のご満座法要に、泰岳師は「わしも出る」といわれて色衣に七条の袈裟を着けられ、本堂正面の導師の座に座られたのです。参詣者は久しぶりに住職の姿を見て大喜びでした。

やがて法要が始まりました。勿論、住職もお経を唱えておられるが、声は出ません。いよいよ

よ法要の最後に住職が「願以此功德」と発声し、「阿弥陀如来十夜会广大慈恩」と回向の偈のあと念仏を十回唱えるのです。「どうされるのだろうか」と案じていると、隣に座っている息子さんが代わって唱えられました。そしてお十念の時、泰岳師は左手をさっと上げて息子さんを制されました。「それは俺がいう」という意志表示です。内陣に居並んだ組寺の住職さんも参詣者も息をのみました。声の出ない住職が念仏を唱える、というのです。

やがて、おもむろに合掌した泰岳師の口から出たのは「ハッ、ハッ、ハッ・・・」という息だけでした。堂内は静まりかえっていました。でもそれは、まぎれもなくナムアマダブという念仏の声でした。参詣者は普段の元気だった泰岳師の声を思い浮かべながら、涙をこぼして聴き入ったのです。私が今まで聞いたお念仏のなかで、最も尊いお念仏でした。その翌年、泰岳師はお浄土に還られました。

お十夜が来ると、あの「声のない念仏」を想いだすのです。

80 希望 (2016/12/01)

「希望という名のあなたをたずねて、遠い国へとまた汽車に乗る」

久しぶりにラジオで岸洋子さんの歌う「希望」を聴きました。この歌は年末に聞くとひとしお心に沁み入ります。呼びかけるようなこの歌を、私が初めて聞いたのは、昭和45年、30歳の時でした。この年にレコードが発売されて、大ヒットしたのです。その年のレコード大賞の候補にもなりましたが、人生には思いがけない出来事が起こります。ヒットの最中、彼女は膠原病という難病に倒れて、病院で生死をさまよいました。レコード大賞も逃しました。残念だけれど、生命には代えられません。

ところが、翌年の昭和46年、春の高校選抜野球大会の入場行進曲に「希望」が選ばれたのです。たくましく、伸びやかに行進する選手達の若々しい姿をテレビで見て、彼女の胸は熱くなりました。元気づけられ、ふたたび「希望」が歌えるようになりました。そして病と闘いながら、名曲「希望」を歌い続けたのです。人生における希望を、象徴的に語る歌ともいえるでしょう。歌手岸洋子にとって、掛け替えのないこの歌を生涯歌い続けて、平成4年12月、57歳でこの世を去りました。

人生は、長い道に似ている、といったのは徳川家康です。

「人の一生は、重き荷を背負うて遠き道を行くがごとし。急ぐべからず」

人の歩みにも起伏があります。喜びがあり、苦しみにも出会います。笑いや涙を道連れに、人は365日を一步ずつ進みます。そして、人はいくつになっても、荷物を背負って坂道を上っていかねばなりません。のんきに構えて動きを止めると、たちまち身も心も退化しはじめるから困ったものです。

「ゆっくり行くことを恐れるな。立ち止ることを恐れよ」という言葉もあります。

人生80年代を生きるには、安易な日々を求めず、力を尽くせ、ということでしょう。ここにいつも「希望」があれば、荷物を背負っても明るく暮らせるのです。

「そうよ あなたにまた逢うために あたしの旅は今また始まる」。

(「希望」 作詞・藤田敏雄 作曲・いずみたく)

81 新しい年を迎えて (2017/1/01)

平成二十九年の新春を迎え、謹んで至心に十念を誦し、併せて皆様のご平安を祈念いたします。

新しき年のはじめの初春の

今日降る雪のいや重^しけ吉^{よごと}事

おおとものやかもち いなば
大伴家持が因幡の国庁で詠んだもので、万葉集四、五一六首の最後を飾る歌です。年の初めに降る雪のように、良いことが積み重なることを願っているのです。特に昨年は熊本の震災を始め数々の不幸な出来事があったため、余計に難を転じて吉事が重なることを願わずにおれません。

私たちにとって「幸せ」とはなにか、と問いかけられた時、何と答えますか。

仏法には「幸福を育てる三つの田」という教えがあり、「三福田^{さんふくでん}」と呼ばれています。

第一は「敬田^{きょうでん}」。敬いの心を育てよう、という教えです。何を敬うかといえば、聖徳太子が十七条憲法で「篤く三宝を敬え」と述べられたように、仏さまと、仏さまの教えと、教えを信じる人々の集まり。これを仏法僧の三宝といいます。

第二は「恩田」。仏法では、父母の恩、人々の恩、天地自然の恩、三宝の恩を四恩と呼び、「おかげさま」で育てられていることに感謝する心です。

第三は「悲田」。貧しい人々や、今助けを求めている人に救いの手を差し伸べる行為をいいます。自分一人の幸せを願うのではなく、一人でも多くの人の幸せのために生きる姿勢が大切なのです。

生きて身を はちすの上に宿さずば

念仏申す甲斐やなからん

この西山上人のお歌を目標として、念仏とともに生き甲斐のある幸せな日暮しをいたしましょう。 合 掌

82 お釈迦様の遺言 (2017/2/01)

数年前、永観堂に秋篠宮さまがご来訪なさったことがあります。勿論、公務でなく、いわばお忍びのご訪問でした。京都国立博物館の佐々木館長を案内役として、永観堂所蔵の「仏涅槃図」を見たいというご所望でした。京都国博に委託されている他の涅槃図4点と、当寺所蔵のものを広間に掛け並べてご覧いただきました。その時に

「宮様は、どうして涅槃図に興味をお持ちなのですか」とお尋ねしたところ、

「涅槃図に多くの動物が描かれていて、制作年代や作者によって動物の種類や表情が異なっています。それに興味を惹かれて調べております」というご返事でした。さすがに幼い頃か

ら動物好きで「なます殿下」の愛称で親しまれている宮様であるなあ、と感心しました。

ところで、私の好きな俳句に次の作品があります。

泣いて生まれ泣かれて逝くや涅槃雪

作者はわかりません。涅槃雪というのは、釈尊が入滅された旧暦2月15日頃に降る雪のことを言い、冬の終わりに降る雪なので「名残り雪」とも「忘れ雪」ともいいます。

人間はすべて「オギャア！」と泣いて生まれ、家族親族に看取られ泣かれて、この世を去ってゆくのであり、お釈迦さまもまた無常の世を示すために80歳で入滅された。折から春のなごり雪が降っているよ、という俳句です。

涅槃とは、パーリー語（インド俗語）でニルバーナの音訳です。「生命の燈火が吹き消された状態」をいいます。ですから仏教徒は釈尊の死を「入滅」とか「入涅槃」というのです。

80歳になられた釈尊が、生まれ故郷のクシナガラで最期を迎えようと、「最後の旅」をされる途中、鍛冶屋の青年チュンダが差し出す供養の食事の中のキノコが原因の食中毒を起こし、沙羅双樹の林の中に横たわり、弟子達に最後の説法をされました。その時にチュンダが後悔しないようにと気を使い「自分が頂いた供養の食事の中で、最も功德が大きく嬉しかったのは、悟りを得る直前にスジャータという村の少女の乳粥と、涅槃直前のチュンダの施食である」と告げられたのです。

「自らを島とし、他を抛り所とせず。法を島とし、他を抛り所とすることなかれ」（自燈明・法燈明）と説き、「すべての事柄は滅びゆくものである。倦むことなく修行を続けなさい」。これが最後の言葉でした。

83 同行二人 (2017/3/01)

「月日は百代の過客にして、行きかゝ年もまた旅人なり」

ご存じのように「奥の細道」の冒頭の部分です。～月日というものは永遠の旅人であって、過ぎ去ってはやってくる年もまた旅人である～、という意味です。

松尾芭蕉が“奥の細道”の旅に出たのは、元禄二年（1689）弥生も末の七日。つまり旧暦の三月二十七日。親しい人に見送られて千住まで舟に乗って行き、そして前途三千里の思いに胸をふさがれて、幻の巷に別れの涙を注いだりします。

「船の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり」。と格調の高い文章が続きます。

～人生は旅である～

この思いこそ毎日の生活を送る上で、大事に温めたいことなのですね。ただ安易に、いい加減に日々を送っていると、何の精神上の収穫をも得ることはできません。行き先のある人生、目的のある人生でなければ、人は淋しくて人間らしさに欠けます。芭蕉の言葉は「一日一日を大切に送らなければならない」ことを教えてくれているのです。

そして、人生は「出会いの旅」でもあります。出会いがあり、別れがあり、また出会いがある。そこから生まれる喜びや悲しみが、私達の人生を豊かに彩ってくれるのです。

「同行二人」という言葉があります。「どうこう・ふたり」ではなく「どうぎょう・ににん」

と読みます。四国の八十八か所霊場を巡拝するお遍路さんの傘に書いてある言葉です。

同行というのは、信仰を同じくする仲間であり、二人というのは、いつも弘法大師と二人連れということです。遍路というのは春の季語です。菜の花畑を縫うように歩く白装束のお遍路は四国の春の風物詩です。「お遍路が一行に行く虹の中」これは渥美清さんの句です。

詩人の大木敦夫さんは遍路の風景を次のようにうたっています。

「河は流れ 山は青み/ 菜種咲きて霞む遠野/ み寺めぐる人ら行きて/ 阿波の春よ 鈴は鳴りつつ」

人生を遍路する私たち。その旅路を心から信じあえる人、「同行二人」と呼べる人が一人あれば、人生の旅は決して孤独ではなくて、安らぎと幸せに満ちた豊かなものになるはずで。そんな人はいない、と嘆くなかれ。仏さまはいつも見守って下さっているのです。

りゅうじょ

84 柳絮飛ぶ (2017/4/01)

新天地拓くごとくに柳絮飛ぶ 遠藤睦子

春四月。柳が葉を伸ばす前に、白い綿毛のついた小さな種が春の風に乗って空に舞います。いかにも春らしくて、心をのどかにさせる光景です。初々しいところは新入社員に喩えられるでしょうか。

俳句では、この柳の白い綿を「柳絮」と呼んでいます。柳絮の白い綿毛が静かに流れる中に身を置くと春うらら。些細なことは一切消え去って、情感に満ちたひと時がこころを安らげてくれます。しかし、柳絮に込められた柳の親ごころは、そんなのんびりしたものではないようです。それは、新天地を求めての命がけの出発なのだそうです。

柳は好んで石のゴロゴロした、カンカン日の当たる土地に根を張って樹林を作ります。柳絮は荒地を緑化するパイオニアだと言われているのです。冒頭の句は、そういう柳絮の景色がうまく詠まれています。この時期は、学校を卒業した若者が社会人として旅立つ時期であり、新たな出会いの季節でもあります。希望に胸を膨らませながらも、不安をかかえていることでしょう。柳絮のパイオニア精神に学んで、生き甲斐のある自分の道を見つけたいものです。その為の証しとして三つの「気の持ち方」が問われています。

その一つは、生きていて良かったという実感があるかどうか。

二つ目は、人や物に「有難い」という感謝の念が持てるかどうか。

三つ目は、「自分はやるぞ！」という、やる気があるかどうか。

が決め手だといわれています。

生き甲斐というのは、しあわせの代名詞といってよく、それを手に入れるためには、これから何かをしようとする仕事、今自分がかかわっている仕事を天職と心得て、それに最善を尽くして努力することじゃないでしょうか。

「東へも、西へも行かんと思ひ、ひと足ずつ運ばば必ず行きつくものなり」

これは江戸時代の仮名草紙作者で、深く仏教に皈依した鈴木正三（しょうさん）という人の言葉です。荒地を求め旅する柳絮のパイオニアに学びたいですね。

85 かい こう 邂逅 (2017/5/01)

良寛さんといえば、自然やこどもたちと一緒にあって、毬つきやかくれんぼに一日を暮らした親しみのある和尚さん、という印象ですね。その良寛さんが74歳で亡くなる少し前に詠まれた歌があります。

*いついつと 待ちにし人は 来たりけり 今は相見て何か思はむ
なんと、これが恋歌なのです。

宝暦8年、出雲崎の名主の長男に生まれた栄蔵は、出家して良寛と名乗り、34歳で諸国行脚の旅に出て、39歳で越後に戻り、以後35年間を山中や里での独居生活を送ります。

ところが、最晩年の3年余りの年月は、明るく充実した日々だったのです。70歳を過ぎた頃、30歳の貞心尼という女性が歌の弟子として良寛さんの前にあらわれます。

*君にかく あい見ることのうれしさも まだ覚めやらぬ夢かとぞ思ふ

貞心尼が初めて良寛さんに会った時の喜びを歌っています。「良寛さま。あなたにこうしてお会いできた嬉しさは、まだ醒めやらない夢のようですね」と素直な喜びを表現しています。良寛さんも、いつかこの貞心尼の訪れを心待ちにするようになりました。「いついつと」の歌は、病気がだんだん重くなった良寛さんのもとへ駆けつけた貞心尼に対して詠まれたものなのです。「いつ来てくれるだろうか、と心待ちにしていた貞心よ。やっと来てくれたのだね。今こうして会うことができた喜びの他に、一体何を思うことがあるだろうか」

老いてなお枯れずに、人を恋うる瑞々しい心を持ち続けて、それを素直に歌に詠まれる良寛さん。そんな晩年の良寛さんに、貞心尼のような美しくて優しい女性がいたことが、なんとも嬉しく思われます。

人は皆、出会いの糸のつながりによって結ばれています。その人と出会うことで人生まで変えてしまうような、そんな出会いを「邂逅」といいます。人が何と誇ろうと、40歳も年の離れた良寛さんへの愛を貫き通した貞心尼は、臨終間近の師に次の歌を詠んでいます。

*生き死にの 境離れて 住む身にも 避(さ)らぬ別れの あるぞ悲しき

これに対して良寛さんは次の辞世の句

*裏を見せ 表を見せて 散る紅葉

を遺して、貞心尼に看取られ浄土に旅立ったのです。

86 鑑真和上を偲ぶ (2017/6/01)

青葉若葉の美しい季節になって、ふと奈良の唐招提寺の開山・鑑真和上を思い出していると、タイミングよく唐招提寺さんから毎年恒例の舍利会（開山御諱）法要の御案内をいただきました。

天平5（733）年、遣唐使船で入唐した栄叡・普照という二人の僧の役目は、授戒の為の戒師を日本に招くことでした。二人の熱心な要請を受けた鑑真和上は渡日を決意し、十数人の弟子とともに海を渡ることにしますが、さまざまな困難や妨害にあって5度の渡航計画に

ルナールのこうした作品に接していると、ものをそのものとして見るのではなくて、ものに夢をふくらませて見る目が、いかに大切か。その目が日常生活をいかに潤いのある豊かなものにするか、がわかります。

仏教の經典に「柔軟心（にゅうなんしん）」という教えがあります。「無理に飾ることのない、柔らかなところ」という意味があります。夢のある、こころ豊かな人間であるためには、

こころが柔らかいこと。こころが柔らかければ、自然に笑顔も浮かびし、愛情あふれる言葉もでてくるのです。それは綺麗なものを見れば綺麗と感じ、素敵な人に出会えば、素敵と感じるところです。

88 平常心 (2017/8/01)

ある銀行の頭取は、いつも若い行員に次の五つの言葉を教えておられたそうです。

「おこるな・いばるな・あせるな・くさるな・まけるな」。

行員たちはその言葉の頭文字を取って「おいあくま」と呼びました。確かに、この五つは人間をだめにする「悪魔」です。そして、その中心は「あせり」でしょう。内心の焦りが外に顕れると「怒り」になります。感情のままに怒りを爆発させて、せっかく築いた良好な人間関係を崩してしまうこともあります。また、怒られるのはいやだから、周囲の人はその人を敬遠するでしょう。彼はそれをいいことにして、威張るようになります。また、焦りが内向すると自信をなくして、自分の心を腐らせてしまいます。そして結局、自分で自分に負けてしまうのです。

私たちは忙しさのために、どうしても焦りがちになります。焦りが多くの事故の原因になっていることを良く知っているはずなのに、なかなかこれを抑えることができません。

心にゆとりのある人は、よく忍ぶことができます。考えることも、待つことも、許すこともできるはずです。

仏教に「平常心是道」という教えがあります。平常心は「へいじょうしん」または「びょうじょうしん」とも読みます。普段の気持ちがそのまま仏道に通じる、という意味です。

スポーツの試合などで、緊張している選手に対して監督が「平常心で行け！」とアドバイスすると効果があるようです。

人の心は、形がないだけに積極的になったり消極的になったり、つかまえどころがありません。コロコロ動くから「こころ」というのです。今年の名古屋場所で39回目の優勝を果たした横綱・白鵬関はインタビューで「いつもと一緒だ、と言い聞かせながらやりきりました」と述べています。つまり、平常心で勝ち取った優勝といえるでしょう。

周囲から信頼され、好かれる人というのは、いつも平均して心が和やかで安定しています。いたわりの心で仲間の苦しみを、共に分かち合ってくれます。なんとなく側にいて欲しいと思える人は、いつも平常心のままで堂々と生きています。

普段通りの心で、堂々と生きていけたら、どんなにか気持ちがいいでしょうね。

89 曼珠沙華 (2017/9/01)

今年の夏は例年になく暑い日が続いて、そして今度は一転して雨……。こんな不順な気候であっても、秋の彼岸が近づいてくると、不思議な緑色の茎がまっすぐに伸びてきて先端の蕾が膨らんで、赤い花が開いて、「さあ、お彼岸ですよ！」と毎年教えてくれる彼岸花。インドの古い言葉（梵語）では「マンジュシャカ」。音写して曼珠沙華。「天上の赤い花」という意味があります。

葉のない茎に怪しく火のような色で、田んぼの畦や、どういう訳か墓地に群れて咲きます。水仙やアマリリスと同じ種類ですが、球根は食べられないといわれています。一説によると、実際は食べられるのだが、さわると手が臭くなるので「手くされ」と呼んだり、あえて墓地に植えて「葬礼花」「死人花」「幽霊花」と呼んで人が不吉な思いをするようにしたのは、風水害や飢饉の時の非常食にするためであった、というのです。

正岡子規の数少ない小説の中に、『曼珠沙華』というのがあります。金持ちの息子と、ひどく貧しい家の娘との恋物語です。ある日、娘は傾く西日に赤い毛氈のように咲く曼珠沙華をつんで糸に通していました。「この花が好きだ」というのです。男は驚いて聞きました。

「それは葬礼花、死人花じゃというて人のいやがる花じゃないか。葉も枝もなんにもものうて、それが好きかい？その誰でも嫌う花が・・・」

娘は答えました。「そうじゃけん、可愛がってやるのじゃが」

娘も貧しさゆえに人から嫌われていたのです。貧しさや、姿かたちの醜さゆえに憎まれたり、嫌われたりすることが、どれほど堪えがたいことであるか……。だからこそ娘は彼岸花に愛おしさを感じていたのですね。

曼珠沙華抱くほどとれど母恋し 中村汀女

お彼岸のお彼岸花をみ仏に 種田山頭火

お彼岸は自然を讃えて生物を慈しんで、祖先を敬って亡き人々を偲ぶという期間であり、昼と夜の長さがほぼ同じで、太陽が真東から昇って真西に沈むことは御存じの通りです。そんな自然現象になぞらえて、左右いずれにも偏らぬ中道を歩む仏道実践の週間でもあるのです。そして、あなたの命につながっているご先祖や親の命を、ぜひ偲んでいただきたいものですね。

ふるさと

90 故郷に契りし友に (2017/10/01)

京都、紫野大徳寺の開山・大燈国師は私の生まれ育った網干に近い揖保郡太子町のお生まれです。その大燈国師の言葉。

「億劫おくこうあい相別れて、しかも須臾しゅゆも離れず、尽日じんじつ相對して而も刹那しかも對せず」

意識すれば、たとえ離ればなれになっても、心は少しの間も離れていない人がいるかと思えば、一日中会っていても、心はまったく通じ合っていない者もいる、という意味です。

釈尊の弟子の阿難は、いつも師匠のそばに仕えていながら、なかなか悟れなかったのですが、ある日、釈尊のお顔をパッと見た途端、そのお顔が光輝いているのを見て思わずニコッと微笑んだのです。それが釈尊の目にとまって心が通じ合い、とうとう阿難は一人前の弟子になりました。人と人の心が、たとえ言葉を交わさなくてもピタッと一致して、気持ちを通じ合うということがあるのです。

また釈尊が入滅される時、阿難にこう言い残されました。「私の肉体は滅んでも、私の教えは汝の心に生きているではないか。だから決して寂しがることはないのだよ」。こういう関係を「億劫相別れて、しかも須臾も離れず」というのです。その反対に、立派な先生や友人、家族と長年寄り添っていても、心が少しも通じ合わないという人もいます。

法然上人のお歌に、「生まれてはまず思い出ん故郷に契りし友の深きまことを」というすてきな歌があります。たとえ死に別れたとしても、浄土でまた会おうと約束したあなたの深い真心を忘れませんよ、という歌です。

良寛さんが貞心尼に与えた同様の歌があります。

「靈山（りょうぜん）の釈迦のみ前に契りてし ことな忘れそ世は隔つとも」（インドの靈山で釈尊が説法されていた時に、あなたと私は次の世でも再会しようとして約束したことを、私はどんなに離れていても決して忘れないよ）。これに対して貞心尼の返歌は

「靈山の釈迦のみ前に契りてし ことは忘れじ世は隔つとも」。

たった二文字しか変わらない歌ですが、良寛さんを心から慕い、「どんなに離れていても次の世で必ず会いましょう」という歌です。信仰に結ばれたものは、必ず浄土でまた会えるという二人の強い絆が感じられます。

「億劫相別れて、しかも須臾も離れず」という出会いを大切にしたいですね。

91 聞 施（もんせ）（2017/11/01）

問題・奈良の興福寺所蔵の阿修羅像の顔に、耳がいくつあるでしょうか？（正解は最後に）

生活があわただしくなると、しみじみと会話を楽しむ機会も少なくなりましたね。相手が一方的にしゃべったり、こちらがつい演説してしまったりして、話が一方通行になってしまいがちです。困るのは、テレビや新聞で知った知識や情報を、あたかも自分の意見のように語る人の多くなっていることです。それよりも、自分の心や感情を懂れを込めて語れば、会話は自然に生き生きとしてきて、さわやかなものになるでしょう。そのためには、素晴らしい「聞き役」が必要です。それは、どんな人でしょうか。

話している人を愛している人。あるいは母親・恋人・・・。

母親は子供のいつ果てるともしれないおしゃべりを、楽しそうに聞いてくれます。愛する人の口から出る言葉は、すべてカラフルで甘い心地良さで、耳に吸い込まれてしまいます。

尊敬する人の語りも聞き飽きませんね。為になって、自分一人に語ってくれること自体が嬉しいことです。

好きでもなく、尊敬もしていないのに、相手が力を持っている人だから、聞き役に回らざ

るをえない。そんな時は地獄ですね。相手の教養のなさ、品の悪さ、使う言葉の乏しさを知りながら、時に愛想笑いをして相槌を打つ。これはもう苦行です。

しかし、今困っている人、助けを求めている人に対して救いの手を差し出すことはできなくても、その人の悩みを素直に聴いてあげることができます。悩みを抱えている人にとっては、心の内を聞いてもらうだけでも大きな救いになるのです。私はこれを「聞施」（もんせ）と呼んでいます。笑顔（和顔施）や愛情ある言葉（愛語施）があるように、「聞く施し」もあるのだ、という意味の私の造語です。

いつまで話し合っても楽しくて仕方がない。また、どんな悩みも打ち明けることができる。そんな友人を持てば、その人の人生はもう最高です。お互いに五分と五分。たがいに相手の人格を尊重し合って、共通の話題の多い話相手。仏教では、そう云う人を「善知識」と呼んでいます。善導大師は「菩提まで眷属して、真の善知識とならん」と述べられています。「人間として完成するまで、お互いに良き先生と成りあいましょう」という意味です。そういう話相手を大切にしたいものですね。

（冒頭の答えは「4つ」です。3面ですから本当は6つでしょうが、彫刻されているのは4つです。阿修羅は4つの耳で人々の喜びも悲しみも聞き届けてくれているのです。）

92 山茶花讃歌 （2017/12/01）

寺庭の夕静ゆうしずあゆみ寒けきに目にとめて見つ白き山茶花 （木下利玄）

永観堂の紅葉は盛りを過ぎましたが、師走に入っても境内全体が紅に彩られて見事です。そんな全山紅葉の境内の中で、大玄関の前に一本だけ、白い山茶花の花が咲いています。冬の始めから咲き続けてきた白い花が、ようやく盛りを越えてハラハラと緑の苔の上に散り敷いています。綺麗に掃き清められた後の庭に、風もないのに三ひら四ひらの花びらの残る風情には、なんともいえない落ち着いた美しさがあります。

掃きてすぐ又散るさざんか乙女色 （作者不詳）

他にめぼしい花がない頃に咲くことから、この頃庭木や垣根に育てている家が方々にありますね。艶やかな緑色の葉に浮き上がって、白い花は白い花で美しく、乙女色という淡い紅色のそれも又それなりに美しいものです。

「春に先駆けて咲くのが梅の花ならば、サザンカはその年の終わりを惜しんで咲いてくれる花かもしれない」と、作家の平岩弓枝さんが書いておられます。八つ手の花の白は淡すぎて、小菊の黄色はもう色あせて、椿の蕾はまだ固い。花の乏しい時の山茶花は貴重です。

山の茶の花、と書いてサザンカ。山の茶の木に似ているから、そう名付けたのだといわれています。日を追って弱まる日射しの中で、今年最後の花のように、ひとり山茶花の花が咲いている。平岩さんは、若い頃は梅の花の方を好んだそうです。梅がほころびると春が近い。それを嬉しく思っていたけれど、近頃はサザンカに愛着を感じるそうです。

「一年の終わりを飾る花を好きになるというのは、やはり年齢のせいかもしれない」と述べておられます。分かりますねえ。『御宿かわせみ』など多くの著作で知られた平岩さんは、

御年85歳。私より9歳年上ですが、この言葉に全面的に共感します。

これから木枯らしが吹き、晩鐘が冷やかに鳴る。そんな季節に向かって、健気にも咲く山茶花は、嬉しくも愛しい花です。

「二度とない人生だから 一輪の花にも無限の愛を」

坂村真民さんの詩の一節です。私達に一瞬一瞬の命の尊さを、白い花が教えてくれているのです。

93 平成三十年 年頭の言葉 (2018/1/01)

煩惱は百八減ってけさの春

この句の如く、希望に輝く平成の三十年となりました。慈光の内に生かされている身である私たちは、過ぎしことに執着せず、まだ来ぬことに取り越し苦労をせず、ただ日々報恩感謝の気持ちを持って、己が与えられた業にはげみましよう。

戌(犬)歳の年頭にあって思い出すのは、子供の頃の正月に必ず遊んだ「いろはカルタ」の最初の「犬も歩けば棒にあたる」の一句です。この言葉の解釈は二つに分かれています。一つは「やってみると思わぬ幸運に会う」という意味であり、もう一つは反対に「何かやると災難に会う」という意味です。今は先の方で使われることが多いので、やはり幸運説を取り、なにごととも積極的に行なう年にしたいものです。

その為に今年の生き方の目標として、二つの徳目をお勧めします。

その一 三宝を敬うことを心の習慣にする。

聖徳太子が十七条憲法の第二章で「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧これなり」と示され、この思想が以後の日本仏教の基礎となっているのです。

その二 三感王を目指す。

三感王とは「恩を感じる」感恩。そして感謝・感動をいいます。私たちは、さまざまなご縁と御恩をいただいて、今この世に生かされています。その御恩に対して「ありがとう」と感謝する。そして、生かされている命の不思議に感動する。これを「三感王」と言うのです。

「恩を感じ、恩に報いる」という心呼びさまし、生活のなかに「おかげさま」の心を育てたいものです。恩を忘れた日々は、とげとげしく陰鬱であり、恩に目覚めた生活は、明るく朗らかです。

三感王を目指して「生きて身を蓮の上に宿さずば、念仏申す甲斐やなからん」と西山上人が勧められた、喜びの念仏の生活を送らせていただきましよう。合掌十念

94 供養 (2018/2/01)

元文化庁長官で心理学者の河合隼男先生(2007年没)が、かつて書いておられた話です。

「世の中には働きたいと思っても働けない人もいるし、身体や精神の障害があるために、なかなか働けないという人もあります。ある病院に入院していて、その病院の中での軽い作業ならできるといふ人が、次のようなことを言われた。

『自分は最近母をなくしました。今、自分は何の収入もないので、亡くなった母に何もしてあげられません。けれど、病院の中の作業でお年寄りのために、オムツをたたむという仕事くらいならできます。その、オムツをたたむ仕事をしている時、オムツの一つ一つを扱うのが母への供養だと思ってやっているのです』というのです。

この方の母を思う気持ちの深さに打たれたけれど、それに加えて思ったことは、この病院の中で、おそらく寝た切り等と言われている年寄りの方々が存在するだけで、この青年の母への供養に貢献しておられるということです。」

なにもせずに寝ていてオムツを替えてもらっているだけ、と思う人もあるだろう。けれど、そのようなお年寄りの一人一人の魂が、母を亡くした人の心を慰め、その供養に日夜参加している、というイメージが見えてきます。

世話をされているだけではないのです。世話をしている人の供養に参加しているというのです。毎日働けるのは有難いことです。それによって私たちはお金や物や多くのものを得ています。けれど「誰かの供養のために、本当に参加する、などということをしているだろうか、」と河合先生はおっしゃるのです。

「もし仏子、一切の疾病の人を看ては、まさに供養すること、仏のごとくなるべし」とお経のなかに説かれています。仏子というのは、仏の教えを信ずる人、仏弟子、という意味があります。

「仏弟子たちよ。病気の人を看るには、仏に供養するように介護するべきである」と釈尊は述べられているのです。味わうべき言葉だと思います。

95 百花繚乱(2018/3/01)

私は今年で七十七歳、世間でいう「喜寿」です。それにしても人間、美しく年を重ねるといのは難しいことですね。

かつて谷川徹三という哲学者がおられました。平成元年に九十四歳で亡くなったのですが、亡くなる直前まで仕事をしていた、と言われています。難しい哲学を普通の言葉で書ける方で、哲学や文芸評論に幅広い活動を続けられました。眉は長く、眼光鋭く、髭を蓄え、背筋はしゃんと伸ばし、大変お洒落な方でした。健康のことから、コーヒーが胃に良くないという話になった時、「混じりもののない、本物のコーヒーを飲みなさい」とピシャリという人でした。

この方の著書の中に「九十にして惑う」というのがあります。この題名が愉快ですね。論語では「四十にして惑う」といい、四十才を「不惑」というのですが、四十どころか卒寿という九十歳にしてなお惑う、というのです。この本の後書きにこう書かれています。

「私は生涯を通じて、いつも少年の時と同じように考えたり、感じたり努力をしてきた。本能的に、円熟の人になるまいと心がけてきた。」

これが谷川徹三という人の「老いない人生観」なのですね。自己に対する飛び越えた厳し

さ。花信風法話 癌を乗り越え、心をピカピカに磨き上げるその物凄さ。私達も、人生の最期にたどり着いた時、「自分はこの世でやるだけのことはしてきた」と言い切れる、生き甲斐のある生き方をしたいものです。

今この言葉をここに書いたのは、平昌五輪での日本のメダリスト達の姿が眼に焼き付いているからです。激しい練習に耐えながら「百花繚乱」を目標に、見事に花を咲かせた選手たちが自らの努力の成果を驕り誇ることなく、コーチや応援の人々への感謝の思いを謙虚に語る言葉に感動します。金銀銅の三つのメダルを獲得した高木美帆さんは「たくさんの方々の力があって、この結果につなげることができた。感謝の気持ちで一杯です」と述べ、羽生結弦さんも「皆さんの応援と共に獲れたことが金メダルの価値を上げてくれた」と言っています。仲間たちとの出会いだけでなく、多くの人々との出会いを大切にしている彼らは、メダル以上に輝いています。

「花の香りは風に逆らいて薫らず、されど良き人の香りは風に逆らいて薫る」
法句経の教えです。

96（最終回） 卒業(2018/4/01)

まだ何も書かれていない予定表 なんでも書ける これから書ける 俵万智

今年も我が母校・県立姫路南高校の卒業式に招待され、同窓会長として出席しました。卒業を英語で「commencement」というのですが、これには「開始」「はじまり」という意味もあるのです。つまり、卒業は終わりではなく、新しい人生の始まりでもあるのです。毎年、来賓を代表して卒業生に祝辞を述べるのですが、今年は次のような言葉を餞（はなむけ）に贈りました。

「若者よ、夢と希望を持って、とは昔から言い慣わされていますが、夢を実現するために必要なことは、やる気・根気・勇気・元気という四つの気です。中でもやる気が起きるのはどんな時かというと、

- 1、目標がある
- 2、好奇心がある
- 3、やり遂げた達成感がある
- 4、やればできるという自信がある
- 5、褒められたり認められた時

にやる気が起きるといわれています。しっかりした目標を持ち、好奇心を失わず、達成したら更にハードルを上げ、人生をあきらめず、今をはつらつと生きる努力をすれば結果はどうであれ、誰かが必ず認めてくれるのです」。

こんな風に語りかけましたが、半分は自分自身に言い聞かせてもいるのです。いずれにしても、どんなに環境が変わっても「必要とされる人」でありたいものです。

ところで、その私自身ですが、8年間務めあげた本山の管長職を卒業して、5月28日に

永観堂を去り、姫路にある自坊の大覚寺に帰ることになりました。特別になにか大きな仕事をした訳ではありませんが、唯一つ自慢出来ることがあるとすれば、8年の任期中、病気で寝込んだ日が一日もなく、与えられた公務を充分とはいえないまでも、ほぼ100%成し遂げたことです。中でも永観律師900回忌・法然上人800回忌・源信和尚1000年忌の法要の導師を無事務めあげられたこと。また、全日本仏教会の副会長として、韓国で開催された世界仏教徒会議において、日本仏教界を代表して英語でスピーチしたことも忘れられません。今日まで随分多くの方にお目に掛り、また宗務所はじめ多数の方々に大変お世話になりました。ご厚恩に対し深くお礼申し上げます。このホームページをご覧いただいた方々にも感謝いたします。有難うございました。ともあれ、お別れです。

「思えばいと疾し この年月。今こそ別れめ いざ、さらば」

＝おわり